

つた。併しよく調べて見ると、尼瀬の方が數年以上早く建てられたもので、決してドレーク井の眞似でないことが明白になつた。同時に、ドレーク井の記念碑が築山式になつたのは、タイタスヴィルの人が歐羅巴漫遊中に獨逸で見た或る記念碑の形を撮影して歸つて、これを模型として造つたと云ふことも知れた。恐らく獨逸の其の記念碑が、日本の型を採り入れて居たのであらう。

今一つ、ドレークを記念するものに、ドレーク集古館がある。此處には、ドレークの使用したビット、鑿井技師の使用した鍛冶用の鐵床、或ひはドレークが病中約二十年間に互つて使用した安樂椅子等の思ひ出深いものから、創草時代の井戸櫓の模型、油砂の標本、油井の記録、油井分布圖、當時の新聞雜誌等で参考になるものなど、種々のものが保存されて居る。

これを建てた人は、タイタスヴィルの住人のエー・シー・ベルと云ふ人である。ベルは石油工業が非常な勢で發展して行くのを見て、其の創草時代の記録、使用した道具等を蒐集して後世に残すことを頗る興味深きことに感じて、千八百七十二年頃から蒐集を始めた。其の後、ドレーク記念碑の建設に暗示されて、ベルも其の蒐集したものを納めるドレーク記念館の如きものを造つて公開しようと考えた。併しこれとても、金の要ることであるから中々希望通りのものは出来なかつた。漸く千九百十一年にタイタスヴィルの南方の郊外にごく小規模なものが出来上つた。現在は知らぬが、千九百二十一年、著者が參觀した際には、手入れも行き届かず、相當亂雑な物

置のやうな觀があつた。併しこれが里人を刺戟してドレーク井跡の保存が實行されたのであるから、ベルの功績も没却出来ないわけである。

今日ではオイル・クリク地方は油田地としては全く見る影もなくなつては居るが、タイタスヴィル町附近は石油工業の聖地として、此の地に杖を曳いて石油工業の創草時代を偲び、石油工業の開祖の墓前に額づく人が頗る多い。數年前のことであるが、英吉利の英波石油會社が十萬弗の金を出して、此のドレーク井跡附近を公園にする計畫があるとアメリカの雜誌に出て居た。果して實行されたかどうか分らぬが、兎も角、かう云ふ話があるのを見ても此の地が如何に世界の石油業者から敬意を拂はれて居るか窺はれるのである。

デューチ・ビセルの略傳

石油工業の開祖としての名譽はドレークに與へられて居るけれども、其のドレークを石油工業に導き入れ、ドレークに仕事を授けたデューチ・ビセルも亦、石油工業に取つては決して忘れることの出来ない人物である。

ビセルは千八百二十一年十一月八日、ニュー・ハンブシャー州のハノヴァーと云ふ所で生まれた。十二歳の時、父を失つたため、若い時から獨立力行、一弗の金も他人から恵まれずに勉強した。大學に入るころには、

新聞雜誌などに寄稿して學資を得たものである。廿五歳の時、即ち千八百四十五年にダートマス大學を出てから、千八百五十三年まで八年間、南部のニュー・オルレアンスで新聞記者に教育事業に關係して居つた。千八百五十三年に健康を害し、郷里に近い地方に住居する必要から紐育に来て辯護士を始めた。丁度、此年のことである、彼が久し振りに母校ダートマス大學を訪れて、クロスビー教授から石油を見せられ、石油事業を思ひ立つたのは。

次で其の翌年、即ち千八百五十四年に世界最初の石油會社を組織した。

而してドレークの成功を聞くや、ピセルは仲間の者とオイル・クリーク地方に逸早く地面を契約し、次でフランクリン・ペトロリアムセンター等に製油所を開き、巨大の富を造つた。

晩年は其の富に依つて幾多の銀行、會社の重役となり、堂々たる實業家として羽振りをきかせたものである。

此の點、ドレークの薫條たる晩年とは月曜の差があるわけである。

千八百八十四年十一月十九日、六十四歳で紐育の住宅で永眠した。

四 オイル・クリークの盛況に續くアメリカ石油工業の盛況

アパレシア油田の開発

オイル・クリークの盛況に刺戟されて、全亞米利加は石油事業熱に浮かされた。苟しくも石油光候のある場所と云ふ場所は悉く探し出され、集ひ來る事業家の試練を経たものである。併し最初の十五ヶ年間ほどはペンシルヴェニア州以外には、石油らしいものは殆ど出て來なかつた。

ペンシルヴェニア州では、オイル・クリークを中心として近い所から追々遠い所と、段々に數多の油田が開拓され、其の産額はドレーク井成功の年から十五年目の千八百七十四年には一千万噸に達したほどの發展振りであつた。そしてその頃には、油田の開拓はペンシルヴェニア州域を越え、北は紐育州に入り、南はウエスト・ヴァージニア州にも及んで居つた。

元來、ウエスト・ヴァージニア州では製鹽工業の經驗を持つ關係上、ドレーク井成功と同時に逸早く石油の探掘

に着手したから、今少し早く發展すべきであつたのである。然るにそれが、偶々勃發した南北戦争のために、石油タンクは焼き捨てられ、井戸は破壊されると云ふ有様で、散々に出鼻を挫かれてしまつた。それ故、此の州では、この戦争の終了後の千八百六十五年から改めて出直しと云ふ形になつたので、興隆が甚だしく遅れたのである。だが、やがて程なく、ペンシルヴェニア州に次ぐ有力な産油を持つ州となつた。

油田の開拓はウエスト・ヴァージニア州より更に南に進み、オハイオ州、ケンタッキー州、テネシー州に進んだ。北は紐育州から、南はテネシー州に至るまで延長六百哩、幅五十哩の間に澤山の油田が開發された。これら油田の出來た區域は凡てアパレシア高原區域であるから、全體を指してアパレシア(Appalachian)油田と呼ぶことになつて居る。この油田の出來た區域こそは、十九世紀の前半に製鹽工業を行つた場所であつて、それから半世紀後には其の同じ場所に、石油工業が興隆したと云ふことは、誠に以て面白いことである。

云ふまでもなく此のアパレシア油田は世界最初の油田で、十九世紀の大部分を通じて、即ち千八百九十八年に露西亞のバクウ油田に凌駕されるまでは世界一を誇つて居たものである。従つて世界石油工業初期の産額は、大部分この油田からのものであつた。此の油田の産額の十九世紀間に於ける最高記録は千八百九十一年の三千六百萬噸であつた。一州としての最高記録はペンシルヴェニア州が同じ年に三千五百五十萬噸を擧げたことである。要するにペンシルヴェニア州の最高記録の年が、油田全體としての最高記録の年であつたわけである。又、ペンシ

ルヴェニア州は夙くから石油を出しましたが、同時にアパレシア油田中格段に多量の石油を出した州である。ペンシルヴェニア州に次いでウエスト・ヴァージニア州、紐育州、オハイオ州の順序で、ケンタッキー州は其の當時は全く不振で、比較的近年に至つて産油を増加して居る。テネシーに至つては、問題にならぬほど少量である。次にアパレシア油田の石油は燈油、ガソリンの製造と云ふ點からは、實に世界一の良質油である。世界の石油工業が此の地方に興隆したのも、石油の性質が、當時の要求であつた燈油を容易に且つ多量に製造し得るものであつたことにも原因して居るであらう。

ガスを得んとして大油田を得た話

右のアパレシア油田に次いで重要な發展を遂げたものは、千八百八十五年から興隆し始めたオハイオ州のライム(Lima)油田である。

オハイオ州では、州の東南部のアパレシア高原に屬する方面に、アパレシア油田の一部として少量ながら石油を産出する場所が出來て居つた。一方、眞反對の位置にある北西部のライマ地方にもガスを噴出して居る個所があつて、これまた石油熱に煽られて一時は盛んに試掘されたが、凡て不成功に終つてしまつた。それがため、此

の方面は石油事業から全然見離されて居たものである。

然るに千八百八十五年に、ガスを目當てに掘られた井戸が石油を出したのを動機に、ライマ地方は一大油田となつて、十年後には約二千萬噸の産額となり、アブレシア油田に拮抗するほどの大油田となつた。この油田の興隆は偶然の機會からではあつたが、油田となるまでには石油事業として面白い経験が積まれて居るから、其の顛末を簡単に紹介しよう。

前に述べたやうに、石油の試掘には失敗したが、多少でもガスが地下に在ることは確實であつた。併しガスの利用を知らなかつた時代であるから、其のガスも當分の間は見捨てられねばならぬ運命に置かれた。但し此の當時、名論を出した人がたつた一人あつた。それはフィンドレーと云ふ町の醫者で、チャールズ・エースタリンと云ふ人であつた。其の人の議論は「地下のガスをタンクに集めて町に供給すれば立派な事業になる」と云ふのであつた。此の説は今日から見れば何でも無いことであるけれども、其の當時では突飛極まる話だとばかりに聞き捨てにされてしまつた。これは千八百六十四年のことであつた。然るに其の後、隣接のペンシルヴェニア州にはガス専門の井戸が出来て、盛んにガス利用の話が傳はつて來るので、ライマ地方の人々も初めてガスに目醒めて來た。丁度、エースタリン醫師がガス利用を説いてから二十年目の千八百八十四年に、フィンドレー町にガス探掘及利用を目的とするフィンドレー・ガス・ライト・カムパニーと云ふ株式会社が設立された。

此の會社は同じ年の十月から井戸を掘り初めたが、第一號井は千九十二呎で數萬立方呎のガスを得た。この量は成功と云ひ得る程度ではなかつたが、兎も角、深く進めば進むほど量が殖えると云ふ自信を得た。その結果、二號、三號と掘つたが、何れも一號と大同小異であつた。それにも屈せず、第四號井を掘つたところが、今度は百二十五萬立方呎のガスが出て、初めて成功と云ひ得る程度に達した。この井戸の完成は千八百八十五年の三月であつた。

面白いことには、此の井戸のガスには石油が伴つて居た。初めは極く少量であつたけれども、日増しに量を増して、其の年の末には五噸ほどとなつた。引き続き五號、六號も四號に似た成績で、これらにも多少の石油を混へて居つた。

かやうにガスに石油が伴つて來ても、既に此の地方は石油の出ない場所と思ひ込まれて居たものであるから、別に喜ばれもせず、却つて餘計なものが混つて來るとばかりに、多少迷惑がられて居たものである。

同じ年の十月に成功した第七號井は三百萬立方呎のガスを出して、其の當時第一の大ガス井となつた。かく追追と成績があがつて居る際に、其の次ぎの井戸の八號井と云ふのは、他の井戸と同じやうな深さに達してもガスも何も出て來なかつた。よつて爆發薬を仕込んで坑底の地層を爆破して見たところ、意外にも石油が噴き出して來た。其の量は一日に三百噸位であつた。これは千八百八十五年の十一月のことであつた。因に豫定の深度で石

油が出なかつたり、出てもその量が少いやうな場合に、爆薬を用ゐて油層を爆破して石油を多く出すやうにする方法即ちシューチング(Shooting)は、既に千八百六十五年からオイル・クリーク地方で考案され、盛に行はれて居たものである。

兎も角、一日に三百畝も石油を出すやうな層があつて見れば、此の地方に石油の見込みがないとは云へなくなつた。實に此の井戸を動機として、ライマ地方は改めて石油熱で沸騰するやうになつた。

その結果、翌年の千八百八十六年からは立派な油田となつて、次表に示すやうな發展振りを示した。

| | |
|-------|------------|
| 一八八六年 | 一、〇六四、〇〇〇畝 |
| 八七年 | 四、六五〇、〇〇〇 |
| 八八年 | 四、六八三、〇〇〇 |
| 八九年 | 一一、一五三、〇〇〇 |
| 九〇年 | 一五、〇一四、〇〇〇 |

これは五ヶ年間の経過であるが、其の發展の速かさは全く驚くべきものがある。而して九〇年からは油田はインディアナ州の北東部に發展して、益々産額を増加した。従つて従來のライマ油田はライマ・インディアナ(Lima Indiana)油田と呼ばれるに至つた。要するにライマ・インディアナ油田は、オハイオ州の北西部からインデ

イアナ州の北東部にかけて開拓された澤山の油田の總稱である。

尙ほアバレシャン油田では、石油でもガスでも極めて少數の例外を除いては、皆な砂岩の中に入つて居るが、此のライマ・インディアナ油田では、それと全く趣きを異にして居る。と云ふのは、此處では石灰岩の中に特殊な事情で出来た穴の中に入つて居るのである。それがためガスや石油の入つて居る状態が、砂岩の中に於けるやうに一樣に行かない。或る場所にはガスを、また或る場所には石油をと、極端に分かれて居ることがあるし、その量も或ひは多く、或ひは少なくなると云ふやうに、片寄つて居ることもある。この油田が油田となる前に種々なことを繰返したのも、全く此處の油層の特殊な性質に基いたものである。

五 米油の世界進出

北米合衆國ではドレーク井成功後十五年ほどしてから、ボツ／＼産油地が各地に現はれて來た。併しこれらの多くは、廿世紀に入つてから大油田となりはしたが、十九世紀の間は大した發展も見せなかつた。ただカリフォルニア油田が世紀末に著しく發展し始めた位で、結局、二十世紀中に大油田となつたのは、前章に述べたやうにアパレシアとライマ・インディアナの二油田だけであつた。それ故、十九世紀内に於ける同國の産油の七四％はアパレシア油田、二三％がライマ・インディアナ油田のもので、其の殘餘の三％位がカリフォルニア油田、一％が其の他と云ふ割合であつたのである。試にドレーク井成功の年から各十年毎の米國の産額を列記して見ると、

| | |
|---------|------------|
| 千八百五十九年 | 一一、〇〇〇噸 |
| 六十九年 | 四、二一五、〇〇〇 |
| 七十九年 | 一九、九一四、〇〇〇 |
| 八十九年 | 三五、一六四、〇〇〇 |

九十九年

五七、〇七一、〇〇〇

以上四十年間總産額

九四三、五一六、〇〇〇

である。此の數字は、現在の産額に較べると誠に貧弱ではあるが、其の當時としては驚くべき巨大な數字とされ、新興工業發達の経路としては驚嘆すべき成績とされたものである。

かうした合衆國の石油熱は更に海外に流出して、世界各地に石油熱を傳播したのである。

抑も、合衆國の石油（以下單に米油と呼ぶ）の海外輸出は、千八百六十一年の暮近くにエリザベス・ワット號なる汽船が燈油を満載し、太西洋を越えて倫敦に向つたのを以て其の嚆矢とする。尤もそれ以前にも數噸程度の輸出は數次行はれて居たが、相當な汽船に満載して北米の港を離れたと云ふやうな事件は、此のエリザベス號が全くの皮切りであつた。

英吉利から北米大陸に石炭油製造法が傳はつてから丁度十年目に、今度は北米大陸から天然の石油からの燈油が英吉利に輸入して來たのだから、全く面白いことである。

此の米油輸入のために、本場の石炭油工業の經營が困難を感じるやうになつたことは、前に述べて置いた通りである。時は、安價で簡易な燈火の材料を要求して居たのだから、米油が歡迎されぬわけではない。米油の歡迎熱は英吉利から歐羅巴大陸に、次いで世界各地に擴がり、米油の輸出は日を追ふて増加した。エリザベス・ワット

號の輸出から二年後には、世界の主要な港には大抵、米油が送り届けられてあつたほどの勢ひで擴がつて居た。従つて三年目の千八百六十四年には、米油の輸出は早くも八十萬噸に達した。この年のペンシルヴェニア州の産額は辛ふじて二百萬噸を超過したばかりであつたが、それにも拘らず、輸出が其の半ば近くに達して居たと云ふことは、如何に石油が海外で歡迎されたかが想像されやう。又、この當時の産油地であつたオイル・クリークの方面には未だ鐵道が全通せず、運搬には相當困難を感じてゐたにも拘らず、これほど多量の輸出があつたことは驚くべきことで、それだけ石油歡迎の程度が推測出来るわけである。

石油の需要は毫も停止するところなく増加し、これに對して産額も些の遲滯もなく増加した。送油鐵管、油槽車及び油槽船等の發達は、石油の海外輸出を益々容易にした。かくて千八百七十年には米國から積み出された石油の量は二百五十萬噸に昇り、更に十年後の千八百八十年には其の約五倍即ち一千萬噸に達した。要するに、其の當時の産額の約半分は海外に輸出されて居たものである。

エリザベス・ワット號の輸出以來二十年間の世界石油市場は、少量の地方的産額を除いては、全然米油の獨占するところであつた。

こゝに特筆して置かなければならぬことは、米油獨占期二十年間に於て、合衆國の石油業者がその販路開拓に就て如何に親切に、如何に周到に、如何に遠大の計を以てしたかと云ふことである。この二十年間、世界に於て

米油の市場を脅かす如き競争者の出現は豫期されなかつた。殊に其の前半に於ては、其の氣配だも想像出来なかつたのである。だが、かう云ふ時代に於てさへ米國の石油業者は、獨占の故を以て徒らに目前の利益を貪ることをせず、眞面目な態度を以て極めて確實に、此の利益ある商賣の地盤を固めて行つた。此の地盤は、他日商敵が現はれて來た時に到つて、評價し得ざるほど有利であることが證明されたものである。此の合衆國石油業者の態度は全く見上げたもので、海外に發展せんとする商業家は大いに心得て置かねばならぬことである。更に合衆國の石油業者は、世界的に發展しつゝある此の事業に對し、個人の弱小資本では力足らぬことに氣が付いて、早くから資本の合同を實行して居つた。全世界と云ふ市場を擁して、一面には製産、一面には販路に對し、能率を擧げるには是非とも大資本を必要としたのである。スタンダード石油會社の如き大資本の會社が出現したのも全く時の勢ひであつた。千八百七十九年、スタンダード石油會社は國內の製油所の九〇―九五%を自家の支配下に置き、更に海外發展の計畫に對して費した「時」と「金」とは、實に莫大なもので、到底大資本でなければ實行し得ないところのものであつた。當時、石油の販賣業も世界的に相當な成長を遂げて居たが、スタンダード會社の幹部は尙ほ適當な方法を施すことに由り、一層偉大に發展し得るものと信じ、多數の人を世界に派遣して販路擴張の研究をさせた。而して一度び販路開拓に従事するや、需要のあるところは如何なる地方でも頗る果敢に突貫したものである。従つて北米合衆國の商品中、如何なるものよりも、最も廣く世界中に分布されたものは石油

だと云はれるのも、決して過言ではない。

この米油の刺戟に依つて逸早く大を成したものは、露西亞の高加索油田であつた。元來、高加索地方は石油湧出地頗る多く、最も簡單な方法でも多量の石油が容易に採れ得るやうな場所が少くなかつた。それ故、若し場所が今少し歐羅巴の中心に近い、便利の好い所であつたならば、世界の石油工業はすうと早くに、此の地方に興隆したに相違ない。だが、何分にも歐羅巴の中心と全く聯絡のない、未開不毛の地にあつたため、發祥の地を北米のペンシルヴェニアに奪はれ、約二十年間ほどは世界市場を米油の獨占に委せざるを得なかつたのである。併し米油が露西亞本國は勿論、高加索地方にまでも遠慮なく侵入して來るので、流石に頑固な露西亞政府も覺醒して制度を改め、交通路を開いて、此の工業の興隆を圖るに至つた。そして、千八百七十二年、其の事業が緒に就くや、實にもの凄い勢ひで發展した。例へば十七年後の千八百八十九年には、産額に於てアバレシア油田が最初から三十年の間に誇つて居つた世界一の名譽を奪ひ、次いで十九世紀の末年、即ち千八百九十八年には、さしもの北米合衆國を第二位を蹴落して、美事に其の王座を奪取してしまつた。

参考のため十九世紀末葉迄に廿世紀初頭に於ける米、露兩國の拮抗せる産額を掲げて見よう。

| | 北米合衆國 | 露西亞 |
|-------|--------|--------|
| 千噸 | 千噸 | 千噸 |
| 一八九六年 | 六〇、九六〇 | 四七、二二一 |

| | | |
|-------|--------|--------|
| 九七年 | 六〇、四七六 | 五四、四〇〇 |
| 九八年 | 五五、三六四 | 六一、六〇九 |
| 九九年 | 五七、〇七一 | 六五、九五四 |
| 一九〇〇年 | 六三、六二一 | 七五、七七九 |
| 一年 | 六九、三八九 | 八五、一六九 |
| 二年 | 八八、七六七 | 八〇、五四〇 |

右の如く露西亞の天下も十九世紀と廿世紀の兩方に跨がつた二年づつであつて、僅か四年の後には再びアメリカに奪還された。アメリカが産額で世界の第二位に下つたのは、後にも前にも此の四ヶ年だけである。

それは兎も角として、露西亞はアメリカに拮抗して世界の二大石油國對立の形勢を現出し、世界中の石油事業熱をいやが上にも煽り立てた。

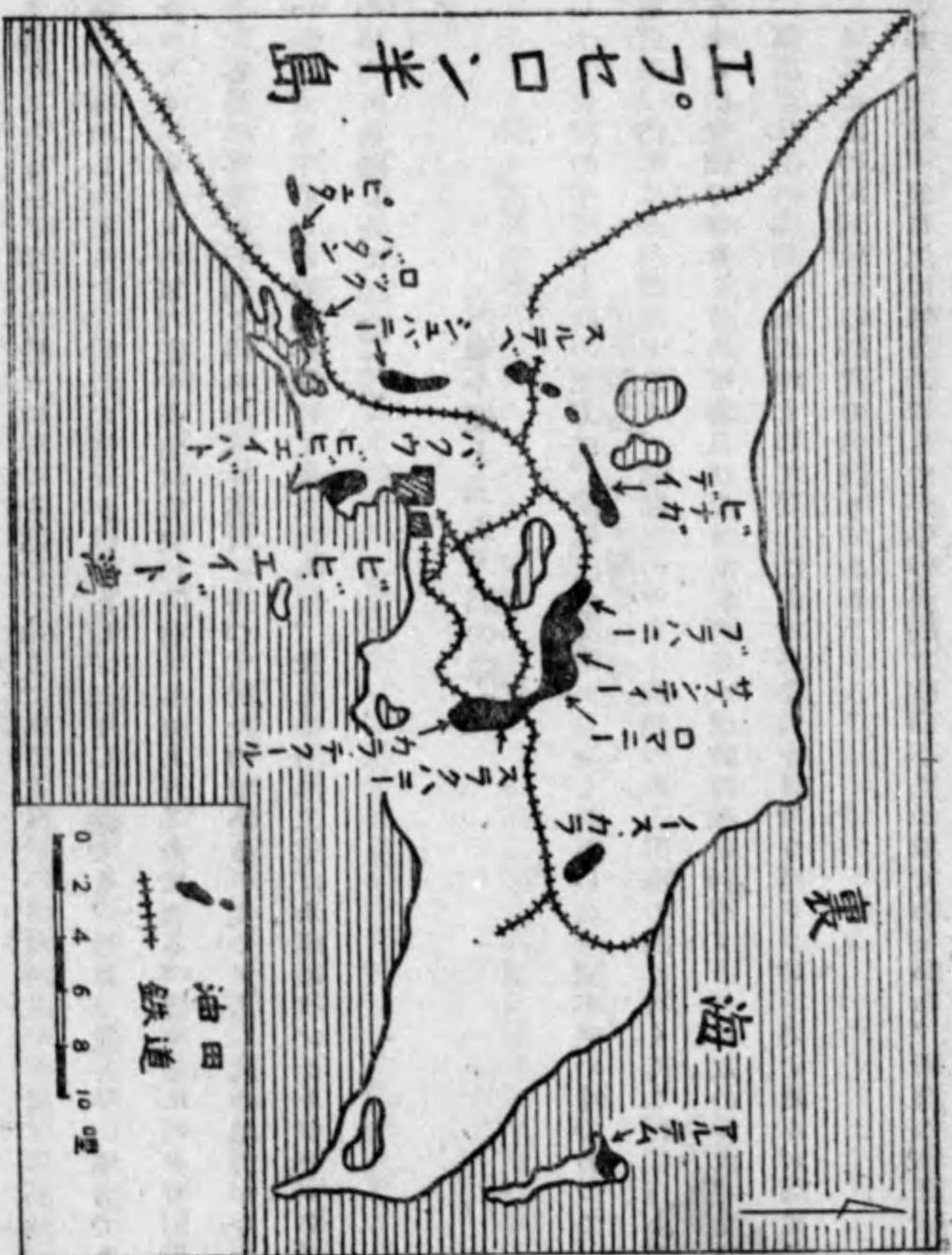
六 露西亞石油業の興隆

環境と制度に恵まれなかつた露西亞の石油地

古き歴史を持つ露西亞の石油地

前回にも述べたやうに、露西亞は十九世紀の末葉に於て北米合衆國に拮抗して世界の二大石油國對立の形勢を現出し、世界中の石油事業熱をいやが上にも煽り立て、石油工業を今日の偉大さに導くに至大の功勞のあつた國である。その故を以て、著者は露西亞石油工業の興隆に就ては特に稍々詳しく物語つて置き度いと同時に、また露西亞の石油工業の發展は、世界の他の何れの國にも比較の出來ないほどの困難の中に行はれたもので、石油工業の歴史中、最も興味深い一節であるから、此の點からも稍々詳しく物語つて置き度いのである。

抑も露西亞の石油産地は近來になつて二、三違つた地方にも現はれて來たけれども、其の中心は昔からの高加索山脈地方である。そして高加索山脈地方中でも、ベクウ油田が最初からの産地で、且つ今日でも此の國の石油事業の中心地である。而して高加索山脈地方には石油の湧出地が頗る多くて、其の存在も極めて早い時代から知



第八圖 バクウ附近油田分布圖(現況)

られて居たことは「石油の神様」の時にも話した通りである。又、バクウ附近に湧出する石油、或ひは簡単な井戸を掘つて採取した石油を、附近の住民が燃料として利用した點でも、世界で最も早い地方であることは前に紹介したマルコ・ポーロの旅行記や英吉利官吏の報告でも知られるのである。要するにバクウ附近は其の由來も古く、また容易に多量の石油を得らるべき素質を持つて居たのである。従つて若し此の地方が今少し歐羅巴の中心に近いか、或は中心との交通が開けて居たならば、世界の石油工業は米國のペンシルヴェニア州を待たずして夙に此の地方に興隆したに相違ない。

交通不便と云ふ天然の障害

併し十九世紀の半ばでも此の地方は、歐羅巴の文明から全く懸絶した未開不毛の地であつて、バクウを中心として數百里以内には全然鐵道がなく、歐羅巴の中央と連絡のある黒海の港に行くにも百里以上の距りがあり、露西亞本土との交通の如きもカスピ海及びヴォルガ河の水流數百里を利用する外はなかつた。またバクウの町にしても、露西亞政府は流刑人殖民地として居たほどである。今日でもバクウ舊市外を圍んだ頑丈な石塙が残つて居るが、これは此の流刑殖民地時代の名残りである。

右の如く交通不便な上に地方そのものが半砂漠的な礫礫不毛の地であるから、天然の物資にも缺乏して居つた。

例へば一枚の板にしても、露西亞本國からヴォルガ河を下り、カスピ海を渡つて來ねばならないから、其の不自由さと價ひの貴いことは全く想像の外であつた。こんな環境であるから、バクウの石油地も、地方民の燃料を得るために昔ながらに湧き出るのを汲むか、乃至は極く浅い井戸を掘つて汲み出す位で、合衆國の石油工業から刺戟を受けるまでは何等積極的に動くことが出来なかつたのである。

皇室獨占と云ふ制度の缺陷

交通不便と云ふ天然の障害の外に、今一つ露西亞に於ける石油工業の興隆を遅らしたものは、此の國の制度であつた。

元來、バクウ地方はベルシア領であつたのであるが、十八世紀の前半頃に或ひは露領となり、或ひはベルシア領に歸りなぞして、再三國籍を換へたものである。併し千八百六年からは安定して完全に露西亞領となつて今日に及んだものであるが、この最後に露西亞領となつた際に、政府は直ちにバクウ油田を皇室の財産に編入した。その皇室の所有にした理由が事業の保護或ひは獎勵にあつたのであればよかつたのであるが、さうでなくて「皇室の収益を圖る」のであつたから、油田の發達を夥しく害することになつたのである。

其の經營法の如きは、採掘權を或る特定の期間指名によつて官廷の權臣に委せられるのを、其の權臣は更に入

札の方法で民間の資本家に貸し付けると云ふ状態であつたから、唯に皇室の収益を圖るばかりでなく、一部階級の人々の好個の利権となつて居たものである。従つて皇室にも権臣にも、また權利を得た者等にも、眼中にはただ目前の利益があるばかりで、油田の將來とか工業の發達とかは全然無かつたのである。こんな有様では何時まで経つても石油工業が生育するわけではない。

右の如くバクウ油田は第一には交通の不便、第二には制度の缺陷と云ふ重大な重荷が課せられてあつたのだから、其の興隆が非常に遅れたのも無理からぬことと肯定出来るであらう。従つて露西亞石油工業の興隆はこれ等二大障害の撤去に至大な關係があるのである。以下、これらの關係と興隆の事情を紹介しよう。

油田開放と石油工業の向昇

千八百七十二年に至つて皇室はバクウ油田を開放して、個人の企業を便利にすることにした。何故に皇室が舊來の習慣を一擲してかくの如き英斷を敢てしたかと云ふに、全く北米合衆國石油工業の發展に覺醒したことにあるのである。その當時、合衆國では石油の年産額は五百萬噸を越え、歐羅巴にも販路を開拓して露西亞本國にも盛んに侵入して來たから、流石に頭迷であつた此の國の官僚も遂に覺醒せざるを得なくなつたのである。

而して其の開放の方法は、油田地を二十乃至三十エーカーの廣さに分割し、場所に依つてそれ／＼最低價格を

定めた上、競争入札で下附すると云ふのであつた。此の入札には希望者が頗る多くて、其の價格の如きも政府の評價よりも遙かに高く、場所によつては數百倍に昇つたところさへあつた有様であつた。

扱て誰もが自分の物になつて見ると、鑛區の愛護と能率的經營とを考へるから、露西亞石油工業の發達は此の油田開放の日から緒に就いたとも云へる。従つて露西亞石油工業の眞の誕生は此の開放の年、即ち千八百七十二年とされて居る。實際に此の開放當時のバクウの石油工業は全く原始其の儘の状態であつた。例へば鑿井法は手掘ばかりで其の深さも五十呎以上のものは一本も無く、石油を汲み上げるのも人力若しくは馬力で唧筒を動かして居たに過ぎなかつた。また油田から製油所に原油を運ぶにはベルシア人や糞粗人の驅る不器用な高輪車を使つて居たが、其の通路が甚だ悪くて殆ど道路らしいものでなかつたため、雨が降れば運搬を休まねばならなかつた。同時に製油所も、設備も不完全、技術も拙劣で、製油所とは名ばかりのものばかりであつた。此の如き状態も開放の日から改善され始めたのである。即ち各鑛業者は競つて合衆國油田に用ゐられて居る進歩した方法や設備の採用に努め出したのである。

それ等の改善のうちで一舉にして目醒しい効果を示したのは、亞米利加式の機械掘鑿の採用であつた。前にも話したやうに、それまでの掘鑿方法は手掘ばかりで、深さも五十呎以上は進めなかつたのであるが、亞米利加式では安全に迅速にそれ以下に進み得るのであるから、能率の上つたことは非常なものであつた。この掘鑿に於け

る能率増進とバクウ油田の豊かな天恵とが合致して、油田の産額は非常な勢ひで増加し始めた。即ち開放以前には年産額二十萬噸に達したことはあまり無かつたが、開放の翌年には其の三倍に達し、五年目の千八百七十六年には約十倍の百三十萬噸に達したやうな有様であつた。そして其の後は毎年、百萬噸位づつの増加を示して進んだ。誠に亞米利加式掘鑿法採用後のバクウ油田の産油は順風満帆の有様であつた。

以上の如く油田開放は露西亞政府としては一大英斷ではあつたが、石油工業奨励の態度には未だ不徹底な點があつた。それは外でもない、開放後にも産出する石油に鑛産税を課する制度を設けて、石油からの収益を忘れなかつたことである。然かも其の税も仲々高率であり、且つ係員が市價如何に拘らず隨意に石油の價格を定めて賦課すると云ふやうな亂暴なことも珍しくなかつた。此の鑛産税には石油業者も少なからず苦しめられたのである。

バクウ油田開拓の勳功者

ノーベル兄弟の降誕

バクウ油田の前途に對して光明が認められて來たこの時に當つて、この油田の興隆に對しく救世主の如き人物

が現はれて來た。それは外でもなく、瑞典の化學者ノーベル一家が石油事業に關係すべく、其の代表者がバクウに到着したことである。

抑々ノーベル一家はエマニエル・ノーベル (Emmanuel Nobel) 及び其の子アルフレッド・ノーベル (Alfred Nobel) (一八三三—一八九六) の時代にダイナマイトの製造に成功し、巨大な富を成したものである。千八百六十一年に、彼等親子はナポレオン三世の援助に依つて、ストックホルムの近くに世界最初のダイナマイト製造工場を建てたこと、竝に其の工場が千八百六十四年に爆發破壊したため更に其の翌年に今日でも歐洲第一と云はれて居るやうな宏大なダイナマイト工場を建設して、全世界に販路を求めたことなどは有名な話である。而して今日、世界的の科學者、醫學者、文學者竝に世界平和に貢獻した人々に與へられるノーベル賞金はアルフレッド・ノーベルの遺言に基いたものである。

扱てノーベル一家を代表して來た人はアルフレッド・ノーベルの兄弟であるルードウィヒ (Ludwig) 及びロバート (Robert) 二人であつた。如何なる動機でノーベル一家が石油工業に進出せんとするに至つたかは不明であるが、恐らく合衆國に興隆して世界的に歡迎されつゝある石油工業に對し、化學者の立場から進路を開拓しようと考えたものであらう。それは別問題として、バクウに來たノーベル兄弟は、該博に科學智識に加ふるに勇氣と機敏とを兼ね備へた上に、本國に於ける有力な財的後援を持つて居たのだから、全く鬼に金棒の譬への通

りであつた。この兄弟がバクウ油田の發展的能力を洞察しつゝ、各鑽業者の先頭に立つて各方面の改善開拓に努めたのであるから、順風満帆の状態にあつたバクウ石油工業は、更に好潮に乗つたやうな勢ひで發展したのである。實にノーベル兄弟のバクウ油田發展に對する功勞は絶大であつて、露西亞石油界では彼等兄弟のバクウ到來に、降誕と云ふ字すら用ゐたほどである。以下、ノーベル兄弟の働き振りの大要を紹介しよう。

先づ送油法の改善

ノーベル兄弟がバクウに到着したのは千八百七十五年、油田開放の年から四年目であつて、新たに採用した亞米利加式掘鑿法が頻りに功を奏し、バクウ油田の前途に光明がさし始めた時分であつた。

ノーベル兄弟は直ちにバクウの町に製油所を建設した。元來が化學者の家であるから、製油法にも相當な改善が加へられたであらうけれども、此の時のことに就ては何も傳へられて居ない。併し此の製油所建設に就てノーベル兄弟の特徴を發揮したのは、油田地のブラッハニーとバクウ町の間（第八圖參照）、八哩の距離に送油鐵管を布いたことであつた。前にも述べたやうに、當時の送油方法は悪路の上を驢租人の驅る不器用な高輪車に依つて居たのであるから、或ひは降雨のため或ひは無頼の御者の起すストライキのために、送油不能に陥ることは珍らしくなかつた。其の内でも製油の繁忙期を選んで起すストライキは、製油業者の最も苦痛とするところであ

つた。従つてかくの如き送油法では圓滑に且つ能率よく製油所を運轉して行くことの不可能であることは云ふまでもない。この缺點を除くためにノーベル兄弟は、製油所完成と同時に送油鐵管敷設を決心した。これに對しては合衆國の油田でもあつたやうに、之がために驢を失ふ労働者側から強烈な反對があつたが、ノーベル兄弟の勇氣と果斷はそんなことに驚くやうな脆弱なものではなく、かくして千八百七十六年からバクウ油田にも、鐵管に依る送油が行はれることになつたのである。勿論、他の製油業者も相續いて此の方法を實行した。

製品販路の開拓

次いでノーベル兄弟が働きかけたのは販路の開拓であつた。

前に述べたやうに、當時のバクウ地方は交通の便から孤立して、黒海の港まで出るにも陸路六百哩以上もあり、露西亞本土方面に向ふにしても五百哩以内には鐵道が來て居なかつたから、バクウ油田の製品も、油田から遠くない高加索地方並にカスピ海沿岸地方に賣捌くより外はなかつた。

併しノーベル兄弟到着當時及び其の以後に於けるバクウ油田の産油の趨勢は、前述の如き範圍以上の大販賣區域を必要とすることを示して居つたから、兄弟は直ちに之が開拓に取りかゝつたのである。第一に兄弟の立案した計畫はバクウと黒海の要港バクウ間約六百哩の間に送油鐵管を敷設して、歐羅巴の市場に進出しようとする云ふの

であつた。併しそれは當時としてはあまりに突飛であつたから賛成者も少なく、且つ當時、高加索鐵道を敷設中である政府側の反對もあつて、この案は成立しなかつた。そこで今度は露西亞本土並に北歐方面に進出する方法としてカスピ海、ヴォルガ河の水路を利用し、ヴォルガ沿岸にあるツァルチン驛に出て、其處から鐵道を利用しようとする案を立てた。千八百七十九年、ノーベル兄弟は右の計畫を遂行するために、カスピ海を走る油槽船九艘を新造した。これらの船は長さ二百五十四呎、幅二十七呎四分の三、吃水十一呎、馬力は百二十で、凡て燃料は重油を使ふことにした。そして石油はヴォルガ河の河口のアストラカンで吃水の浅い船に積み換へて、ツァルチン驛に送る計畫であつた。ツァルチン驛には油槽車を千五百車も準備した。バクウとアストラカンは海上六百哩、アストラカン、ツァルチン間のヴォルガ河の水路が約三百五十哩であるから、水路だけを合計しても殆ど一千哩になる。當時のバクウ石油の販路開拓が如何に困難であつたかは、この一事を以ても想像が出来るのである。かくノーベル兄弟が販路開拓に苦心して居る最中に、政府は開放當時に制定した礦産税制度を撤廢した。これは要するに、合衆國産石油の國內侵入の盛んなるに驚き、自國石油業發達の急務を痛感したからである。而して此の苛酷な制度の撤廢に依つてバクウ石油業は一層發展の餘裕を得たのである。

連續蒸溜法の實行

ノーベル兄弟はバクウに於ける自家事業の見透しが付いたためか、千八百七十九年にノーベル産油兄弟會社を組織し、ルドウィヒ・ノーベルが社長となり、アルフレッド・ノーベルも重役の一人に名を連ねた。此の會社は革命に依つて今の政府に沒收されるまで、露西亞石油界に重きをなして居つたものである。今一つ、ノーベル兄弟の功績として永久に賞讃さるべきことは新しい製油法の實施であつた。

在來の製油法は前にも説明して置いたやうに所謂間歇蒸溜法で、一回蒸溜を終る毎に蒸溜釜から残渣を取り出すために仕事を休まねばならぬ。従つて多量の原油を處理するには不便である。同時に此の方法は、多量に燈油を製造せんとすれば分解を誘致し易いので、重油分の品質を悪くする缺點がある。バクウの石油の用途は主に燈油ではあつたけれども、一面には燃料に乏しい地方にある關係から、重油即ち此の地方の名稱アスタトキも亦大切な製品であつたのである。それ故、バクウに於ける製油法としては、一方に於ては多量の燈油を製造するも、重油即ちアスタトキの品質を損傷せざる如きものが理想であつたのである。

一には多量の原油を處理し得、二には燈油並に重油の品質を損傷せざる如き方法として考案されたのが連續蒸溜法である。この方法は幾つかの蒸溜釜を並べ、最初の釜では蒸溜する温度を最も低くし、第二、第三と順次に温度を少し宛高めて置く。そして先づ第一の釜に原油を入れ、其の釜の温度だけの蒸溜を終ればポンプで殘餘の石油を第二の釜に移し、第一の釜には更に原油を送り込んで蒸溜を繼續する。第二の釜に於ては第一より送られ

た石油を其の釜の温度だけ蒸溜を行ひ、其の殘餘を第三に送り、其の後は再び第一よりの送入を受けるのである。かくの如く第一、第二、第三、第四……と送入、蒸溜を繰返して行ふ故に連続蒸溜の名があるのである。従つて一回も休止する必要がなくして蒸溜を行ひ得、同時に原油は各蒸溜釜に於て必要程度に熱せられ、分解することなく、蒸溜を完結し得るのである。

ノーベル兄弟が連続蒸溜法を實行したのは千八百八十三年からのことである。この方法の創案者は他にありとも、之を工業的に實行したのは正にノーベル兄弟を以て世界の嚆矢とする。この點に就ては獨り露西亞石油界ばかりでなく、實に世界石油技術界に不朽の勳功を残したものと云ひ得るのである。

遂に世界一の産油國となる

高加索横斷鐵道の開通

堅忍奮闘十有二年、バクウ石油業者の努力の酬はるべき時期が到来した。それは外でもない。千八百八十三年に至つて、高加索横斷鐵道が開通してバクウと黒海の要港バツウムが連絡されたからである。兩者の距離は五百

六十哩。もとより近い距離ではないけれども、これに依つて世界の市場と自由に交通し得ることを思へば物の數ではない。この當時、合衆國の燈油は地中海、黒海を經、バツウムから上陸してバツウム、バクウの中間に當るチフリス附近まで侵入して來て居つたものである。かう云ふことを考へて見ると、如何にこのバクウ、バツウムの連絡がバクウの石油の進出に取つて重要であるかゞ知れるであらう。この通路開通の上は、バクウの燈油も逆にバツウムから黒海、地中海を經て歐羅巴は勿論、亞米利加大陸までも進出し得る理である。兎も角、バクウ油田が天賦の發展的能力を充分に現はし得るに至つたのは正に此の年からである。

バクウ油田に加はつた幸運は唯にこれのみに止まらなかつた。當時、世界一の富豪と謳はれて居つた歐羅巴のロスチャイルド家が、石油に關する諸種の事業を經營する目的を以てバクウ油田に現はれて來た。實際に此の絶大な資本は、内にあつては産油家並に製油家に資本の貸與、運轉資金の融通等を以てバクウ石油業の發展を助け、外に向つては世界に於ける販路の擴張を授けたこと頗る大であつた。

遂に北米合衆國を凌駕す

この時運の好調に順應してバクウ油田の産油も停滞なく増大した。實際にバクウ油田の産額は高加索鐵道開通を一時期として明かに躍進した。それは開通後の販路擴大を見越しての鑿井數の増加、多數の冒險的試掘の成功

に依る油田の擴大に基くものである。この關係を數字を以て示せば左の如くである。

| | |
|-------|------------|
| 一八七九年 | 一、七六一、〇〇〇 |
| 一八八〇年 | 三、〇〇一、〇〇〇 |
| 一八八一年 | 三、六〇一、〇〇〇 |
| 一八八二年 | 四、五三八、〇〇〇 |
| 一八八三年 | 六、〇〇二、〇〇〇 |
| 一八八四年 | 一〇、八〇五、〇〇〇 |
| 一八八五年 | 一三、九二五、〇〇〇 |
| 一八八六年 | 一八、〇〇〇、〇〇〇 |
| 一八八七年 | 一八、三六八、〇〇〇 |
| 一八八八年 | 二二、〇四九、〇〇〇 |

この數字を見るならば、何人も開通の前後に於ける變化の激しさに一驚を喫するであろう。而もこの驚くべき産油の増加率はその後も毫も力を緩めず、更に五年目の千八百九十三年には四千萬噸を超へ、同年の北米合衆國の産額である四千八百餘萬噸に對して肉迫の氣勢を示し、更に五年目の千八百九十八年には六千六百六十萬噸に達

して、六百萬噸以上の差を以て合衆國を凌駕し、世界第一の産油國となつた。

油田開放の年から二十六年、高加索横斷鐵道開通の年から十六年目で、バクウの産額は遂に先進の合衆國を凌駕した。其の發展の急激偉大なることは全く驚く外はない。かくて露西亞は千九百二年、合衆國にテキサス州及びカリフォルニア州の大油田が出現するまで、世界第一の産油國の名譽を占めて居つた。而して千九百一年の八百五十餘萬噸は、其の當時に於ける露西亞産油の最高頂であつた。

バクウ、バツウム間の鐵管敷設

前述の如きバクウ油田の發展力に對しては、高加索横斷鐵道の運輸力は十年を待たずして對應が不可能となつた。従つて貨物停滯の非難は年毎に大きくなつて來た。これに依つて起る問題は、バクウ、バツウム間の送油鐵管敷設のことであつたが、高加索鐵道の収益を考へる政府は、なか／＼此の敷設に許可を與へようとしなかつた。併し千八百九十七年頃になつて貨物の停滯は愈々激しくなり、如何とも處置し得なくなつたため、政府も遂にこれが許可を決定した。

かくて千八百九十七年、バクウ、バツウム間六百哩に八吋鐵管敷設の大事業が起工され、前後八ヶ年の日子を費やして立派に完成した。二十年前、ノーベル兄弟に依つて立案された當時には痴人の夢として一般石油業者か

ら突設されたものであるのに、油田の發展は遂に此の大事業を成就させてしまったのである。因に鐵管敷設以前にはバツウムは單に石油の中繼港であつて、貯油タンク、油槽船で賑はつて居たに過ぎなかつたが、敷設後は世界有数の製油地となつた。

七 初期の石油商戦

米油に挑戦した露油時代

前にもしばしば述べたやうに北米合衆國産燈油即ち米油が世界各地に輸出され、其の効用が廣く宣傳された結果、各地に石油起業熱が勃興し、石油工業興隆の機運が造成されたのである。此の機運に乗じて第一着に擡頭したものは、露西亞の石油工業であつた。而して露西亞産燈油（以下露油と稱す）が米油に對抗して世界各地に進出するに及んで、ますます石油起業熱を煽り、石油工業興隆の機運を促進したものである。それ故、北米合衆國に次で露西亞石油工業興隆状態を述べた關係から、米油と露油との販賣上の競争等に就て簡単に紹介して見よう。米油と露油の會戦の兆は千八百七十九年、ノーベル兄弟がカスピ海に油槽船を浮べて、露西亞本國にバクウの石油を送り出してからのことである。併し此の當時は、露西亞國內に於てすら米油の方が露油よりも安價であり、同時に露油の量も多くなかつたから、世人の注意を惹くほどのことにはならなかつた。眞に露油が米油の競争者となつたのは、實に高加索横斷鐵道開通直後からである。それも勿論、最初の間は、米油の齒牙にかゝる程で

はなかつた。それは、千八百八十四年に、小亞細亞の地中海に沿ふスミルナ港の合衆國領事か、その港に露油が現はれて来たが何等米油の利益を傷ける程度のものでないと報告して居ることでも判る。けれども前章に述べたやうに、高加索横斷鐵道開通後のバクウ油田の發展は非常なものだし、それに歐羅巴の富豪ロスチャイルド家が販賣を引き受けるに及んで、露油の進出は目覺しいものとなつて来た。

露油は先づ第一に露西亞本國から徹底的に米油を驅逐した。これは單に地の利のためばかりではなく、米油に對して一ガロンに八ペンスと云ふが如き高率な輸入税の保護があつたからで、これには流石の米油。敗北したわけである。これは千八百八十五、六年頃のことである。露西亞本國の米油を出陣の血祭と云ふ形で屠り盡して、露油は先づ歐羅巴に侵略の矛を向け初めた。ロスチャイルド家は先づ米油の要塞の覬があつた英吉利に、配油組織の中心を設置した。同時にこれに習つてノーベル會社は西部歐羅巴に露油販賣網を布き初めた。而して千八百八十三年に英吉利に輸入された米油の量は百三十萬噸以上であつたが、これに對して露油は僅かに五百噸に過ぎなかつた。然るに十年後には露油は九十萬噸に達し、優に米油の三分の一を占めるほどになつた。米油の要塞地と目された英吉利に於てすら、かくの如く侵略されたのであるから、他の地方の状況も想像に難くない。露油は歐羅巴から地中海地方、印度、極東諸國と、永く米油の獨舞臺であつた方面に進撃した。

米、露油の競争が激烈になつて来た當時、兩者の間に協定の話も出た。それは世界の重な國々に於ては米油七

〇%、露油三〇%の割合に輸入しようとする云ふことであつたが、露油側は平和裏に三〇%の勢力が得らるゝほどならば、戰闘に依つては尙ほ多くを得ることが出来ようとて、この協定を一蹴してしまつたやうなこともあつた。かくして露油は千八百九十年頃には一千萬噸を輸出するに至り、同じ頃の米油の輸出額二千萬噸に對して約二分の一の形勢を取ることが出来た。

其の後、露油の産額は益々増加して、千九百年頃には遂に合衆國を凌駕するに至つたが、世界市場に向つての進出も其の産額の増加に比例して激甚を加へ、盛んに米油を壓迫したのである。

各地に烽起した商敵

米油の商敵は露西亞のみに止まらなかつた。第一は米油、第二は露油の進出に刺戟されて生まれ出た世界各所の石油工業がそれであつた。即ち歐羅巴にはガリシヤ、ルマニヤの油田が小規模ながら歐羅巴の市場に於ける商敵となり、東洋には緬甸、日本、蘭領東印度が擡頭し初めた。

此の形勢を見てスタンダードは油田の買収に取りかかつた。第一着に手を出したのは緬甸の油田であつた。即ち印度の市場を失ふことはスタンダードに取つては餘りに大きな犠牲であつたので、緬甸油田の將來は未知數で

あつたけれども、その當時、印度市場を安定せしむるために買収を決心したのである。併し意外にも英吉利政府は油田権利をスタンダードに譲ることに反対し、同時に有力な自國の會社をして獨占的に經營せしむることにした。これは千八百八十八年のことであるが、こんなことのために、米油は印度方面に於て、既に侵入しつゝあつた露油以外の商敵を得たわけである。次いでスタンダードは日本油田の興隆を心配し、千九百年、油田の一部の権利を買収して子會社に企業させたが、豫期したほどのこともなかつたので幾ばくもなく引き揚げてしまつた。こゝで注意を促して置き度いことは、右のスタンダードの行動に對して英吉利は固くこれを拒け、日本は易々としてこれを容れた態度に就てである。幸か不幸か豫期の成績が獲られなかつたために引き揚げたものゝ、若し豫期した通りであつて、今日までスタンダードが日本の油田に頑張つて居たら如何であらう。

蘭領印度諸島でも十九世紀の末期に至つて石油業が擡頭したが、其の興隆はスタンダードが開拓した最も大切な支那市場を脅かす危険があるので、ス社は大いに警戒し且つ其の油田権利に觸手を動かしたものである。併し此の方面では、スマトラ島の油田を開拓した和蘭の資本、ボルネオ島油田を持つて居つた英吉利の資本並にロスチャイルドの石油部が合同してスタンダードに當ることにした。此の合同が完全に成立したのは千九百七年であつたが、此の合同勢力こそは今日スタンダードを向ふに廻して一敵國をなして居るロイヤル・ダッチ・セルム(Royal Dutch Shell group)である。尙ほ此の諸島の石油業生育に就ては「東印度諸島の油田」の項で詳しく

物語ることにする。

以上の如く、全世界を通じて、米油の敵が各地に現はれたことであるから、米油の輸出は減退しただらうと思はれるが、事實は之れに反して、如何なる場合にも減少したことがなく、確乎として増加の一路を辿つて居つた。かく他の國々に油田が現はれ、供給が増加せる面前に於ても、米油が運滞なく増加したのは、要するに世界各地の需要が不斷に増加したからである。而して此の需要の増加に對しても、亦た米油の増加に對しても、スタンダードの不斷の努力が大に與つて居ることを忘れてはならぬ。

以上は二十世紀に入る前後までの石油商戦のほんの概略であるが、これ以後の世界石油界の事情は、産油國の増加並に國防必需品としての石油の眞價判明と共に複雑になつて來て居る。本章の目的は初期の事情を紹介するにあるのだから、これ以後のことは他の機會に譲ることにする。

第四編 世界大油田開拓ローマンス

一 間違ひの功名

——二十世紀の劈頭テキサス州に大油田出現——

ドレーク井の成功が世界石油業の紀元となり、米油の刺戟に依つて露西亞石油業の興隆を見、北米合衆國の産油地が依然としてアバレシア、ライマ・インディアナの二油田に限られて居たため、新興露西亞の勃々たる勢力に壓倒されて、遂に「世界一の産額」を後進の露西亞に譲つた迄の経緯は前編に紹介して置いた。

併し汲々として世界一の榮冠を贏ち得た露西亞ではあつたが、誇りの聲名は千八百九十八年、九年、千九百年、九百一年の四年を續けたに止まつて、二十世紀に入るや否や、樞花一朝にして合衆國のために奪回されてしまつた。此の世界一位の争奪戦に、合衆國をして一氣に王座を奪回せしめたものは、實にテキサス海岸に出現した大油田の威力であつた。そして此のテキサス油田に續いてカリフォルニア州にも大油田が出現して、茲に完膚なく露西亞石油業の追撃を排けてしまつたのである。實に二十世紀劈頭に於ける合衆國石油業の隆勢は絢爛として眼覚ましき限りであつた。然かも此の隆運の緒を開いたテキサス油田の興隆は何に依つて齎らされたか。それは外でもない、實に「間違ひの功名」であつたのである。著者は茲に「世界大油田開拓ロマンズ」の筆頭に、

北米合衆國の福音、テキサス海岸油田出現の由來を綴ることにする。

石油を得んとして硫黄を得た話

抑も、サキサス州及ルイジアナ州のメキシコ灣に沿ふ一帯の地には、水準の低い坦々たる平地が横はつて居る。そして、其の平地内でも、海岸に近い部分は水準極めて低く、沼澤の多い卑濕の地帯である。かうした平地はメキシコ灣沿岸ばかりでなく、大西洋沿岸の諸州にも連続發達して居るものである。其の廣さは、テキサス、ルイジアナ兩州では幅三百哩に達し、其の内、海岸の卑濕な低地帯は六、七十哩位の幅を持つて居る。

さて、此の低地には數多のガス發生地、硫黄質噴泉湧出地があり、稀には石油の滲み出した所も發見されて居つた。それ故、ペンシルヴェニア方面の石油熱に促されて、一時は盛んに石油の試掘が行はれたものであるけれども、何れの場所でも成功せず、ただ所に依つて極少量の石油を見た位に過ぎなかつた。従つて、十九世紀の末頃には、此の方面は油田として全く價値のないものと認められて居たものである。

此の初期の試掘時代に、各所で、頗る不思議な現象に遭遇したものである。それは外でもない、地下で石膏、硫黄、岩鹽等の厚い層に逢着したことであつた。さうした例は、其の當時までの油田の経験には、全然なかつた

ことであるから、石油業者に極めて不思議な思ひを抱かせたのである。其の内、ルイジアナ州の西部で、テキサス州と境を接して居るカルカシウと云ふ郡内に掘られた一本の石油試掘井は、豊富な硫黄鑛床に逢着して、硫黄坑井として成功した。石油を得んとして結局硫黄を得た、所謂「間違ひの功名」である。先づこの功名話に就て物語らう。

大硫黄層に逢着

此の郡内を流れるカルカシウ河の一部には、珍らしくも石油の滲出があつたので、千八百六十一年頃、附近の住人であつた醫師のキルクマンと云ふ人が、試掘を初めた。此の時は四百五十呎まで進み、砂利に掘道具を抑えられて、石油も見ずして仕事を中止した。その後、千八百六十五年頃に、ルイジアナ石油石炭株式会社と云ふのが、同じ附近に試掘を再開して、今度は千二百三十呎まで進んだ。併し前と同様、石油は見なかつたが、不思議にも厚い硫黄の層に逢着した。此の坑井の地質を見ると、最初の三百五十呎位は軟かい砂、粘土、砂利であるが、それから以下には屢々硬い石灰岩が現はれ、四百四十九呎から六百五十一呎まで即ち二百三呎の間には、純粹の硫黄多量を含む石灰岩層があり、それ以下の五百八十呎ばかりの間にも硫黄を伴つた石膏の層があつた。石油を獲やうと試みた井戸で、硫黄や石膏が出て來たのであるから、人々は非常に驚いたに相違ない。殊に二百三呎も

ある純粹な硫黄を含む厚層に出會したのだから、少なからず吃驚したことであらう。目的の石油は出なかつたが、多量の硫黄の存在が知られたので、その会社の計畫は硫黄採掘に變更された。當時の智識では堅坑を掘つて直接に採掘する外はなかつたから、随分と多額の金をかけて堅坑の開鑿を試みたものである。併し上部に横はる砂及粘土の地層が餘りに柔軟で崩壊し易く、殊にその砂層の中には押し出しの頗る急速なものがあつた。此種の砂は「急砂」(quick sand)の名を得た程で、之に出會ふと掘進は極めて困難であつた。そればかりではない、メタン・ガス及び硫化水素ガス等が屢々發出して來て、少なからず作業を妨害した。そんなことで、種々と手段を講じたが、結局、硫黄の鑛床まで到達することが出来なかつた。其の當時、佛蘭西から運んで來た鐵の杵が、今日でもカルカシウ河邊に残つて居る。そして杵の中に生へた松のやうな樹が、直徑二呎程にも成長して居る珍風景を見ることが出来る。こんな有様で、硫黄採掘も仲々成功しなかつた。

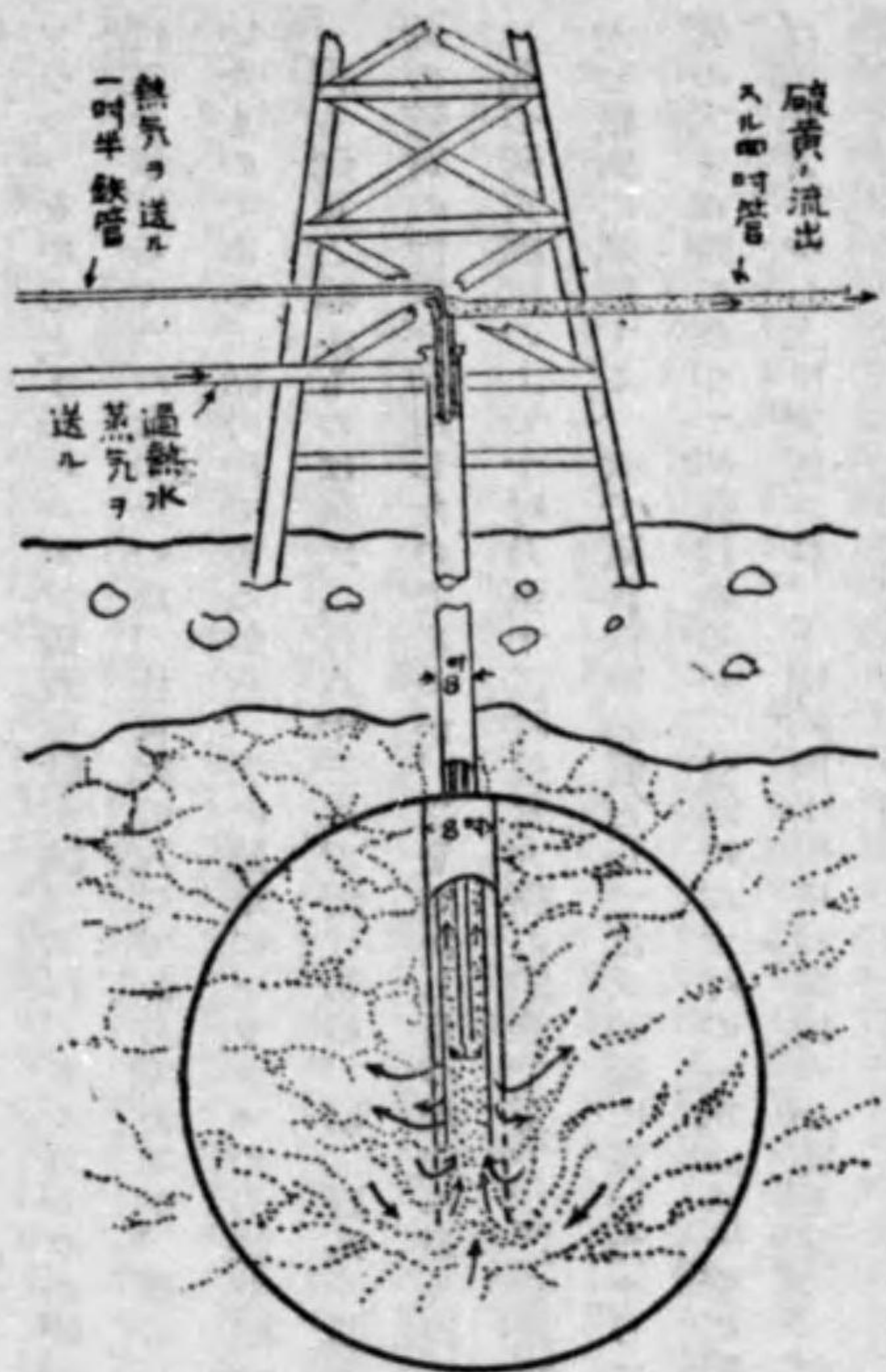
この地層の崩壊、急砂出現等は、單に堅坑の掘進を妨げたばかりではない。當時、唯一の掘鑿法であつた綱式でも、折角掘つた穴が潰れるので、掘進は捗らず、掘鑿器が埋没抑留されて掘進不可能となると云ふ有様で、アレシア油田で熟達した技術者も全く弱つて居たものである。従つて此の方面の試掘が全く失敗に終つたのも、坑井掘進が思ふに委せなかつた點にあつたとも解されるのである。

フラッシュの硫黄採收法

それからすつと後、千八百九十一年になつて、化學技師のフラッシュ(Herman Frash)なる人が、過熱した水蒸氣を地下に送つて、硫黄を溶解してポンプで汲み揚げることを考案して特許を得た。そして千八百九十三年にフラッシュを中心とするユニオン硫黄會社が設立され、カルカシウの硫黄採取に取りかゝることになつた。實際に利益を擧げるやうになつたのは、廿世紀に入つてからであるが、新らしい試みとして少なからず世間の注意を惹いたものである。話の序であるから、次に簡単にフラッシュの方法を紹介して置かう。

抑も硫黄と云ふものは華氏二百八十三度で熔け初め、同二百八十四度では殆ど完全な液體になる。フラッシュは此の硫黄の性質を利用したのであるが、之を熔かし且つ地表に取り出す装置の主要は次の通りである。

先づ硫黄鑛床の上で十吋乃至十二吋位の大徑の鐵管で「水止め」を嚴重に行ひ、上部の軟かい地層からの水の浸入を絶對に遮斷する。次で硫黄採取装置としては次の圖に畫いたやうに三重の鐵管を入れるのである。それら鐵管の大きさは時に依つて相違はあるが、普通には十吋の「水止め」管に對して八吋、四吋、一時半である。八吋管は坑底より少し上に安置され、下端約四十呎には澤山の小孔を穿つ、即ち蜂窩(perforate)されてある。四吋管は八吋管よりは上に止つて、八吋管の内部に環で固着されて居る。一時半管は四吋管内で坑底から二百呎位上



第九圖 ユシラフ式硫黄採取法

二二六

に止まつて居る。扱て地表から来る過熱水蒸気は八吋—四吋管の間を通過して、下部の小孔から硫黄鑛床に向つて吹き出す。温度は華氏三百三十度、壓力は平方吋百二十五封度乃至二百五十封度である。ところで、熔けた硫黄は坑底に集まり、過熱蒸気の壓力で四吋管内に上昇して一時半鐵管以上に達する。そこへ、一時半管から熱

された空気を平方吋五百封度位な壓力で吹込み、四吋管一時半管の間を通じて硫黄を地表に流出させるのである。かうして一本の井戸の熔かす力の及ぶ範圍は凡そ半エーカー、吾が六百坪強である。即ち一本の井戸では、其の井戸を中心として二十五間（四十八米）四方の硫黄を熔かし取る割合である。

カルカシウの硫黄鑛床の平面積は七十五エーカー、吾が約九萬坪であるから、若し厚さ四十呎（八吋管の蜂窩

部だけ位なれば、理窟通り行けば井戸の数は百五十本で済むわけである。しかし實際には、鑛床の最も厚い所は二百呎もあるから、右の数の何倍か掘られねばならぬ。此の鑛床は千九百二十四年を限りとして硫黄は取り盡され、廢坑となつたが、掘鑿された井戸の数は六百六十一本、取り出された硫黄の總量は九百萬噸、金額にして一億五千萬弗に達したと云はれて居る。尙ほ此の場所は硫黄山としては廢棄されたが、偶然にも其の翌年の千九百二十五年に石油層を發見して、今は立派な油田になつて居る。兎も角、數十年の石油探鑿者の夢が、今日になつて實現されたわけである。因みに今日では、同様な硫黄山がテキサス州に五個も發見されて、年額二百萬噸を産し、世界の産額の八〇%以上を占めて居る。蓋し之等も凡て石油を求めんとして得た、「間違ひの功名」の賜物であつたのである。

硫黄を得んとして大油田を掘り當てた話

スピンドルトツプ

同じ海岸平地内で、テキサス州ではあるがルイジアナ州寄りにボーマントと云ふ町がある。其の町から港のボート・アーサーに行く途中で、距離にしては三哩位な所にスピンドルトツプ(Spindletop)と名づけられた、極く

一 間違ひの功名

二二七

低い、頂の平らな、臺地のやうに見える丘がある。スピンドルトップの名は此の丘の上に立つ森の形が紡錘に似て居た爲め、かく名づけられたとのことである。高さも云つても海拔僅かに三十呎、附近の地面からは十呎乃至十五呎位しか高くはないけれども、周囲が單調低平であるために確かに丘であることは誰にも受取られる。直径は約一哩で、圓形をして居る。後節に説明するが、灣岸區域の油田はしばしば圓形の丘に伴はれてゐる。従つて圓形の丘を探し出すことが、油田を求め手段にもなつて居る位である。蓋し單調の平原にかうした圓形の丘が出来て居ることは、石油集積を原因した地下構造の影響であるのである。前節に述べたルイジアナのカルカシウ硫黄鑛山、今のカルカシウ油田も、同様に極く低い圓形の丘に伴はれて居るものである。

扱て、此の丘の上に、天然ガス發出が二ヶ所發見されて居つた。別に大したガスでもないので、最初の内は誰も手を付かなかつたが、千八百九十三年に至つて、初めて試掘を試みる者が出現した。この時は四百十八呎しか掘らなかつたが、六十呎で稍々多量のガス層を認めた。此のガス層の存在に曳かれて試掘した者も一、二あつたが、何等獲るところなく終つたものである。従つて其の後は、此の丘も石油地としては世人から見放されてしまつて居つた。

キャプテン・ルーカス

茲に陸軍大尉でアントニー・ルーカス(Anthony E. Lucas)と云ふ鑛山技師があつた。此の人はルイジアナの硫黄鑛山の成功に鑑みて、硫黄鑛床發見に志して居つた。千九百年の春、スピンドルトップの調査に來た。それと云ふのは、此處もカルカシウ硫黄山と同様に、圓形の丘であるからであつた。調べて見ると、地層の割目に硫黄の凝結皮が見付かる、硫化水素ガスがある、硫黄質冷泉があると云ふ有様で、硫黄存在の兆候は充分であつた。そこでルーカスは硫黄探掘の目的を以て、丘の中央に掘鑿を開始した。併し此の最初の井戸は五百七十五呎で故障を起し、掘進不能に陥つた。井戸は失敗に終つたが、二噸ばかりではあつたが、ボーメ十二度位の石油が採れたので、或ひは石油も出るかも知れぬと云ふ希望が加はつて來た。

意外の大噴油

千九百年の十月、ルーカスは第二號に着手した。此の井戸は千呎を超えても硫黄にも石油にも出會はないので、彼も大いに焦慮の氣味であつたが、致し方なしに掘進を續けて居るうちに、千九百一年一月十日、深度千三百三十九呎(三百五十二米)に達して、俄然大爆發をした。と云ふのは、その時、石油の出て來る兆候は何も無かつたから、鑿手達も平常の通りにやつて居ると、下に降つて居た(ロータリー式)掘鑿管が急に上の方に動き出した。アレヨアレヨとばかりに呆れて見て居るうちに鑿管は櫓の頭を突き破つて尙も上に出る。其の瞬間に、凄まじい

音響を發して石油が噴騰して來た。其の勢ひが特に猛烈で、六吋挿入管と二吋掘鐵管の間から迸る石油が、空中二百呎位も昇つたほどである。其の量は如何に内輪に見ても七萬五千噸、稱して十萬噸と云はれて居つた。元來が石油を目的としない井戸であり、殊に石油の出るべき前兆もなく、全然準備のなかつたことであるから、人々は徒らに周章狼狽し、石油は噴くに委かせ、流れる儘にするしかなかつたが、その内、數日後には群がり來る見物人の煙草の火か何かを引いて、一大石油火車を現出した。無論これにも手の付け様が無く、自然の消火を待つ外はなかつたが、結局、十數日後に消えた時には、挿入鐵管が破壊されて、油井としては最早價値のないものになつて居つた。言ひ換ふれば、井戸が壊れて來て石油の出口が塞がれた爲、自然と火が消えたと云ふ事である。

激烈な權利爭奪と競掘

扱て、スピンドルトップの地下に、一日十萬噸も噴き出すやうな豊富な油層が在ると知れて見れば、世人が黙つて居る筈はない。吾も吾もと土地の買収契約を始めた。アメリカでは土地の所有者に鑛物の探掘權も付いて居るから、土地を買ふか、然らずんば地主と貸借契約をすればよい。其の權利の爭奪の激しさは、今迄は一エーカーが十弗もしなかつた丘の上の地面が、數千弗まで競り上つたことで想像が出来る。而して土地の取り合の激しさにも増して、其の後の井戸の掘り合の凄まじさは更に一段であつた。一エーカーでも二エーカーでも手に入れ

て、一本でも多く、一時でも早く掘らうと考へる結果、槽と槽とを密着させて掘る位は愚かなこと、激しいのにならんと井戸一本の敷地に三本も四本も掘つたと云ふのだから呆れざるを得ない。地上權に鑛物探掘權が與へられてあるアメリカでは、兎角こんな激しい競争掘が行はれ勝ちであるけれども、スピンドルトップのやうな極端な例は二度と現はれて居ない。

右の如き豊富な油量に、右の如き勢ひで競争掘が行はれたことであるから、産額の殖へ方もまた激しかつた。翌年の千九百二年には千七百四十二萬噸と云ふ巨大な年産額を示して、世界をアッと言はせた。然かも競争掘の結果、容器の不充足、輸送の不備のために流されたり、棄てられたりした量も決して少なくなかつたのである。併しスピンドルトップ油田の鑛床は、こんな極端な競争掘を幾年も繼續させるほど廣大ではなかつた。従つて良い場所は大抵、千九百二年の一年間に掘り盡した形勢で、千九百三年には産額は前年の約半分にしなかつた。其の翌年には前年の四〇%、更に其の翌年は前年度の五〇%と云ふやうな相當激しい減退率を示して居る。試に最初五ヶ年間の産額を掲げて見よう。

| | |
|-------|------------|
| 千九百一年 | 三、五九三、〇〇〇噸 |
| 同 二年 | 一七、四二一、〇〇〇 |
| 同 三年 | 八、六〇〇、〇〇〇 |

| | | |
|---|----|-----------|
| 同 | 四年 | 三、四三四、〇〇〇 |
| 同 | 五年 | 一、六五二、〇〇〇 |

極端な競争掘、極端な産額昂昇と減退、これは當然な因果関係であるとしても、僅か一年の全盛は案外に果敢ないものであつた。

スピンドルトップの経験で、人々は、灣岸低地の下にも驚くべき豊富な油源の隠されてあることを知つた。前にも話したやうに、此の方面は半世紀間に亘つての石油探掘が悉く失敗し、十九世紀の末頃には石油には望みのない土地と断定されて居つたものであるが、それがキャブテン・ルーカスの思はぬ「間違ひの功名」から、石油地として再検討を受けることになつたのは誠に面白いことである。人々は再び石油の産み出して居る所や天然ガスの發出個所を求めた。それにスピンドルトップの経験から、圓形の丘も捜した。さうして盛んに試掘を施したから、續續と新油田が現はれて來て、スピンドルトップの産額減退にも拘らず灣岸區域全體としては、年を追つて産額を増したものである。参考のため、最初五ヶ年間の數字を掲げて置かう。

| | | | | |
|--------|-----------|------------|-------|------------|
| 千九百一一年 | 三、五九三、〇〇〇 | 噸 | 合 | 計 |
| 同 | 二 | 一七、四二一、〇〇〇 | 噸 | 一七、九七〇、〇〇〇 |
| | | | テキサス州 | |
| | | | ルイジアナ | |
| | | | | 三、五九三、〇〇〇 |
| | | | | 噸 |
| | | | | 五四九、〇〇〇 |

| | | | | |
|---|----|------------|-----------|------------|
| 同 | 三年 | 一七、四五二、〇〇〇 | 九一八、〇〇〇 | 一八、三七〇、〇〇〇 |
| 同 | 四年 | 二一、六七二、〇〇〇 | 二、九五九、〇〇〇 | 二四、六三一、〇〇〇 |
| 同 | 五年 | 二七、六一五、〇〇〇 | 八、九一〇、〇〇〇 | 三六、五二九、〇〇〇 |

右の如き數字は、今日では大したものではないけれども、其の當時の世界總産額に較べると、その何割かに當る容易ならぬ額であつたのである。従つて本章の劈頭に述べて置いたやうに、米國の産額は千九百二年以後、露西亞のそれを凌駕して再び世界一となつたのである。

以上は、石油を得んとして硫黄に出會ひ、硫黄を得んとして石油を獲た所謂「間違ひの功名」の梗概である。蓋し大油田発見のローマンス中でも、最も出色なものゝ一つであらう。

ロータリー式使用の嚆矢

キャブテン・ルーカスが使用した掘鑿機は、現在の所謂ロータリー式であつたが、ロ式を石油井に使つたのは蓋し此のルーカスを以て嚆矢とする。そして、之を動機として今日の鑿井界を風靡したロ式の發達の因が作られたのである。思へば間違ひの功名には色んな記念すべきことがあつたものである。ロータリー式の事に就ては、いづれ改めて紹介するが、茲には其の因縁話の一齣として掲げて置く。

二 墨西哥油田開拓着手當時の物語

汽車のミスが石油事業着手の機縁

千九百一一年四月の某日、北米合衆國と墨西哥との國境にあるラレドーと云ふ驛に、一人の英吉利紳士が汽車待ちをして居つた。このラレドー驛は合衆國の東南部方面から墨都方面に向ふ汽車の始發驛であるから、この方面から墨西哥に出入せんとする人達は、必ず此處で汽車を換へねばならないのである。右の英吉利紳士の名はウィトマン・ピアスン、後のコードレー郷と云ひ、英吉利の有名な土木事業會社ピアスン・エンド・ソン會社の社長であつた。

この當時、墨西哥は有名のボルフェリオ・ディアス大統領の威勢未だ衰へず、恰かも專制君主の如く振舞つて居つた時代で、盛んに外資を求めて港灣の修築、鐵道布設等を始め大いに文化的施設完成に熱中して居たので、前記のピアスン土木事業會社も、英吉利資本掩護の下に墨西哥國內の土木事業を一手に引き受けて、盛んに活躍して居たものである。その社長のピアスンがラレドーに居たのは、墨西哥から本國へ歸るさの途次（オヤツタ）であつたの

であるが、其處で彼は目的の列車を逸し、次ぎの適當な列車が来るまで九時間も待たされたのであつた。

かうして汽車待ちをして居る間に、ピアスンは頻りと石油の話に耳にした。それも其の管である。前項に紹介した通り、スピンドルトツクに於けるキャブテン・ルーカス井の大噴油は、丁度其の時から三ヶ月前のことで、其の頃のスピンドルトツクは最奮の増産であつた。従つて同じテキサス州に在るラレドーには其の凄まじい有様が手に取るやうに傳はつて来るため、直接事業に關係のない此の邊の人々も最奮して、話題は専ら石油のことばかりであつたのである。

扱て、この石油の騒ぎを耳にしてピアスンが感じた第一は、今まで知らなかつた別の方面に金儲けの世界のあつたことであつた。そして其の世界の仕事が如何に壯烈で、如何に男性的であるかと云ふことであつた。彼は待合室の椅子に凭れながらルーカスの華々しい成功の幻影を追つて居ると、不圖、墨西哥の地峽地方に在る彼の所有地に滲み出て居る石油のことが頭に浮び出た。又、地峽横斷鐵道工事に發見した石油のことも思ひ出された。これと、あれと結び付いた時、持前の事業熱が昂進して、彼の目先には石油の噴騰する地峽地方の景色がちらつき始め、遂に彼を石油事業にと決心させてしまつたのである。

思ひ立つと一刻も猶豫の出来ぬのが事業家の通癖である。ピアスンはラレドー驛から直接に、地峽方面に居る彼の代理者に打電して、石油發見地及び其の附近の土地を廣く買収或ひは契約するやうに命令した。これが實に

英吉利資本の墨西哥石油事業に關係するに至つた抑もの動機であつたのである。考へて見れば誠に面白いことで、ピアスンの石油事業着手の機因は、彼が汽車を逸したことにあるとも云はれ得る。若しピアスンが無事にラレドーを通過して居たならば、或ひは石油事業に思ひ付く機会がなかつたかも知れない。而かもピアスンの石油事業が墨西哥に於ける英吉利の重要な利権の基礎となつたことを考へて見ると、此の汽車のミスもなかく馬鹿にならぬ事件であつたと云ふことになる。

荆の道を歩んだピアスンの石油事業

扱てピアスンは廣く地峡地方の石油地の権利を獲得して、愈々仕事に取りかゝることにした。而して試掘を行ふ第一の場所の選擇は、ラレドー以來彼の腦裡に刻まれたテキサスの幸運兒、キャプテン・ルーカスに依頼することにした。ルーカスが墨西哥に旅行した年月は判明しないけれども、兎も角、ピアスンに懇請されて出掛けたことは確である。其の結果、選定された場所はサン・クリストバルと云ふ所であつた。併し、如何にルーカスの選擇した場所であつても、此處はスピンドルトップのやうに左様に簡單には、幸運に見舞はれなかつた。石油と云ふものは、ピアスンがラレドーで感得したやうに、掘りさへすれば噴き出すと言ふ

やうな簡單なものではなかつた。資金は喰ふ、石油は出て來ぬ、たま／＼出て來ても一時的で永續がせぬと云ふ有様で、ピアスンに取つては豫期に反することはかりであつた。従つて焦慮する。焦慮の結果、此處彼處に手を擴げ、益々深味に陥ると云ふ失敗者の常道を進る有様であつた。最初、ピアスンは此の事業に對して百五十萬磅位までは入れる覺悟であつたさうだが、千九百七年までに何等成功らしいものを見ないで、それに越した金を完全に入れ盡してしまつた。



第十圖 墨西哥石油分布圖

ピアスンの失敗の中で、一寸、面白いのはミナチトラン製油所の建設であつた。千九百二年、サン・クリストバルの試掘井が出油したので、素破とばかりに大製油所の建設に取りかゝつた。ミナチトランと云ふのは墨西哥灣に注ぐコルツァコアルコスと云ふ地峡第一の大河の河口近くで、其處に一日一萬噸を處理し得るやうな大規模なものを建設したのである。

併し、サン・クリストバルの油田も一時的で、千九百四年に製油所が竣工した時分には産油は極めて僅かになつて居たから、止むを得ず、北米合衆國から原油を輸入して此の設備を活用した有様であつた。製油所が出来る、産油が減ると云つたやうな事件は石油界には珍らしいことではないので、石油事業の危険性は其の邊にも潜んで居るのである。

そんなことで、ピアスは幾度か事業中止を考へたが、今度こそは今度こそは七ケ年も引き摺られてしまつた。其の間、ピアスは、地峡地方から見れば北方であるが、此の國で南部油田と呼ばれるヴェラクルース港方面の石油地にも事業地を求めた。即ち千九百四年にはフルベロー區域を手に入れ、更に六年には大統領から南部油田地方に於ける廣大な地域に石油探掘の許可を得た。實を云へばピアスは、後から手に入れたこれら南部油田區域の成功に依つて目的を達成し得たのである。

要するにピアスの事業も千九百七年の末に至つて漸く前途の光明を認め得るに至つたのであるが、それまでの足かけ七年間は全く荆棘の道で、其の苦難は一通りでなかつたのである。

英米資本嚮を並べて墨國油田開拓に進む

千九百七年以後のピアスの活躍を物語る前に、ピアスンと殆ど同時に墨西哥の他の方面に於て石油事業に奮闘して居つた北米合衆國の事業家エドワード・ドヘニーのことを簡単に紹介して置きたい。

抑々、ドヘニーはカリフォルニアに於ける石油業の先覺者で、夙に成功して合衆國石油業界に於ける一方の雄となつて居たものである。そのドヘニーが千八百九十年頃には未だしがない石油坑夫であつて、ロス・アンゼルスの中中で、手掘井を掘つて居つたことなどは、カリフォルニア油田の歴史に残つて居る有名な話である。

千九百年五月、ドヘニーは墨西哥中央鐵道會社の勧誘で、タンピコ港の西方三十五哩、チホール驛附近の露田地セロ・デ・ラ・ベス（ピッチの小山）を視察し、翌年の五月一日から掘鑿を始めた。然るに幸運にも、この油井は其の月の十四日に深度五百四十五呎で、日産五十噸の油層に到達した。これがエパノ油田で、墨西哥で油田らしいものゝ成功した最初のものである。而して此の油田も千九百四年には深度千六百五十呎で、日産一千噸も自噴する油井が出来たため、一段と活氣を呈することになつた。

此の成功に勢を得たドヘニーは、千九百五、六年に互つて、ピアスンが廣大な鑛區を手に入れたと前に話した南部油田區域にあつたアスファルト産地を買収して、大いに將來に備へたものである。

前に話して置いたやうに、ピアスンが南部油田地方の鑛區を手に入れたのが四年から六年、そしてドヘニーが同じ方面に進出したのも五年から六年で、全く同時であつたのである。此の兩者が新らしく手に入れた南部油田

ことは、世界稀有の油源を埋蔵して居つたもので、両者が競つて大油井を掘り當てたため、墨西哥は忽ちの内に世界第二の産油國となつたほどの場所である。さうした場所に、偶然ではあつたが一方は南から、一方は北から進んで、此の中原に馬を入れて居るから面白いのである。

實を云へば、墨西哥の南部地方では、すでに千八百六十四年頃から、幾多の事業家が石油の探掘を試みたのであるが、何れも物にならなかつた爲め、十九世紀の終り頃には墨西哥の油田は絶望とされ、誰も手を染めるものが無くなつて居たのである。其の際にピアスは偶然のことから手を出すことになり、ドヘーは石油の経験家として招待されて開拓に着手すると云ふ有様で、墨西哥石油産業の新時代が生まれ出たわけである。それにしても、英米の資本家が時を同じうして南北に事業を始めたこと、そして殆ど同時に南部油田の廣大な産區を手に入れたことなどは、それが偶然であるだけに今日から考へて見て誠に興味深い話である。唯、著しく違つた點は、一方は石油の経験家、他は土木屋さんで石油にはツブの素人であつたことである。それかあらぬか、一方は最初からさした困難にも遭遇せず先づ順調に進行したに對し、他は非常な苦難を嘗めて暫くは荆棘の道を歩んだものである。

堅忍不拔、遂に其の素志を達成す

堅忍不拔、百折不撓、幾度か中止を思ひ立つたピアスの石油業も、遂に酬はるべき時が來た。それと云ふのも前に話したやうに、ピアスが南部油田區域に馬を進めてからのことである。即ち千九百四年に手に入れたフルペロー油田が七年の末に成功し、日産二千噸を擧げたのを契機に、各所に大油田が出現して遂に大偉業の完成を見たのである。此處まで漕ぎ付けたピアスの労苦は、此の事業着手を思ひ立つた當時には全く豫想しなかつたことであつたが、同時に彼が掘り當てた大油井や開拓した油田も、彼がラレドー驛で夢に見たそれよりも遙かに大きなものであつたに相違ない。以下、南部油田に於けるピアスのスタートが如何に華々しく且つ偉大であつたかを示す一、二の例を紹介して見よう。

地下の埋藏量を暗示した大石油火事

前に話したやうに、千九百七年の末にフルペロー油田は成功したが、ツイスパンと云ふ港まで持ち出すのに四十哩程の鐵管を布設しなければ何とも處理が出來ぬ。それを實行するにしても、熱帯のジャングルの中ばかり通ることであるから容易なことではなかつた。此の仕事は十年四月に完成したが、其の間に、他の場所で掘鑿中であつたピアスの井戸は、石油界を驚倒させるやうな大石油火事を起した。依つて先づ其の話を物語らう。

其の井戸はドス・ボカスと云ふ所に試掘中であつた第二號井であつたが、千九百八年七月四日に深度千八百三十呎でガスと石油を噴き出した。初めは左程でもなかつたが、刻々に勢を増して来て、暫くすると井戸の近くは地震のやうに地が揺ぎ、續いて坑心を中心として地面に數條の龜裂が出来、其處からガスと石油が凄まじい勢で迸り出た。この龜裂の一つは不幸にも、釜場の下に到達した。勿論、釜場の火は最初のガス噴出と同時に逸早く入念に消したのだが、残火でもあつたのか、龜裂が釜場の下に達したと見た瞬間に引火して、附近は一面の火の海と化してしまつた。その早いことは、最初のガス噴出から二十分も経たぬ内に火を引いてしまつたのである。そして火の強いことも格別で、井戸元から一町以内には熱くて近寄れず、火焰の高さは千呎乃至千五百呎にも達し、約六十哩を距てたタンピコ港から見えるのは勿論のこと、海上では二百哩先からさへ見えたと云ふことである。かくして八月三十日まで丁度五十八日間燃へ續き、石油界空前の大石油火事を現出した。結局は石油が盡きて鹽水が出て来たため、自然に鎮火したのである。今でも其の井戸からは盛んに温い鹽水を吹き出して居るが、それは石油が出盡すと其の代りに鹽水が出たことを示して居るのである。それは兎も角として、五十八日間に煙となつた石油の量は、三百萬噸（日産五萬噸強）を下らなかつたらうと云はれて居る。要するに此の火事は、宣傳費としては甚だ高價であつたけれども、墨西哥にもこんな偉大な油源が潜んで居ることを天下に紹介した事になつたのである。而してピアスン其の人に取つても、此の井戸は物質的には得るところ皆無であつたけれども、

墨西哥油田の將來に對する自信を強める好個の材料となつたのである。

扱てピアスンはフルベロー竝にドス・ボカスの成績に鑑み、墨西哥油田の將來を洞察して、英吉利資本を以てする一大強力會社の設立を思ひ立ち、千九百九年三月にエル・アギラ El Aguila 石油會社を創立した。この社名に採用されたアギラと云ふのは、鷲のことであるが、墨西哥では建國の傳説から鷲を以て第一の靈鳥として居る關係から斯く社名とされたのであらう。従つて此の會社の英語名は Mexican Eagle Oil Co. である。今日ではローヤル・ダッチ・セル團の墨西哥に於ける石油事業一切を取扱ふ會社である。

尙ほ此の當時からドヘニー以外の合衆國の石油會社も續々と乗り込んで来たので、墨西哥石油界は一段の活氣を加へて来たものである。

天は力行する者に巨井を與ふ

ドス・ボカス第二號井は空前の大石油火事を現出しただけで、あたら多量の石油を煙にしてしまつたが、其の火焰は地下に潜む豊富な油源の所在を知らせる標となつて、ドス・ボカス及び其の隣接區域の試掘を促進するに至つた。其の結果、千九百十年の春頃には此の方面に日産一萬噸以上の油井が出現して景氣を高めつゝあつた際

に、又もピアソンの會社は世界石油界空前の大油田を掘當て、墨西哥をして一躍世界の大陸油國たらしめたのである。而して此の油田に就ては語るべき面白いローマンスが多いから、稍々詳しく紹介して見よう。

其の大油田の出現した場所はポテレロ・デル・イヤノと云ふダンビコの南西約百哩、ツイスパン港の西北約三十哩に在る所である。前に話したフルベロー油田の北方約五十五哩、また新たに出現したロス・ボカス附近油田地から南西に約三十哩も離れて居る場所である。而して大油田となつたのは四番目の井戸即ち第四號井と云ふのであつた。

この第四號井の位置を選定した人は、當時のアギラ會社の地質技師長ヘイエス博士であつた。ヘイエスは從來の方法である露面の近くに井戸を立てることをせず、大きなドーム構造の中心に立てたものである。ヘイエスは此の四號井が大噴油を始める二日前まで此の地に滞在して居たが、他の方面に向つて出發した。これが實に千九百十年十二月廿五日即ちクリスマスの朝のことであつて、其の出發に際してヘイエスは、今十二哩も掘れば必ず出油すると言つて大いに鑿手を激勵したものである。實を云ふと、此の地の試掘は第一號井が少し許り油を見ただけで二號、三號は物にならず、大分持ち倦ぐんで居た所であつたから、ヘイエスの「今十二哩」は激勵の御世辭であつたかも知れぬ。事實、今十二哩で成功すると信じて居たならば、一日や二日位は延期して結果を見てもよかりさうなものである。またたとひ眞實に成功を確信して居たとしても、天下を驚かさやうな大物とは想像し

て居なかつたに相違ない。それは兎も角、ヘイエスの出發した翌々日、馬で五十哩も行つたと思はれた時分、井戸が十二呎の豫定を七呎掘り込んだ時、突然、ガスと石油が吹き出して掘鑿器を空中に打ち上げた。そして最初の二十四時間には一萬呎ばかり噴き上げて居たが、日増に増加して五日目には十六萬呎と云ふ世界石油界空前のレコードに達した。何の設備もない場所に、かう澤山石油が出て來ては仕末に困るのが當然だが、殊に此の場所は人烟の極めて薄い、叢藪の眞中であつただけ其の困惑は並大抵ではなかつた。著者も千九百廿一年の秋、此地を訪れたが、仲々の悪路で、ツイスパンから三十哩の道を自動車で二日もかゝつた始末であつた。そして其の間に部落らしいものは一つもなかつた。従つて千九百十年當時の交通が思ひやられたのである。掘て會社は此の大量の石油を貯溜するために一大土タンクの築造にかかつたが、それをするにも人を集めなければならず、それにして附近に人が居ないから相當遠方から狩り集めて來なければならなかつた。一時は毎日千五百人位づつ使用したと云はれて居る。其の出來た土タンクは廣さ四十五エーカー（吾が五萬五千坪）、深、中央で三十呎、容量は二百五十萬呎、應數にすれば四十萬應と云ふ圖抜けて大きなものであつた。このタンク築造は油井成功の日から五十四日目に竣功したが、其の時でも計量器は依然として十萬呎以上の噴油量を示して居つた。一方、噴出した石油はタンクの完成するまで、流れ去るにまかせる外はなかつたが、それも普通の量でないから約三十哩下流のツイスパン港までも流れて來て、附近は火災の危険に脅かされたと云ふことである。因に此の油井以前に

世界の大油田と謳はれたものは、露西亞のバクウ油田に日産十萬噸と稱せらるるものが二、三本位あつた外は、前回は紹介したスピンドルトップのルーカス井位なものであつた。従つて此のイヤノの巨井は世界の新記録を造つたものである。

革命軍の暴政に巨井炎上す

話の序に此のイヤノ四號井に就て、其の後に起つた興味ある事件を物語つて見よう。

千九百十三年の後半から十四年にかけて墨西哥國內は第二回の革命勃發で、麻の如く亂れ、國民は塗炭に苦しんだものである。其の時革命軍の隊長であつた（後には大統領になつた）カランザは、十四年六月に、産油一噸に對して金七十錢也の税金提出を石油業者に命令した。そして若し之に肯んじなければ、武力を以てしても油井封鎖を敢行すると嚴命した。これに對して石油業者は其の命令に服しないと同時に、自分の方から進んで油井封鎖を斷行することにした。其の結果、此のイヤノ四號井も八月一日から封塞されることになつた。其の封塞は出來たが、今まで一日に數萬噸も噴き出して居た井戸を無理に抑へて鬱積させることであるから、何時爆發するか、非常に危険に思はれて居つた。果せる哉、數日後には井戸の周圍の地層に龜裂が出來、ガスを噴き出して來た。

さうこうして居る内に、八月十四日の午後落雷があつて、噴出して居るガスに點火した。かうなると一大事。井戸は爆發して日産數萬噸の石油を燃やす大火事となつてしまつた。會社側は驚いて鎮火の策を講じたが、千封度近い壓力で以て噴き出る數萬噸の石油火事を消すことであるから、並大抵の方法では消せるものではない。就中、井戸を中心とした龜裂からも石油、ガスを吹き出して居ることであるから、なほさら手におへない。種々と試みた末にコンクリートの山を築くことにした。それと云ふのは、周圍からセメントと砂利を練つたものを井戸の方に向つて投げ付け投げつけて、井戸の周圍にコンクリートの山を築くのであるが、こうすれば周圍の龜裂が止まり、火事の範圍が井戸元だけになる。そこで、今度は非常に大きな鐵筋コンクリートの板を造り、之を井戸の眞上に押し被せてコンクリートの山の上に乗せる、即ち蓋をして火を消さうとする計畫である。此の方法は美事に效を奏して、さしもの大火事も完全に消えた。この火の消えたのが千九百十五年三月の初めのことであつたから、約半年間燃へ續いたわけである。燃へた石油の損害、これを消さうと試みた費用を合算するならば、其の金額は莫大なものであるに相違ない。會社も飛んだ損害を受けたものである。著者も千九百二十一年九月、此地を訪れてコンクリートの山に登り、當時の大騒ぎのほどを偲んで來た。尙ほ、消火後、設備を恢復して噴油させた當初は、十萬噸位な噴油があつた。そして千九百十八年十二月十九日の夜、まだ數萬噸餘も噴油して居たにも不拘、何等の前徴なしに忽然として鹽水の井戸と變化してしまつて、巨井の一生涯を終へてしまつたのであ

る。此の巨井の生命は滿八ヶ年、其の間に産出した油量は一億噸と概算されて居る。何にしても、石油界、古今を通じての屈指の大油田である。

以上は英吉利の資本が如何にして墨西哥に於ける石油利権の大半を取得したかと云ふ、當時の事情の大貌を物語つたものであるが、此の重要な利権も要するに、其の動機は何にもあれ、ピアソンの堅忍、不撓の努力への報酬であつたのである。かうした人物の努力に依つて、石油利権が英吉利のものになつて居るのは此處ばかりではない。以て他山の石とするに足ると思ふ。次には同様な人物の出現に依つてペルシヤ油田を英國のものにした事情を物語り度いと思つて居る。

三 イラン油田開拓由來記

博才豊かな青年ダーシーの夢

千九百一年と云ふ年はよほど石油に因縁深い年と見えて、前に述べた灣岸油田の勃興が千九百一年、墨西哥油田の着手も同様千九百一年であつた。而してこれから話さうとする波斯即ち今のイラン油田の問題が表面に現はれて來たのも實に千九百一年であつたのである。即ち此の年の五月に、英吉利の一資本家と波斯政府との間に成立した石油に關する重大な契約が發表されたのである。

其の當時は石油問題も今日のやうに國家的に急迫しては居らず、英吉利資本家と云ふも別に深い意味を持つたものではなく、ただ單に一事業に偶然の機會から關係するに至つたものである。其の資本家をウィリアム・ダーシー(William Knox D. Arcy)と云ふ。話の順序として、ダーシーの生立ちを簡単に紹介しよう。

ダーシーは千八百四十八年、英國デヴォンシャーのニュートン・アバットに生まれたが、十八歳の折に一家と共に濠洲に移住し、クィンズランドと云ふ所に住居することになつたのである。父は辯護士を業として居つたか

ら、彼も法律家たらんとして勉強して居つた。或日のこと、父の顧客の一人が自分の住宅附近に澤山在ると云ふ岩石の一塊を、父の事務所を持参した。併し岩石などは法律家を取つては凡そ意味のないものであるから、此の岩塊は其の後暫らく事務所の一隅に邪魔物扱ひを受けながら轉がつて居つた。然るに不圖したことからダーシーは此の岩塊に興味を持ち始め、遂には専門家の鑑定を受けるに至つた。ところが此の岩塊は金を含む石英即ち立派な金礦であることが明白となつた。そこでダーシーは法律の勉強を止して此の金礦採掘に従事、即ち鑛山師として世を送る決心をした。そして拮据二十幾年、彼は金山採掘に成功して、百萬長者の仲間入りが出来るやうになつたものである。

金礦採掘に成功して石油採掘に着手

扱て年月は明確に出来ないけれども、多分、千八百九十七、八年の頃と思はれるが、英京ロンドンに一人の波斯青年が現はれて、頻りに自國油田開發のための資本家を求めて居つた。其の青年の名はバルヴィス・キタブチ Parviz Kitabji と云ひ、父は波斯で勢力ある將軍であつた。蓋し右の青年がロンドンに現はれての資本家探しは、父である將軍の命を受けてのことであつたのである。併し石油問題がさほど重大に取扱はれて居なかつた當時のことであるから、誰もそんな交通の便のない未開の場所に行つてまで、此の事業に當らうとしなかつた。従つて何處に行つても、てんで對手にされなかつたものである。

丁度、其の當時、ダーシーは錦衣故郷の誇を以て英本國に歸つて來て居つた。そして金山で儲けた豊富な資金を以て、更に征服すべき天地を求めつゝあつたのである。

此の事業を求むる新たらしい資本家は、偶然、資本家を探しつゝあつた波斯青年と邂逅した。その時まで、ダーシーは石油に就て全く無智識であつたのである。併し石油事業と云ふ新しい仕事が彼の好奇心を唆つた。又、波斯と云ふ御伽噺にしか出て來ないやうな國で仕事をすると云ふことが、彼の冒險心を満足させた。彼は遂にキタブチの希望を容れて波斯油田開拓に従事すべく決心し、千九百年、マリオットなる者を代理人として波斯に派遣した。

これが波斯に於ける重大な石油利権を英吉利が獲得するに至つた抑々の動機であつたのである。今日では頗る重大となつて居る此の石油利権の獲得も、要するに石油に對しては無智識、無經驗な一資本家ダーシーの好奇心、冒險心に基いたものである。此のダーシーの行動は勇敢とも云へれば、無鐵砲とも云へる。今の英イ石油會社の社長であるキャドマン氏はダーシーを「多くの資本家の持たぬ博才 (gambler's instinct) を豊富に持つ男」と評したことがあるが、全く面白い言葉である。

ダーシーの獲得した石油利権

ダーシーの代人として波斯に赴いたマリオットは、キタブチ將軍の斡旋と駐波英國公使の後援とに依つて、波斯の總理大臣アテベグ・アサムと折衝し、次のやうな権利を獲得した。

北部五州アゼルバイジャン、ギラン、アストラバット、コラサンなるを除く波斯全土に對し千九百一年五月一日より向ふ六十年間石油を採掘し、販賣し且つ輸出する權利

之に對する報酬としてダーシー側は

波斯政府に拂込済株四千磅及現金四千磅並に純益金の一割六分を支拂ふ

ことを約束した。これで見るとダーシーが採掘權を得た區域は實に五十萬平方哩の廣さに達し、波斯國全面積の四分の三を占めて居る。そして此の國の重要な油田區域の殆ど全部が包含されて居るわけである。かくの如き重大な利權が右の如く安價に且つ無難作に手に入つたと云ふことは、今日から見れば全く驚くに堪へた事實である。これは一には波斯國情の然らしめた所であらうが、他の一面には石油のことなどは未だ極めて簡単に考へられて居た時代であつたからであらう。それにしても、其の間を斡旋したキタブチ將軍の勢力と、應援した公使の盡

城區權利のーシーダ圖一十第



- (一) 權利は分部るざか引を線横し劃區にて線點細の部北
- 州五部北るざらは加に
- (二) 權利の初最が部全城區るせ施を線横に方南の點細右
- 城領
- (三) 南以線直點細るせ過通をドツバダイセ及ドルデルブ
- 城區約契訂改が分部るけ引を線細の
- (四) のドルデルブ境國) 端左はソリスカの中文字本
- りあに(方西眞
- (五) いたれさ照參を「爭紛波英」の項後には就に約契訂改

力の程も相當に認めて置かねばならぬ。話の序だが、當時の駐波英國公使はハーディングと云ふ人で、此の人はマリオットに對し、成功の祕術として政府の高官及び國の有力者達に「酒の壺」を送ることを傳授したさうであ

三 イラン油田開拓由來記

る。此の酒意は、日本語ならば差し當り「袖の下」と云ふことになるであらう。

右のダーシーが獲た利権に含まれた石油地と云ふのは、第一編に紹介したやうに數多の遺跡や傳説を残して居る、世界で最も早く人類に知られた石油地の一つである。それが漸く二十世紀に入つて、近代文明人の手に依つて油田開拓を試みられるに至つたのであるから、考へて見れば随分長く打ち捨てられてあつたものである。若し此の方面に交通の便が開けて居たならば、それに相應して歐羅巴方面の事業家も出懸けて來たに相違ない。併し二十世紀の初めでも、此の方面は交通機關利用の範圍から相當距離があり、人烟極めて薄い半未開の場所であつたから、若しダーシーのやうな冒険家が出現しなかつたならば、油田開拓の機運は未だく運れたに相違ない。

萬難の末小説的な成功

扱て、ダーシーが最初の事業地として選擇した場所はバグダッドの北東約百哩、イラック國境に近いカスリシムリン(Kasri-Shim)と云ふ所であつた。此處は拜火教の遺跡で有名であるだけ、ガス竝に石油の徴候が豊富であつた。此處でダーシーが掘つた井戸に關する詳細な記録は筆者の手に入らなかつたが、兎も角、千九百二年に仕事を始め、千九百三年には二本目の井戸を掘つて居たことは確かである。そして最初の井戸は、深度六百四十

米まで掘つたが豫行に足る石油もガスも出なかつたので、これを廢棄して第二番目を掘り始めたのである。それが三年の末には、二百四十三米の深度まで進んで居たことは確である。ところが、これだけの井戸を掘つたに對して、事業費は豫想外にかかつたのである。最初、ダーシーは三十萬磅ほどの資金を用意してかゝつたのであるが、千九百三年末には、それが残り少なくなつて來た。従つてこれ以上の事業繼續に對しては、他からの資金援助を必要とする事態に立ち到つて居つた。

如何に此の方面の油田掘鑿に對し費用がかかるか、運搬費だけを考へて見ても想像が付くのである。即ち機械類にしても、英本國から波斯灣頭まで汽船で運ぶだけで既に相當な費用である。それからはチグリス河を川蒸気で廻ること、バグダッドまで約五百哩。其處から現場までの約百哩は、牛馬の力に依るのであるが、道路らしいものが無い地方であるから、其の費用と骨折は一通りではない。また燃料にしても、石炭は勿論、樹木一本無い不毛の地であるから、何れ石炭を國外から前述のやうな苦勞を以て運搬せねばならなかつた。此の外、一般労働者もバグダッド方面から連れて行かねばならぬと同時に、食料品も日用品も何もかも其處から運ばねばならなかつた。本國に向け電報一つ打つにしても手紙一本出すにしても、バグダッドまで出て行かねばならなかつた。其の不便、苦痛は言語に絶して居たのである。そんなことで費用は豫期以上に嵩んだのである。

それにしても、これだけの金を投じて成功しなかつたのであるから、流石のダーシーも石油事業の如何に困

難であるかを痛感したことであらう。

若し此の時、ダーシーが自國資本家の援助を得ず、此の利権を放棄したか、或は他國資本の援助を受くるに至つたならば、波斯に於ける石油利権は永久に英吉利の手から放れたかも知れない。幸にもダーシーは、自國資本家の援助を受くるに至つたが、この援助を受くるに至つたことに就ては逸すべからざる一場の挿話があるのである。

危機一髪波灣頭の會見

千九百三年の冬、時の印度總督カーゾン卿が波斯灣方面視察に出掛けた。其の旅行中、十一月の或る夜のことである。波斯灣頭のコウエイト港に於けるカーゾン卿一行の旅館に、一人の英吉利紳士が訪づれた。此の紳士こそは、其の當時、波斯國內で石油井戸を掘つて居つたダーシーの鑿井技師レイノルドであつたのである。彼は聊か面識のあるカーゾン卿隨員のデーニンに面會を求めた。そしてデーニンに向ひ、ダーシーの事業が豫期以上に困難であつたこと、資金難で事業續行不能に陥つたこと、従つて本國に引揚げの目的で此處まで來たことを話した上、本國行の便船の寄港地までカーゾン卿一行の用船に便乗を許されたいと願ひ出た。

ところで右のデーニンと云ふ人は、曾てカーゾン卿の命令で波斯國內を隈なく旅行し、波斯地名辭典を著したほ

ど波斯の事情に精通して居た人であつた。従つて他に有望さうな石油地を知つて居たから、此の儘、レイノルドを本國に歸すことを遺憾とした。そこで、レイノルドをして別の石油地を調査せしむべくカーゾン卿に提案した。此のデーニンの申出を聞いたカーゾン卿は「ダーシーの事業を見殺しにしてはならぬ」と直ちにデーニンに賛成した。そこでレイノルドは本國引揚を中止し、カーゾン卿援助の下に別方面の調査に赴くことになつた。

其の別方面と云ふのは、波斯灣頭から北東に百五十哩位なマイダナフツーン(Maidan-i-Nafine)と云ふ所であつた。此の地名は英語の Plain of Natia で、邦語にすれば「石油の野」の意味になる。即ち石油湧出地が澤山あるので、こんな名が付けられたであらうことは、誰にも想像が出来るであらう。

千九百四年二月、レイノルド技師の調査報告は英本國に送り届けられた。當時、英吉利海軍は石油に對して考慮し初めて居た際であつたから、海軍省は大いに其の報告に興味を持ち、同時に英吉利政府も海軍を通じて興味を持つに至つた。ここに於て、ダーシーは英吉利海軍省並にカーゾン卿の後援に依つて、ビルマ石油會社を中心とする資本團の援助の下に、第一開發會社(First Exploration Co.)を組織してマイダナフツーンの試掘に向ふことになつた。若しカーゾン卿の援助なく、レイノルド技師をして空しく歸國させたならば、ダーシーに再起の機會が來なかつたであらう。さうなれば、波斯油田の權利は英人の手を放れたかも知れぬ。そして後にも話すが、其の後、波斯政府は甚だしく排英的となつたからして、若しダーシーが一度び失權したならば或ひは永久に

英吉利人の手に還らなかつたかも知れない。それ故、右のコウエイト港に於けるデーン、レイノルド兩人の會見は波斯油田開發の歴史中、最も印象深い一挿話とされて居る。

手紙待つ間の劇的成功

ダーシーはカスリシュリンの試掘も遂に成功しなかつたから、千九百四年四月に其の地を引き拂ひ、マイダニナフツーンに向つた。そして詳しい時日は分らぬが、千九百五年の春から試掘を開始した。

併し此處に來ても、仲々、成功しなかつた。それがため千九百八年の春になると、痺を切らした一部の資本家等は事業中止説を持ち出して來た。仕事は長引けば、兎角、悲觀説が出て來るものである。結局、中止説が勝を制したので、ロンドンの本社から現場のレイノルド技師あてに事業中止の電報が發せられた。併し所信の固いレイノルド技師は、電報を手にしたが、最後の手紙の到着する迄には尙ほ五・六週間あるから、それまで掘鑿することに決心した。正に天なる哉である。最後の手紙の到着する少し前、千九百八年五月二十六日に油井は深度三百三十四米で油層に達着し、日産千五百噸、石油は槽上二十三米も高く吹き上げるやうな成績を示した。若しレイノルドが電報入手と同時に掘進を中止して事業を放棄したならば、其の結果はどうであつたらう。例の英イ石油

會社の社長キャドマン氏は此の成功當時の事を以て、油田開發の物語中「最も劇的」と評して居るが、如何にも小説のやうな事實である。

かくしてダーシーの素志は酬みらるゝに至つた。併し八ヶ年の星霜、數百萬の資金、慘憺たる苦心を以てしたダーシーの成功は、決して安易ではなかつたのである。キャドマン氏はダーシーの事業を「高價にして且つ長年月を要し、然かも心勞甚大な事業」と評して居る。

若しダーシーにして石油事業に對する智識と經驗を持つて居たとすれば、波斯の如き交通の便のない、未開不毛の地の事業には手を染めなかつたかも知れない。愚く云へば「盲目蛇に怖す」だが、直感で以て突進し、中途の苦難は兎も角として、世界的大油田を發見した態度は事業家として大に味ふべき點があるのである。かう云ふ點からして、例のキャドマン氏の放つた「博才」なる評語は、誠に以て面白い言葉と云ひ得るのである。

英吉利海軍省の先見

扱て石油が出るとなると、それに對應して新たな計畫を立てねばならぬ。これには資金が要る。そこで第一開發會社は改造され、千九百九年四月十四日に、資本金二百萬磅の英波石油會社(Anglo-Persian Co.)となつた。

會社は直ちに波斯灣頭のアバダンに地をトして製油所の建設に取りかゝると同時に、該製油所と油田地の間、約百五十哩の送油鐵管敷設工事にも着手した。而して之等の工事も凡て千九百十一年中に完成し、新興油田の發展を待つばかりになつた。

併しマイダニ・ナフツーン油田を發展せしむるには、尙ほ多大の資本を必要とした。従つて千九百十三年には夙くも増資の必要を感じるに至つた。だが、株主はこれ以上の出資に賛成しなかつた。と云ふのも該油田の發展が捗々しくなかつたのと、今一つはあまりに遼遠の地で油田事情が英本國の資本家に了解されなかつたからであらう。若し飽く迄も英吉利資本家が出資を拒むならば、會社は外國の資本の援助に依つて生きて行く外はなかつたのである。即ち折角の英吉利系の石油會社も外國系の會社たらんとする危機に臨んだのである。

然る處、當時、英吉利の海軍は艦船の燃料を石炭から石油に換へ、従つて豊富な油源を必要として居つた際であつたから、右の如く資本に苦しむ英波會社に投資して之を自己の支配の下に收めやうと考へるに至つた。依つて英國海軍省は調査委員を選任して事業地に派遣し、其の將來に就て調査研究を行はしめた。今の英イ石油會社長で、前に屢々引き合ひに出したキャドマン氏は、當時、パーミンガム大學の探礦學教授で、植民省の石油顧問も兼ねて居たが、此の時の委員の一人として出張したものである。而して其の報告はマイダニ・ナフツーン油田に「將來有望」の折紙を付け、同時に「政府が經濟上の援助を爲す場合には株式の過半数を掌握すべし」との

意見を附けた。

其の結果、千九百十三年七月十七日、時の海軍大臣チャーチルは下院に向て英波石油會社への投資金二百二十萬磅の支出に對する協賛を求めた。此の時、チャーチル海軍大臣が下院で行つた石油政策に關する演説は、名演説として有名なものである。

かくして千九百十四年三月、英國政府は英波石油會社の普通株二百、配當優先株千に應募して同會社の支配權を獲得した。

英國海相チャーチルの抱負

話の序に、右のチャーチル海軍大臣の演説の主要な部分だけを紹介して置かう。

「此處に二つの政策がある。一つは根本的の政策であり、一つは暫定的の政策である。根本的の政策とは海軍が液體燃料の供給に關して獨立不羈の所有者となり、また獨立不羈の産油家となることである。即ち第一には戰時に於ける供給を確保するに十分な、且つまた平時に於ける石油價格の變動を無視し得るに足る石油を國內に貯蔵することであり、第二には廉價を以て市場に入り來る原油を取扱ひ得る力を取得することである。而し

て根本的政策に關する第二の觀點は、海軍が海軍用として要求する品質に到達するまで、種々の原油を蒸溜、精製し得ると云ふ事實を包含するものである。此の事實は…他の重大問題として…過剰製品の處分に關する問題を惹起するのであるが、若し必要ありとすれば國家企業として此の製油領域への進入に就て何等躊躇する必要はないのである。吾が海軍は既に最も複雑で困難なコルダイト爆薬を製造して居るのである。…海軍の大規模な且つ種々な作業を更に擴張する事に尻込みしなければならぬ何等の理由をも見出すことが出来ないのである。根本的政策に關する第三の觀點は、英國海軍は自己に必要な天然石油を少なくとも或る程度まで供給し得る資源の所有者、或る一定程度の支配者にならなければならぬと云ふことである。總て之等の點に關して吾々は現在急速なる前進をなして居るものである。…而して石油の供給は出來得る限り英國の支配下又は勢力下にありて、英國海軍が容易に且つ確實に保護し得る海洋に航路を持つ資源より仰ぐべきである。…」

以上はチャーチルの演説の根本要旨を掻い摘んだものであるが、要するに「石油の重要性」を確認し、自國海軍用として其の「供給の安全」と「海軍として満足すべき製品の製造」とを企圖し、同時に其の資源を「自國海軍勢力圏」内に發見し置くことの計畫であるのである。

今日では、こんなことは誰でも知つて居ること、別に珍らしい議論でも何でも無い。併し二十八年前、然かも歐洲大戰前に、世界の何れの國も心付かぬ時代に、石油に就て之れだけの抱負を持つて居たのであるから、全く感服に値するのである。

油田興隆と波斯政府の收益

英國海軍省の資本的援助に依つて、マイダニ・ナフツーン油田は順調な發達が出来るに至つた。左に發展當時の産額を列記して見よう。

| | |
|-------|-----------|
| 一九一二年 | 四三、〇八四噸 |
| 一三年 | 八〇、八〇〇 |
| 一四年 | 二七三、六三五 |
| 一五年 | 三七五、九七七 |
| 一六年 | 四四九、三九四 |
| 一七年 | 六四四、〇七四 |
| 一八年 | 八九七、四〇二 |
| 一九年 | 一、〇八一、九一九 |

| | |
|-----|-----------|
| 二〇年 | 一、三五四、六三一 |
| 二一年 | 二、三一〇、〇九八 |
| 二二年 | 二、九一三、九〇八 |
| 二三年 | 三、五八三、〇〇〇 |

右の表でわかるやうに、其の發展は極めて急速且つ順調で、忽の間に世界の重要油田の一つになつて居る。而して千九百二十九年十一月には、近所のハフト・ケルと云ふ所に新油田が出現し、ますます勢を得て波斯即ちイラン國は現在では一千万噸を突破して、世界産油國の第五位に据つて居る有様である。

話の序に、此の石油産額から波斯政府が受け入れた約束の歩油金額はどの位であるかを紹介して見よう。

| | |
|------------|------------|
| 一九一三—一九二〇年 | 一、三二五、五五七磅 |
| 一九二一年 | 四六八、七一八 |
| 二二年 | 五八五、二八八 |
| 二三年 | 六二四、二〇〇 |
| 二四年 | 五六七、七四四 |
| 二五年 | 三二七、五二二 |

| | |
|-----|-----------|
| 二六年 | 七二八、七七八 |
| 二七年 | 一、四二二、〇〇〇 |
| 二八年 | 五〇三、〇〇〇 |
| 二九年 | 一、三四一、〇〇〇 |
| 三〇年 | 一、二八八、三二二 |
| 三一年 | 三〇六、八七二 |

これは歩油金額だけであるが、此の外、機械類其の他附屬品並に生活必需品に賦課して得た輸入税等を計算して見ると、波斯政府の得た金額は年々相當な額に上つたに相違ない。然り而して千九百三十年頃の波斯政府の歳出總額は八百萬磅であつたと云ふから、石油事業からの収入は波斯政府に取つては重要なものであつたのである。

其の後に起つた英波紛争

最後に最近に起つた波斯政府と英波石油會社との軋轢、言ひ換へれば石油利権を挟んでの英、波兩國の紛争を物語つて置こう。

昭和七年、即ち千九百三十二年十一月二十六日、波斯政府は英波石油會社に向つて、千九百一年にダシーに許可した石油利権一切を取消す旨を通知した。此の通知は全くの突然で、會社に取つては正に晴天の霹靂であつたのである。利権の期間は六十年であるから未だ三十年もあり、又その當時までにこんな極端な場面に到着せねばならぬ程な急迫した問題が兩者間にあつたわけでもない。だから驚いたのは英波石油會社や英國政府ばかりではない、世界中の者も驚いたのである。ことがあまりにも意外であるだけ、色々な國際的なデマも飛んだのである。併し結局は、波斯政府が石油會社からもつと多くせしめようとする魂膽であつたのである。但し波斯が非常に反英的になつて來たと云ふことは見過せない根本理由ではあるけれども。

波斯政府の意志が利権回収でなく、収入増加にあつたことは、取消通知の但書に「兩者の利益に基く新契約に對しては會社との交渉に應ずる用意あり」と述べ、「會社當面の事業は繼續して差支へなし」と附加して居る點から見ても明瞭である。考へて見れば千九百一年に成立したダシーの契約は、ダシーに對して寛大であつただけ、石油が盛んに出て來ることになると、波斯政府は如何にも馬鹿／＼しさを感ずるのである。何とかしてもつと有利にし度い。出來るならば契約を改訂し度いと考へ出すのは人情である。それでも相當に収入がある間は、そんな心持も抑へ得るのであるが、千九百三十一年度の歩油金が前年度の四分之一にも足らぬまでに減額したから、遂に爆發したのである。

問題は如何に急迫して居ても、原因が懲得である以上、解決は左程に困難ではなかつた。翌年即ち千九百三十三年四月三十日には兩者の新契約が成立して、目出度く終了したのであるが、要するに波斯政府は以前の契約よりは遙かに有利となつて納まつたのである。其の改訂の要點を掻い摘んで見ると、かうである。

- 一、契約の面積は五十萬平方哩であつたのを、千九百三十八年迄は從來の半分、其の後は十萬平方哩とすること
 - と 期限は六十ヶ年（第十一圖ダシー利権圖參照）
 - 二、送油鐵管布設權の獨占を廢棄すること
 - 三、販賣又は輸出の石油に對し一噸四志を支拂ふこと
 - 四、株主に六七一、〇〇〇磅を配當した殘餘の二〇％を波斯政府に支拂ふこと
 - 五、一般積立金を配當に使用する場合には波斯政府に二〇％を納付すること
 - 六、會社に對する税金は最初の十五ヶ年二二五、〇〇〇磅次の二十ヶ年三〇〇、〇〇〇磅
 - 七、會社の利権が満期となり又は讓渡さるゝ場合には本日以後の積立金の内二〇％を波斯政府に與ふること
- 何れにしても波斯政府は最初の契約より遙かに有利となつたのである。此の契約に依つて、事業は無事に進行して居るのである。

因にマイダニ・ナフツーン油田は發展の結果、拜火教の舊跡で有名なメスチエスレーマン Masjid-i-sul-

ainan 區域をも包含するに至つたが、今日では此の油田全體の名稱をメスチエースレーマンで表はすことになつて居る。又波斯は千九百三十五年から國名をイラン Iran と改めたため、英波石油會社も英イ(Anglo-Iranian)石油會社と改めるに至つたのである。以上の物語中に波斯と云ひ、イランと云ひ種々混同して居るが、讀者は此の點を諒として頂き度い。

四 メソポタメヤ油田の爭奪

前回に述べたやうに、英吉利海軍は艦船の燃料を石炭から石油に換へる關係から、豊富な油源の必要を感じて千九百十四年三月には波斯油田の支配權を完全に手に入れたが、それと同時に波斯の地續きであるメソポタメヤ方面にも油田開發權利を獲得しようとなつて居たものである。併しメソポタメヤの方は協約成立開際に歐洲大戦が勃發したため、協約が流産となつてしまつた。而して歐洲大戦は世界の強國に、石油が國防上不可缺の重要品たることを教へたからして、メソポタメヤ油田開發權利獲得を狙ふ國が澤山に出て來たために、其處に一大爭奪戰が國際間に展開して、語るべき數多のローマンスが残されたのである。

扱て、此のローマンスをもものする順序として、先づ英吉利が歐洲大戦前にメソポタメヤ油田開發權利を手中に納めんとした経緯から話さねばならぬ。而して之を話すには、順序としてバグダッド鐵道敷設權を挾んでの英吉利對獨逸の確執から説明する必要がある。

第一次歐羅巴大戰前に於ける英獨の確執

バグダッド鐵道敷設権問題

バルカン半島を貫通する鐵道が完成して、巴里並にウインからの急行列車即ち所謂東洋急行(Oriental expr. 88)が初めてコンスタンチノーブルに到着したのは千八百八十八年八月十二日のことであつた。此の鐵道の完成を環つて夙くから問題になつて居たのは、コンスタンチノーブルを基點として小亞細亞、メソポタミアを連絡させる鐵道の敷設である。若し其の鐵道が完成するならば、歐羅巴の中央から汽車で五日間位に波斯灣頭に出られるので、東洋への最も短縮された通路が開かれることになるわけである。従つて此の鐵道敷設権が列強の間に問題となつたのは當然である。

而して列強の内、此の遺路に最も多くの關心を持つて居たものは獨逸皇帝ウイルヘルム二世であつた。彼は此の通路を利用して東洋進出を企圖して居たのである。今日では既に夏草の夢と化したが、此の通路こそは當時カイゼルの野心であつた有名な三B系統(three Bs system)であつたのである。三Bとはベルリン(Berlin)・ビザンチウム(Bizantium)(コンスタンチノーブルの舊名)・バグダッド(Bagdad)を連ねると云ふ意味である。

そんなことで、獨逸資本團は千八百八十八年十月、アナトリア鐵道の敷設権を獲得した。アナトリア(Anatolia)と云ふのは小亞細亞の別名、と云ふよりは小亞細亞の本名である。此の獨逸資本團の許可された線路と云ふのはコンスタンチノーブルの對岸、亞細亞側に在るハイダル・パシャを基點として、今日土耳其の首府となつて居るアンゴラを経て、其の東方のサイヴァスを通じて小亞細亞高原即ちアナトリア高原を横斷してバグダッドに到着するものであつた。ところで此の線路の一部は既に英吉利資本團に許可されて居り、自餘の部分も英吉利資本團のものとなるべき形勢であつたのである。然るに附帯條件のことで、英吉利側と土耳其政府側との意見が一致せず、ゴタ／＼して居る際に乘じて獨逸側が巧みに手に入れてしまつた。但し此の線路に對しては露領近くを通過する故を以て、露西亞政府が強硬に反對したため變更の必要を生じた。依つて土耳其の古都コニアを經、アダナ、アレppo、モスルを通過してバグダッドに達する路に變更することにした。此の變更も千九百二年三月に許可になつた。此の線路こそは、現に利用されつつあるバグダッド鐵道であるのである。而して千九百三年三月には、獨逸側は土耳其政府をも加入せしめてバグダッド鐵道會社を組織し、同時に線路をバグダッドから波斯灣頭まで延長すること並に數多の支線建設の權利をも該會社に附與させた。

かうなつて見ると、獨逸の東進政策の基礎は完全に築かれたわけである。獨逸がメソポタミアに勢力を得、従つて波斯灣方面に勢力を得るに至ることは、印度方面に於ける英吉利の權益を脅かすことになるから、英吉利た

るもの決して黙視しては居られないのである。實に、此の時以後、歐洲大戰直前に和解を見たまで十餘年間に互つて、英獨兩國はバグダッド鐵道建設を挟んで血の滲むやうな外交的格闘を續けたのである。但し如何なる問題を捉へ、如何なる態度で彼等が確執したかに就ては、本問題に關係ないから此處には省略する。

歐洲大戰前に於けるメソポタミア油田問題

バグダッド鐵道問題は暫く措き、之と同時に起つた油田問題を述べねばならぬ。

前述の鐵道敷設に當つて、會社の當局者は別に地質調査隊を編成して沿線の地質調査を行はしめ、線路の安全を期すると同時に附近の礦物資源の探查をも兼ね行はしめたのである。此の地質調査隊がメソポタミアのバグダッド州並にモスル州に入るに及んで數多の石油露面を發見した。依つて獨逸政府は更に石油に精通せる技師を派遣して之を調査せしめ、次で千九百四年、バグダッド鐵道會社をして土耳其政府に申請せしめ、上記二州に於ける石油開發の許可を受けしめてしまつた。

ところで右のメソポタミアの石油地は、前回に物語つたダーシーの最初に手にしたカスリシ・リン地方の隣接地である關係上、ダーシー事業團も夙に同地方に着目して、千九百二年以來土耳其政府にその許可の運動を續けて居たものである。それにも不拘、其の探掘權が手もなくバグダッド鐵道會社に許可されたことは、如何に獨逸の

暗躍があつたかを想像せしめるのである。就中、其の許可がカイゼルの土都訪問後、間もなく行はれたことを考へ合せば、其の間の消息は容易に推察し得るのである。かく英吉利系のダーシー事業團と、獨逸系のバグダッド會社とが、メソポタミア石油の開發許可權を争つたが、これがメソポタミア油田争奪戰の皮切りであつたのである。

然るにバグダッド鐵道會社は、折角石油開發の權利を獲得して置きながら事業に着手せず、空しく二個年を経過したため、契約の條文からすれば當然に權利の喪失となることになつたのである。此の事實を知つたダーシー事業團は好機到れりと、千九百六年から再び之が許可運動を開始した。對之、バグダッド鐵道會社は其の失權を認めず、依然、權利の所有を主張したため、石油利權を挟んで英獨間に新らしい葛藤が生じて來たわけである。

さらでなに英獨は、前述のやうにバグダッド鐵道を中心にして反目確執して居た際であつたから、此の石油地問題は感情的にも熾烈ならざるを得なかつた。事態が斯くなると、土耳其政府も單なる法規上の手續のみで裁定するわけには行かず、暫くは靜觀するの止むなきに立ち到つたのである。そこへ英吉利系のロイヤル・ダッチ・セル會社でも、メソポタミア石油地の有望なるに心付き、千九百七年から必死の運動を開始したから、事態はますます面倒になつて來た。さうこうして居る内に、ダーシーの試掘地マイダニナフツーンが大成功したことが知れて來て、三者の競争は更に油を注がれた形で、一段と熱度を加へたのである。

仲裁は時の氏神

茲に此の三者の競争調停者として最も適當なる人物が現はれた。その人は英吉利の資本家で、其の名をアーネスト・キャッセルと云つた。此の人は英吉利人ではあつたが、不思議に獨逸政府にも獨逸資本家にも信用が厚く、また土耳其ナショナル・バンクの經營に加はつて居た關係から土耳其政府にも善いので、此の問題の調停者としては最も恰好であつた。

キャッセルは三者の競争を避けしむる方法として、三者の資本を以て土耳其石油株式會社を組織し、油田開發に當らしむる案を提出した。キャッセルが調停に乗り出したのは千九百十二年であつたが、丁度、此の時分から、さしにも熾烈であつた英獨の反目も緩和されて來て、十三年にはメソポタミアに對する英獨協商がロンドンで開かれるに至ると云ふ有様であつたから、石油問題の協定も圓滑に進捗した。

其の結果、石油問題の方は英獨協商成立の先驅として、千九百十四年三月十九日に完全な解決を見た。其の協定はキャッセル提案通りに土耳其石油株式會社を設立することになり、其の資本の割當は次のやうに決定した。

五〇% ダーシー事業團 英吉利系（此の内にはキャッセルの代表せる土耳其ナショナル・バンクに對する割合を含む）

二五% ローヤル・ダッチ・セル會社 英吉利系

二五% 獨逸銀行

これと同時に土耳其政府はメソポタミアに於けるモスル、バグダッド、キルクウク、スレイマン四州の石油開發の利權を土耳其石油會社に許可したので、メソポタミア油田争奪戦は目出度く解決を見たわけである。但し油田開發に關する細目條項の決定を見ない内に、歐洲大戦となつてしまつた。

斯く一度び無事に解決したメソポタミア油田問題も、大戦の後仕末の不公平から再び國際間の大争奪戦を惹起したが、これに就ては後項に物語らう。

歐洲大戦前の英獨完全融和

これは本ローマンスに取つては主問題ではないが、メソポタミアに關しては本筋である英獨協商の成行を簡単に紹介して置かう。

前に話したやうに、石油問題の協定を先驅とし、英獨協商は千九百十四年六月十五日に漸く成立した。其の重要點は、

「英吉利は獨逸のバグダッド鐵道敷設に對して好意を持つと同時に競争となる如き鐵道敷設を企圖しない事」

「獨逸は英吉利の了解なくして支線を建設し且つバスラ(Basra)以南の波斯灣に鐵道を延長しない事並に波斯灣に築港せざる事」

「バグダッド鐵道會社は英吉利政府の是認する英吉利人二名を重役とする事」
 等であつた。一言に盡せば英吉利國は印度の權益を脅かされざる範圍に於て獨逸のバグダッド鐵道敷設を認めたくわけである。

然り而して正式の調印は土耳其政府の承諾を得て行ふことになつて居たのであるが、不幸にして其の手續の終了しない内、即ち八月四日には英獨開戦となり遂に歐洲大戰となつて、其の努力も水泡に歸してしまつたのである。若し此の協商が今少し早く成立して居れば、英獨間の感情も一段と融和し、従つて歐羅巴の政狀にも變化を來たして、或ひは大戦にならずに済んだかも知れぬと云はれて居る。

右の石油協定、英獨協商を通じて英獨の態度を見るに、英は石油に、獨は鐵道に重點を置き、各々其の欲する所に優越の地歩を占めて妥協したものと云はれ得るのである。殊に英吉利政府は前回に紹介したやうに、逸早く石油の燃料としての能力を認め、石油協定成立と殆ど同時に波斯油田を掌中に收めた點から見ても、英吉利政府の此の方面に於ける油田に對する興味が如何に大であつたかを窺ひ得るのである。又、あれほど反目し合つて居つた英獨間の感情が緩和し始めたのも、英吉利政府が石油の將來性に心付き油源獲得の必要を感じ始めた時を

同じうして居る點から見ても、英吉利の底意のほどが窺はれ得るのである。

歐羅巴大戰後に於けるメソポタミア油田問題

大戰中に於ける狡猾なる英吉利の行動

扱て歐洲大戰後に於ける問題を語る前に、大戰中にメソポタミアで英吉利が執つた行動を一瞥して置く必要がある。

歐洲戰爭勃發するや、英吉利政府は直ちに印度政府に命じてメソポタミアに兵を送らせた。其の目的は英波石油會社の事業地保護にありと云つて居るが、其の後の行動は單に英波石油會社の事業地保護と云つた様な消極的なものでなくて、どしどし北上してメソポタミア全部を占領すると云ふが如き態度であつた。即ち戰爭の終末に近い千九百十八年の秋頃迄にはモスル迄占領して居つたものである。而して愈々千九百十九年の平和會議になつて見ると、英吉利はメソポタミアの委任統治權を得て、完全にメソポタミア油田開發實權を掌握してしまつた。

だから英吉利の戦時中のメソポタミアに對する積極的軍事行動の眞意は、メソポタミアの統治權を得る口實のためであつたのだと、疑はれても仕方がないものであつた。更に英吉利が大戰最中に、兵をメソポタミア方面に

割いたと云ふことは、歐洲戰場に力を集注するの愚を避け、石油と云ふ戦後の大利權に着目して、拔目なく働いたものだとも云はれても仕方のないものであつたのである。それは何れにしても、英吉利がメソポタミア油田獲得に對して造次顛沛の間に於ても伶俐に立ち廻つて居たことは間違ひのない事實である。

實に歐洲大戦後のメソポタミア石油問題は、此の英吉利の狡猾な態度に端を發したのである。

佛蘭西先づ英吉利の態度に憤慨

幾度も云ふが、國防上不可欠のものとして眞に石油の重要性が認められたのは、歐洲大戦中の經驗からである。世界各國とも將來の戦争は石油なくしては國を守れない、強國としての位置を保てないと云ふことを痛感して來たのである。即ち戦後に於ける石油に對する認識は、戦前に於けるそれとは格段に相違して居たのである。従つてメソポタミア石油地の處理に對しても、英吉利の行動が簡單に承認されない狀勢になつて居たのである。

此の英吉利の態度に對し第一に抗議したものは佛蘭西であつた。實を云ふと歐洲大戦中石油の不足に最も苦んだのは佛蘭西であつた。戦ひの勝利に對して如何に石油が重要な要素であるかを眞に味つたのは佛蘭西であつたのである。従つて佛蘭西では、戦時中から上下を擧げて石油政策に熱中し、如何にしても油田を手に入れなければならぬと窩心して居たものである。今日、石油界の標語となつて居る「石油を制する者は世界を制す」と云ふ

やうな言葉も、其の當時、佛蘭西の上院議員が「石油を持つ者は帝國を持つ」と叫んだ言葉から變化したものである。かく叫ばしめるほど戦争中から佛蘭西人は、石油政策、言ひ換へれば油源獲得と云ふことに熱心であつたのである。

此の佛蘭西が、メソポタミア石油地全部を獨占した英吉利の狡猾な態度を默視するわけではない。強硬に英吉利に捻じこんだところ、流石の英吉利も多少は良心に咎めたらしく、稍簡單に譲歩を示したのである。即ち其の結果は、千九百二十年四月二十四日の伊太利サン・レモに於ける英佛石油協約となつて現はれたのである。其の協約中のメソポタミア油田に關する部分の骨子は

「戦前に於ける土耳其石油會社の資本割當に獨逸側持分とされた二五%を佛蘭西に移すこと」

「之に對してメソポタミアから地中海への輸送に必要な鐵管布設、それに必要な鐵道の布設及輸送石油の免稅等を佛蘭西委任統治下にあるシリア領内に於て認めること」

であつた。佛蘭西は大いに満足した。

これで問題が片附けば申し分はないのであるが、さう安くは問屋が卸して呉れないから面白いのである。

北米合衆國の抗議と土耳其の介入

英佛のサン・レモ協約を知つて、非常に激昂したのは北米合衆國であつた。千九百二十年四月末日、合衆國政府は英吉利政府に向つて、嚴重な抗議を送つた。其の抗議の要旨は

「戰敗國の利権を英佛兩國で壟斷し、同じ戰勝國である北米合衆國に均霑せしめないのは不都合である」と云ふのであつた。それに對して英吉利政府は詳細に戰前から關係を説明し、他國に均霑せしむべき性質のものでないと強硬に拒絶した。併しそんなことで引込むやうな合衆國ではない。更に強硬に英吉利に抗議して、問題は相當重大化して來た。

そうこうして居る内に、敗殘の土耳其では、ケマル・パシヤの奮起に依つてアンゴラ政府が出現し、大いに國勢を盛り返して勝手な理窟を云ひ出したから堪らない。メソポタミア問題は更に複雑となつて來た。その土耳其政府の言ひ分と云ふのは、第一が國境問題である。それは「メソポタミアのモスル、スレイマン、キルクウクの三州は、民族の關係から當然土耳其に屬すべきもので、新王國イラックに與へらるべきものでないから、土耳其に還附されたい」と云ふのであつた。

此處で簡單にイラック王國のことを附け加へて置くが、平和條約に於て、もと土耳其領であつたメソポタミア

と呼ばれた地方を一括して獨立の王國とし、英吉利が其の統治の委任を引き受けることにした。それと同時に國名をイラックとしたのである。此のイラックと云ふのはメソポタミアのことをアラビア人がイラックと呼んで居たからである。そして王様もアラビア人の名族を据へたのである。

扱へ前にも述べたやうに、モスル、スレイマン、キルクウクの三州はメソポタミア石油地の重要部分であるから、これを土耳其領とすることに英吉利が賛成するわけではない。土耳其政府の第二の言ひ分は、舊政府の契約した利権取消問題である。即ち「土耳其新政府は、帝政時代に締結された利権契約は新國民議會の協賛を経ないものであるから、全部無効とする」と發表したことである。かうなると、サン・レモの英佛石油協約を初め、土耳其に關係ある各國の利権は總て有名無實となるわけである。それから土耳其政府第三の言ひ分は「チエスタール利権を改めて土耳其政府で承認する」と云ふことであつた。此のチエスタール利権と云ふものは北米合衆國の退役海軍將官のチエスタールなる者が、小亞細亞全體に互つて二千八百哩の鐵道敷設權並に其の沿線兩側二十軒の地域内に於ける礦物採掘權を得んとする利権である。此の問題は千八百九十六年から千九百三年頃にかけて交渉が重ねられたが、何等要領を得ずして其の儘になつて居たものである。それを今更らしく持ち出したのは、要するに英佛に對する嫌がらせに過ぎない。其の鐵道に伴ふ權益としてメソポタミアの油田の大部分がチエスタール利権中に加はつてしまふからである。

而して土耳其新政府が右のやうに種々な問題を持ち出したことも、結局、北米合衆國政府がメソポタミア石油利権に割込むための手段として、土耳其政府を使喚したものと見られて居る。

獲物さへ獲れば静まるのが猛獸の常

扱て、此の紛争解決の一方法として聯合國と土耳其とは、千九百二十三年二月瑞西のロザンヌで國際會議を開くことにした。これが第一回ロザンヌ會議である。併し此の會議も、前回に紹介した土耳其の主張する第二の問題、即ち土耳其新政府は舊帝政時代に成立した利権契約でも新國民議會の協賛を経なければ無効であると云ふ問題のために、忽ち決裂してしまつた。次で同年の四月から七月にかけて同じ場所で、同様な會議を開くことになつた。これが第二回ロザンヌ會議である。此の會議では、第一回當時よりは關係者の氣持が大いに緩和されて居り、會議成功の曙光が認められて居つた。例へば土耳其の主張する第一の問題、即ちモスル、スレイマン、キルクウク三州をイラック領から土耳其領に取り返さうとする問題は、英土兩國間の友誼的若くは國際聯盟會議の仲裁に依つて決定しようとするに取り極めたやうな状態であつたのである。併しメソポタミア油田開發權確認の件を附議する段になると、合衆國委員が進行を妨害したため、其の決定を延期せねばならぬ破目に立ち到つた。斯くて第二回會議も外面的には不成功に終つたが、其の間に裏面工作が行はれて居つたのである。即ち外面に

は紛争しつゝあつた英米兩國の委員間にも、内密に妥協が進められて居つたのである。要するにロザンヌ會議閉會後、此の問題は妥協氣分を含ませてロンドン、ワシントン間の外交交渉に譲られたものである。其の結果は、英波石油會社に割當てられた五〇%の權利の半分を、米國側石油會社團に割愛することに依つて米國側を満足させることであつた。而して之に關する正式の發表は千九百二十六年四月であつた。尙ほ此の外の境界問題等は、千九百二十五年十二月の國際聯盟の強硬なる決議と、其の後の英土間の祕密交渉に依つて平穩に英吉利側の希望通りに解決した。要するに、かうした問題の解決を見た上で英米妥協案が發表されたわけである。然り而してチエスター・コンセッション問題の如きは、最初から惡戯的に持ち出されたものであるからして、他の問題解決と共に雲消霧散してしまつたのである。

さしにも混亂を來たしたメソポタミア油田問題も、北米合衆國を仲間に入れることに依つて他愛もなく平穩に歸してしまつた。誠に以て「けろりと濟みし野分哉」の感がある。考へて見れば滑稽の至りである。

利権内容と株の割當

その決定した内容はかうである。

土耳其石油會社をイラック石油會社と改稱し、該會社とイラック政府との間に、大要次のやうな利権契約を締

結した。

- 一、イラック政府はイラック石油会社に對し、モスル及バグダッド兩州内に於ける石油探掘權を七十五年の期限を附して認可する。
- 一、イラック石油会社は三年間に調査を終了して、八平方哩の鑛區、二十四個を選定出願すること。
- 一、イラック政府はイラック石油会社の選定鑛區以外の地域を競賣に附する場合には、イラック石油会社をして代行せしめることを約束す。

一、兩者の利益のために契約に改訂の餘地を残すこと。

其の外、會社側から政府に支拂はるべき鑛區代金、歩油に關する規定等もあるが、茲には省略して置く。而してイラック石油会社の株式割當は、前に話した英、米、佛の割當を基準として次のやうに決定した。

| | | |
|---------------|---------|-------|
| 英波石油會社 | 一一三・七五% | 英吉利系 |
| ロイヤル・ダッチ・セル會社 | 一一三・七五% | |
| 佛蘭西財團 | 一一三・七五% | イラック系 |
| 北米合衆國財團 | 一一三・七五% | |
| グルベンキアン | 五・〇〇% | |

右の内、英吉利系の會社に就ては説明の要はないが、佛蘭西財團は此の國の石油事業一切を代行する佛蘭西石油會社が代表し、合衆國ではニューチャージャー及び紐育のスタンダード、汎米石油及運輸會社、大西洋製油會社、灣岸石油合同會社の出資の下に近東開發會社(Near-East Development Corporation)を組織してこれに臨むことにした。尙ほグルベンキアン(C. G. Gullbenkian)は、此の利權契約成立に盡力したイラック人であるが、其の盡力の報酬として與へられたものである。但し此の權利は後に英波石油會社に譲渡されたから、英吉利系は完全に株數に於て過半數を占むることが出来たのである。蓋しそれも豫定の行動であらう。

大噴油で起つた仲間喧嘩

これで永年に互つてのメソポタミア油田問題は目出度く解決して、いよいよ開發に取りかゝる段取りとなつたのである。

而して掘鑿に着手したのは千九百廿七年の初めであつたが、場所はキルクウクと云ふ有名な部落の近くにあるババ・グルグルと云ふ部落であつた。此の油井は其の年の十月二十七日に、深度二千五百呎前後で極めて豊富な油層に達して大噴油した。其の量は日産三萬噸と云はれた。しかし送油の設備の全然ない場所であるため、石

油を噴かせても致方がないから手を盡して制御に努めた。

こんな具合で結果は上々吉であつたが、上々であつただけにまた別な問題が起つたから、世の中はまゝならぬものである。それは、當時世界の石油界は石油の増産と之に伴ふ油價低落に悩みかけて居た時であつた。従つて其の上にイラックで大量の石油を出されたのでは救はれないと云ふので、世界各地の油田を經營して居る英米の資本家は、イラック油田の急速な發展を好まず、送油設備の急速完成に腰を上げなかつた。これと反對に石油を持つことの少ない佛蘭西、出油に依つて歩油金の収入の増加するイラック政府は、此の油田の發展を熱望した。こんなことで持たぬ者の焦慮と、持つ者の悠長とが激しい衝突を來たしたのである。

ところで、今一つ出油の結果、起つた喧嘩がある。それは此のイラックの産油を鐵管で地中海に送るのであるが、其の地中海側の終點を何處に置くかに就て英佛の意見が一致を見なかつたことである。英吉利の希望は自國の委任統治國であるパレスティンのハイファ港に置き度いと云ひ、佛蘭西は同じく自分の委任統治國であるシリアのトリポリに持つて行き度いと主張した。御互に距離が近いとか、其の道は山があつて悪いとか何とか云ひ合つては居るが、其の腹の底は、大量石油の吐き口を自己勢力圏内に置き度いからである。一朝有事の際、此の吐き口を持つことが如何に有利であるかを考へれば、双方が欲しがるのは無理もないことである。それだけに、双方の態度は頑強で、互ひになか／＼譲りさうにもなかつた。

善しは善しで、こんな問題が起つて來るから、世の中は全く面白いものである。

B・O・Dの出現と問題解決

扱て、かうして仲間喧嘩をして居る間に、漁夫の利を占めようとして現はれ出た者がある。それは英吉利の資本を中心として、伊太利、瑞西、佛蘭西、獨逸等の資本を加へて結成された英吉利石油開發會社(British Oil Development Co. 略してB・O・D會社)の活躍である。此會社はイラック油田地域に於て、イラック石油會社が八平方哩の鑛區二十四個を採擇した殘餘の地域を手に入れ開發するのを目的としたものではあるが、これをものにするにも、イラック政府とイラック石油會社との隙に乗ずるのが此の會社の付け目であつたのである。此のB・O・D會社の出現はイラック石油會社に取つては頗る苦手であつたのである。それは自己所有鑛區の隣に他人の鑛區の存在することは、競争掘鑿を誘致するため、技術上にも採油上にも、統制が取れなくなると云ふ困難が出来るからである。この會社の困惑に付け込んでイラック政府は、イラック石油會社が本腰になつてキルクウク油田の開拓に取りかゝらぬならば、遠慮會釋なしにB・O・Dに鑛區を許可するぞと威嚇に出た。

以上のやうな様でイラック油田問題は、イラック石油會社の内輪喧嘩、對イラック政府との確執、B・O・Dの横槍等で再びこつた返して三、四年を経過した。併し結局、次のやうな條件で萬事解決を見ることになつた。

言ひ換へれば、イラック石油会社は曩に締結した契約の内容を大體次のやうに改訂して納まつたのである。即ちイラック石油会社の方は區域をチグリス河以東だけに縮めた代りに、其の區域全部を自己の鑛區として絶對に他の会社の鑛區設定を許さぬことを政府に認めさせた。そして之と同時にイラック石油会社は、千九百三十五年末日までに、總輸送力年額三百萬噸以上を持つ送油鐵管を地中海まで布設すること、一時現金四十萬磅、並に送油開始後二十年間は最低産額二百萬噸に對し一噸に付き四志の歩油金を支拂ふことを政府に約束した。但し此の四十萬磅の金額の半分は鑛區代金であるから政府の所得となるが、他の半分は歩油金の前拂で最低産額超過の際の歩油金で差引きして會社に返付するものである。

この一地方全部獨占と云ふことは、キルクウク大油田を獨占經營し得る點だけでも非常に意義あるものである。何分にもキルクウク油田の構造は、幅二哩以上、延長二十哩を超える大構造であるから、これが數個の鑛區に分割されて競争經營が起るやうなことは、イラック石油会社も堪へなかつたところであらう。又他の構造も宏大であるから、同様に考へ、結局、分割された多數のものよりは、多少数は減しても獨占の方が善いと考へたのであらう。それは兎も角として、問題の一つはこれで片付いたわけである。此の契約改訂は千九百三十一年三月二十四日正式調印を見た。

B・O・Dの獲物は何か

以上でイラック石油会社の方は片付いた。然らば横槍に出たB・O・D會社は何を獲たであらう。それはイラック石油会社に獨占地域として許した部分以外の、廣大地域の探掘權を得て納まつたのである。其の區域と云ふのはチグリス河の西側の地域で、北緯三十三度以北のイラック領全部であつて、これに七十五年間の獨占的探掘權を得たのである。此の契約は千九百三十二年四月二十日を以て正式に決定した。

要するに残された世界の油田として天下の視聽を集めたメソポタミア即ちイラック油田は、チグリス河を境として東をイラック石油会社、西をB・O・Dにと分割されたわけである。

序にB・O・D會社とイラック政府との契約の要點を紹介して置かう。

B・O・D會社は仕事の方では、契約調印の日から十八ヶ月間に掘鑿を開始し七ヶ年半以内に正式の輸出を開始して、輸出開始の年を除き毎年百萬噸を下らざる量輸出すること、同時にイラック國內の特定地から地中海の港迄少なくとも一ヶ年百萬噸の輸送力を有する設備を完成することを約束した。但し茲に云ふ輸送の設備と云ふのは必ずしも鐵管布設と云ふわけではなく、適當な方法であればよろしく、また海も何處を定めてもよいと會社に委せてある。それから金銭の方では、鑛區代金として千九百三十三年一月一日支拂を以て第一年度分として

十萬磅を支拂ひ、以後毎年二萬五千磅宛を増加して二十萬磅に達した年以後は、二十萬磅宛を正規の輸出の開始されるまで支拂ふことを約束した。そして正規の輸出開始後二十年間は、一噸に付き四志の割合を以て歩油金を支拂ふことも約束した。此の外に少し酷な條件と思はれるが、政府は國內使用を條件として、採油量の二割を無償で收納することの約束も出來て居る。

砂漠に横へられた十二吋鐵管千二百哩

最後に残る問題は、英佛の送油鐵管の終點争奪戦であるが、之もイラック石油會社の問題と同時に解決した。それは結局双方に終點を置くことと云ふことで納まつたのである。従つて此の問題は、會社と政府との間の契約に第一期はパレスタイン方面に送油能力五割以上を有するものを布設し、第二期工事としてシリア方面に布設すべしと規定してある。

これで萬事解決した。従つてイラック石油會社は千九百三十二年七月には鐵管布設に關する一切の設計を發表し、英、米、佛、獨等の鐵管製造會社に注文を發した。

右の布設地域は、世にシリヤ砂漠と呼ばれてゐる礫礫不毛の地で、地形は比較的平坦に近いが、一本の鐵道も無ければ一人の住人も居ない。また一滴の水を得ることも容易でない。従つて全長一千五百五十哩に達する鐵管の

配列、數千人の労働者の運搬と給養も並大抵ではなかつたに相違ない。工事に先つて電話線を架設した仕事でも大變なことであつたらう。それでも二ヶ年に完成して、千九百三十四年五月廿一日から石油の流通を見ることになつた。其の經費總額は一億磅に達したらうと云はれてゐる。鐵管の大きさは普通の場所が十二吋、高壓を受けるやうな少數の部分が十吋である。キルクウク油田から百五十哩の間は二本平行で布かれて居るが、其處から途を別けて一方はハイファに、一方はトリポリに向つて居る。キルクウクからハイファまで六百十八哩、トリポリまで五百三十一哩、鐵管の總重量は十二萬噸と云はれてゐる。

送油設備完成と共にキルクウク油田は、本來の産油能力を發揮することが出來た。試みに千九百三十一年以後のイラック國全産額を表示して見ると、

| | |
|---------|------------|
| 千九百三十一年 | 九〇〇、〇〇〇噸 |
| 三十二年 | 八三六、〇〇〇 |
| 三十三年 | 九一七、〇〇〇 |
| 三十四年 | 七、六八九、〇〇〇 |
| 三十五年 | 二七、三一、〇〇〇 |
| 三十六年 | 二九、四〇六、〇〇〇 |

三十七年

三一、二七一、〇〇〇

と云ふ有様で、鐵管流通と同時に産額が増加して居る。右の産額中には他の油田のものも多少は入つて居るが、他のものは極めて少量で、全部がキルクウク油田のものと見て可い。

尙ほキルクウク油田の、現在までに確定された産油可能範圍即ちブルーブド・エリアは延長十哩、幅二哩で、世界に比類の少ない大油田である。而して此の大油田を一個の會社で獨占し、所謂一元操作の世界的模型と呼ばれる程の理想的採油を實行して居る。従つて現在の産額も僅々十數本ばかりの油井に依つて採掘して居る有様である。

第五編 世界の油田現況

一 持てる國、持たざる國

石油資源獲得競争激甚の廿年間

第一次歐羅巴戦争の経験で国防用としての石油の重要性が知られた結果、世界の強國どもは競つて油田の開発に、石油資源獲得に努力した。同時に天然石油の不足を補ふべく、人造石油の完成にも苦心を拂つたものである。然らば第二次歐羅巴戦争の始まつた今日、言ひ換へれば廿幾年も経過した今日、彼等強國の凡ては、安心し得る程度に石油を持つことが出来たかと云ふに、決してさうでなかつた。今日でも自國內の石油に依つて自給し得る強國は、北米合衆國と露西亞だけである。此の點から云へば、今も昔も變つて居ないのである。自國內の石油と云へば、英吉利は第一次歐羅巴戦争の末期頃から今度の戦争が始まるまで、熱心に試掘はしたが少しもその甲斐なく、依然として皆無である。而して其の他の國も努力に對して酬はれることの少なかつたことは、大同小異で、國內産額は舊態依然たるものであつた。併し強ひて求めれば獨逸が以前よりは何程か増加した位である。一方、國外油田獲得に於ては英吉利が傳統の方針に力を入れ、今日では北米合衆國に次いで最も多量に石油

を持つ國となつて居ることが著しく目に着くのである。之に次で聊か成功したのは佛蘭西である。此の佛蘭西の成功は前編に述べたやうに、メソポタミア油田採掘権を英米と共に分割し、其處の油田の成功に依つて相當量を持ち得るに至つたこと、羅馬尼亞油田に於ける投資の成功とである。右のメソポタミア油田の分割に就ても、同じ戦勝國の仲間である日本と伊太利とは、其の分け前に預かり得なかつたのであるから誠に惨めなものであつた。唯だ伊太利はアルバニアを併合し、日本は北樺太で何程かを増加して居るに過ぎない。たゞ獨逸だけは戦敗國の立場として海外進出も出來ず、其の方面では何物も得ることが出來なかつた。併し其の代りに、人造石油の成功で大いに氣を吐いて居る。

以上は第一次歐羅巴戦争から第二次の開戦を見る頃までの世界石油界の大勢であるが、之を數量的に扱つて見るとかうである。

昭和十四年度、即ち千九百三十九年度の世界の石油總産額は二十億八千萬噸（一噸は四十五ガロン）であるが、これを採掘して居る資本國に類別して見ると次のやうになる。

| | |
|-------|-------|
| 北米合衆國 | 六九・二% |
| 英吉利 | 一七・四% |
| 露西亞 | 一〇・七% |

其の他 二・七%

此の二・七%中には日本、獨逸、佛蘭西、伊太利、羅馬尼、匈牙利、アルゼンチン等が含まれて居るのである。尙ほ北米合衆國は

| | |
|-------|-------|
| 自國內産額 | 六〇・八% |
| 海外産額 | 一一・一% |
| 合計 | 七一・九% |

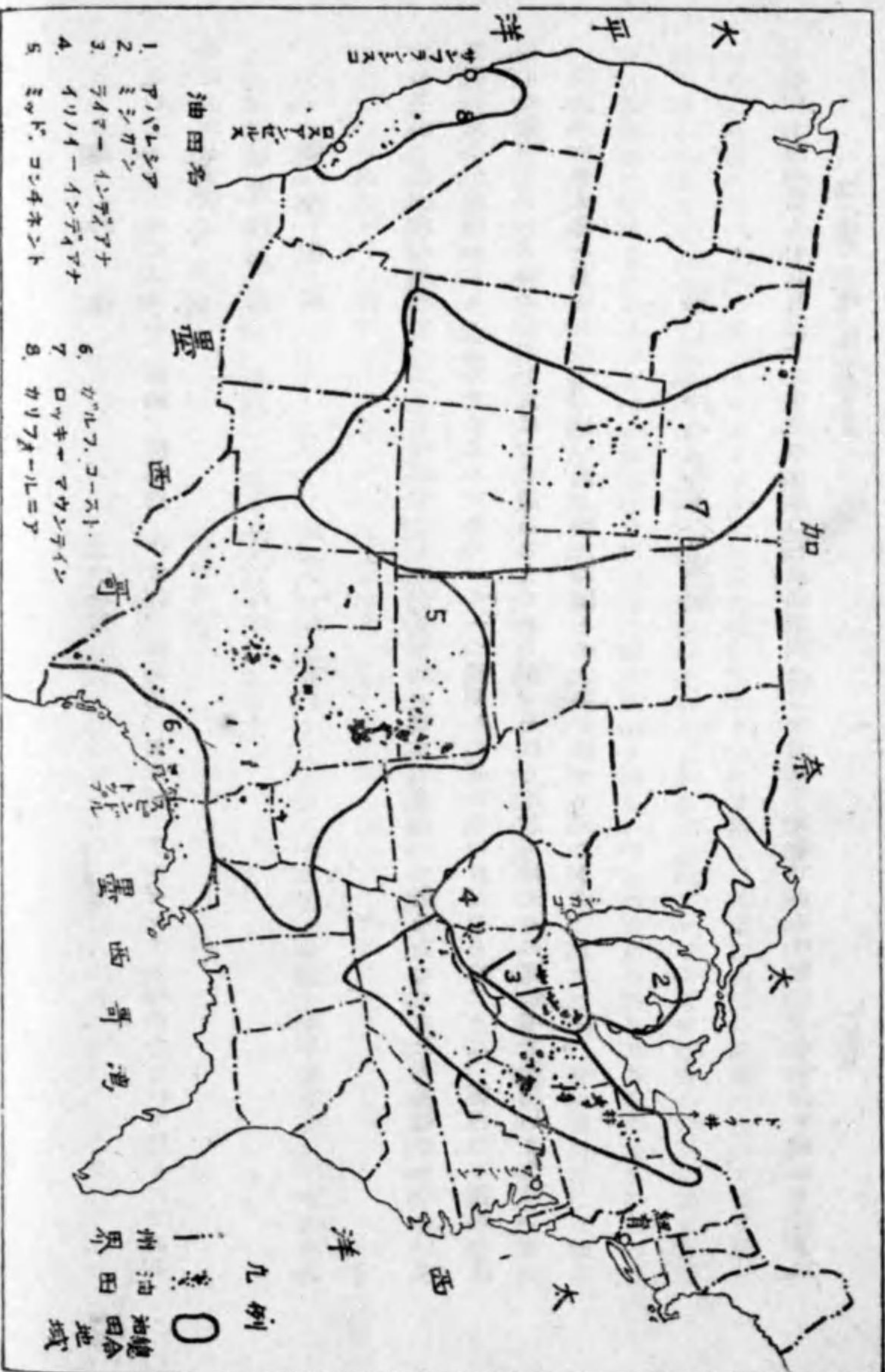
であるが、自國內の産額中、二・七%に當るものが英吉利の資本で産出して居るため、之を英吉利のものとして差引したのが前掲の六九・二%であるのである。今一つ説明して置かなければならぬことは、露西亞と獨逸の産額には舊ポーランド領のものが加はつて居ることであるが、それらに就ては夫々の國の項で説明しよう。

以上の如き大勢を基礎として、持つ國と持たぬ國との大要を述べて見よう。

夥しく持つ北米合衆國

昭和十四年即ち千九百三十九年度の世界の石油總産額は二十億八千萬噸であるに對し、北米合衆國は十二億六

第十二圖 北米合衆國油田分布圖



千五百万噸を持つて居る。即ち約六一%で、世界總産額の過半数を持つて居ることになる。かく此の國が世界の國々に冠絶した大量の石油を持つに至つた経過を、以下に聊か詳しく述べて置かう。

前編にも詳しく述べたやうに、北米合衆國の石油産額は二十世紀に入ると同時に、テキサス州、カリフォルニア州に大油田が出現し、世界第一の榮冠を奪還したばかりでなく、更に引き續いてオクラホマ州外數州に相競ふやうに大油田が續出したため、數年の間に他國が追隨出来ぬ程度に産額が増加した。其の増加振りが如何に目醒しいものであつたかを、數字を擧げて示せばかうである。即ち千九百一年には六千九百萬噸で露西亞の下位にあつたが、二年には八千八百萬噸となつて露西亞を凌駕し、次の三年には早くも一億噸に達した。更に十年には二億噸臺に上り、十六年には三億噸臺、二十年には四億噸臺、二十二年には五億噸臺、二十三年には七億噸臺と云ふ躍進ぶりであり、二十九年には十億噸臺となつた。併しあまりの増産が祟つて油價の低落を招くため産額抑制が行はれて、其の後は多少の減額を見たが、最近では十二億噸臺を保つて居る。而して之を州の數に就て見るに、最初はペンシルヴェニア州に始まつたことは云ふまでもないが、九百一年には少しでも石油を産出した州は十五となり、千萬噸以上の州は三つ、百萬噸臺が二つであつた。然るに千九百三十九年になると州の數は二十三で全州の丁度半ばに達し、量に於ては一億噸以上の州が三、千萬噸臺が八、百萬噸臺が七と云ふ素晴らしい状態になつて來た。一億噸以上の州はテキサス州が四億八千五百萬噸で第一、カリフォルニア州が二億二千四百萬噸で第

二、オクラホマ州が一億五千九百萬畝で第三位である。之等に次ぐものとしてはイリノイ州及びルイジアナ州の九千四百萬、キャンサス州の六千萬がある。よくも出るもの哉と感心せざるを得ない。尙ほ二十三州に擴がる油田の分布状態は第十二圖を見て頂き度い。

然らば何故にかく合衆國の石油は増加したかと云ふに、勿論、此の國の天恵が極めて豊かであることに歸せねばならぬが、此の國の石油業者の努力も亦た大いに認めてやらねばならぬ。彼等は強力な會社を持ち、巨大な資本、果敢な勇氣に加ふるに科學を應用して石油採掘に當つたものである。即ち天恵と努力と相俟つて今日あらしめたのである。

以上の如く國內に大量を持つ上に、此の國は更に國外に油田を經營して大量の産額を擧げて居る。千九百三十九年の計畫から見ると、其の數量は凡そ世界總額の一割に當つて居る。従つて北米合衆國が支配し得る石油の總量は、上に述べたやうに凡そ世界總額の六割九分位に當るのである。かく此の國が海外に産油地を得たことは、逸早く石油業の有利なことを知つた關係から、自國産石油を海外に賣り擴めると同時に、上述の強力な會社の資力の下に各地の石油産地を手に入れ、油田の開拓に當つて居た上に、更に第一次歐羅巴大戰後の大勢に促がされて、油田獲得に馬力をかけたからである。それ故、現在では強國と見做される國以外の石油産地に、此の國の資本の介入して居ないところは極めて少ない状態である。此の國の石油業者が如何に不屈不撓で、金を惜まらず海外油田

開發に努力するかと云ふことの近い一例は、アラビアの砂漠の中に油田を開いたことである。最近まで石油があらうなどは誰も考へなかつた、交通の便の悪い、一滴の水も無い砂漠の中に、僅かな兆候を手懸りとして進軍して遂に立派な油田を開拓した。其の技術と勇氣にも感心せざるを得ないが、それに費やした二千萬弗の費用にも驚かされる。如何に技術を持ち、如何に勇氣があつても、資金が續かねば致し方はない。北米合衆國が世界の石油界に君臨して居る所以の一つは、國內に強力な會社があつて、鍊熟優秀な技術と豊富無盡の資金を擁して居ることであることを忘れてはならぬ。

スタンダード石油會社の出現と生立

北米合衆國の強力な石油會社と云へば、何人もスタンダード石油會社を聯想するに相違ない。今日では此の會社も個々に分裂させられては居るが、之等を中心とする關係諸會社の資本を合計すると百億弗にならうと云はれるほどの大きさである。而して此の巨大な資金で以て、凡そ世界石油産額の六割乃至六割五分を所有して居るのであるから驚嘆の外はない。話の序に此の會社の生ひ立ちを簡単に紹介して置かう。

タイトスヴィルでドレーク井が石油を出した當時、隣州の大都市クリブランドで合同して一軒のブローカー商會を經營して居つた二人の青年があつた。其の一人の名をロックフェラーと云つた。彼等もタイトスヴィルから來

る新らしい品物を取扱ふやうになつたが、そんな關係から一人の製油技師と心易くなつた。其の技師の名はアンドリュースと云つて、元々は労働者であつたが、タイクスヴィルで製油技術を習ひ覺へて來た者である。千八百六十三年、之等三人は合同して製油業を經營することになつた。六十三年と云へば、千八百三十九年に生まれたロックフェラーとしては數へ年の二十四年であつたわけである。元來、ロックフェラーは紐育州の百姓の子供で、ハイスクールを出ると十七歳でブローカー商會に就職し、二十歳で貯蓄した一千弗と父親から借りた一千弗とを資本として、友人と合同で前記のブローカー商店を獨立經營するに至つたのである。これだけの經歷でもロックフェラーに事業經營を好む性質のあつたことが窺はれるが、彼の傳記を見ると十歳にして夙くも蓄財利殖の道を覺へたと書いてある程であるから、生まれながらにして商才、經營の才にたけて居たものであらう。

扱てロックフェラー等の製油業の規模であるが、一日の原油處理能力は十噸(四百五十ガロン)であつたと云ふから、當時としても最も小規模なものであつたらうと思ふ。併し彼等は自分等の製品を以て最も優良な標準品と吹聴し、名づくるにスタンダード石油標準石油を以てした。それと同時にロックフェラーは原油の買入れ、製品の販賣を擔當して生得の商才を發揮して縱横に働き、アンドリュースは常に他社に劣らざる製品の製造に努力したから、彼等の事業は日増に隆盛となつた。それがため開業から七年目の千八百七十年には、資本金百萬弗のスタンダード石油會社を創立し得るに至つた。そして社長はロックフェラーであつた。併し當時に於ける彼等の勢

力は未だ製油界の一割位を占める位であつた。けれども其の後に於けるロックフェラーの活動は目醒しいもので、製油及び販賣方面ばかりでなく、産油方面にも亦た送油方面にも手を伸ばした。八面六臂の働きとはこんなのを云ふのであらう。そんなことで會社創立後約十年で、製油界に獨占的の勢力を持ち、産油界、送油方面にも大きな勢力を持つに至つたので、遂に千八百八十二年にスタンダード・オイル・トラストを創立して全米石油界に君臨することになつた。勿論、社長はロックフェラーであつた。

スタンダード會社が此の如きに至るまでには辛辣とか殘酷とか云ふやうな批評を受けるやうな行動も少なくなかつたやうである。然り而してトラスト結成後に於ける彼等の行動に對する惡評は一段と激しいものがあつた。その結果、千九百十一年に至つてトラストは時の政府から解散を命ぜられ、九個の會社となつて經營せざるべからざるに至つた。之が有名なルーズベルト大統領のトラスト征伐である。かく利潤追究の手段に就ては惡評も受けたが、巨大な資金を持つて熱心に勇敢に國の内外に向つて石油業を廣めて行つた功績は絶大である。彼等はトラスト解散後に於ても勇敢に熱心に働いた。今日、スタンダード系統の資本を合算すると百億弗に達すると云はれ、産油に製油に販賣に世界の石油界をリードして居る。現に彼等の持つ石油の量の如きも、海外の一一・一%に加ふるに自國內の約半數を加へるならば世界總産額の四〇%以上に達して居る有様である。其の外、國內の製油界を獨占せる點竝に世界全體に布かれた販賣組織等を考へるならば、其の偉大さは想像にあまりあると思ふ。

因にロックフェラーは千九百三十七年、數へ年九十一歳を以て此の世に於ける生涯を終へた。要するに彼は石油業と云ふ新しい産業出現の風雲に乗じて成功した、石油界に於ける空前にして恐らく絶後の一大巨人であつたのである。

進歩した科學の應用

ドレークの油井は石油湧出地の傍に掘られて成功した。またライマ油田の發見はガスの發出して居るところに井戸を掘つたことに端を發した。それ故、其の當時、石油採掘に志した人は凡て石油の湧出地、ガス發出地を油田發見の手懸りとした。此の手懸りなるものが今日云ふところの石油の表面徵候である。

而して此の表面徵候を油田發見の手懸りとすることは今日でも少しも變りはない。併し表面徵候が油田發見に對する唯一無二の手懸りであつたならば、世界の石油工業は今日ほど盛大になつて居ないのである。中にも北米合衆國に於ては、今日の如く多數油田の發見は不可能であつたのである。と云ふことは、表面徵候と云ふものは左程多くあるものではないため、忽ちの内に探し盡されるからである。實を云ふと北米合衆國で表面徵候の最も多かつたのはカリフォルニア州で、ペンシルヴェニア州方面即ちアパレンシア山脈方面が之に次ぎ、其の他の方面では極めて僅少であつた。それ故、十九世紀末葉頃までに發見された油田の多くは表面徵候を手懸りとしたも

のであるけれども、其の後に發見された油田の大多數は、何等表面徵候と關係のない地域に開發されて居るのである。今日、十二億噸もある産額の内、恐らく五分の四位までは、徵候も何もなかつた場所に發見された油田から、出て來て居るものと思はれる有様である。

然らば如何なる方法が油田發見に用ゐられたかと云ふに、それは地質學の應用であつたのである。地質學が新油田發見に應用された第一は油脈に關する學說であつた。その學說は千八百八十五年にホワイトと云ふ地質學者が發表したもので、背斜説と呼ばれるものであつた。ホワイトはペンシルヴェニア州方面に發見された澤山の油田を研究して、石油と云ふものは何時でも、地層の背斜部に集積して居るものと云ふことを發見して、右の學說を樹てたものである。此の說の詳しい説明は何れ學術編に説明することにして、茲には省略するが、唯だ背斜部のことを簡単に記して置く。抑も地殻を構成して居る地層は、屢々、波のやうに押し曲げられて居るが、地質學者は高く山脈のやうに押し上げられて居る方を背斜構造と云ひ、低い谷のやうになつて居る方を向斜構造と云つて居る。而して上に話した背斜部と云ふのは其の背斜構造の頂上部分のことであつて、既成油田の石油は凡て背斜部に集積して居る事實から推して、將來、油田を獲んとするには此の背斜構造を探し出して、背斜部に井戸を掘るべきであると云ふのが、ホワイトの背斜説であつたのである。

此の學說は既成油田の事實の歸納に生まれたと云ふ點で先づ石油業者に悦ばれた上に、既成油田の近くに發見

された背斜に試みられて成功するものが續出したので、忽ちの内に石油業者全部に信奉され、今日のやうに「背斜を探すこと則ち石油を探すことなり」と云ひ得るほどになつたのである。

此の學説の確立と殆ど時を同じくしてスタンダード・トラストの成立を見たので、其の資力にまかせて大規模に大膽に勇敢に地質調査を行ひ、且つ試掘を敢行することが出来たのである。その結果、石油があらうとは夢にも考へられなかつた地方にもドシ／＼油田が発見されて、遂に北米合衆國石油業が今日の偉大に到達したのである。更に千九百二十四年からは、物理探鑽法を實施した。此の方法は電氣や磁氣を使つたり、或ひは地表に於ける重力の變化を驗べたり、或ひは火藥を爆發さして地面を震動させ、それを地震の震動を測る機械で測定して見たりなぞして地下の様子を探るもので、砂や泥で蔽はれて普通の地質調査が實施出来ない場所の探鑽に使ふものである。此の方法の應用も立派に成功して、多數の油田が発見されつゝあるのである。實を云ふと此の方法を實際に應用して、成功の域に到達させるまで進歩發達させたのは北米の石油業者であつたのである。それも彼等の熱意と同時に強大な資力の援護に依るものである。

こんな有様で、北米合衆國の石油産額は其の時代の科學應用に依つて増大して來たが、世界各國も常に合衆國に學んで石油増産に邁進したものである。世界各國が合衆國に學んだのは唯に此のことばかりではない。石油に關する凡てを學んで居るのである。言ひ換へれば、北米合衆國の石油界の地位は太陽系に於ける太陽のやうなも

のだと言つても、敢て過言ではないであらう。

北米合衆國の海外に持つ石油量

北米合衆國の海外に持つ石油量の割合に就ては既に述べたところであるが、話の序に第二次歐羅巴戦争の始まる前、即ち千九百三十八年に如何なる國で、凡そ如何なる割合に持つて居たかを簡単に紹介して置こう。

| 洲 | 國 | 其の國の全産額に對する百分比 |
|--------------|--------|----------------|
| 北米大陸 | 加 奈 陀 | 殆ど全部 |
| | 墨 西 哥 | 四〇% |
| | ヴェネズエラ | 六〇% |
| 南米大陸 | コロンビア | 全部 |
| | ペル ー | 九五% |
| | アルゼンチン | 四七% |
| 亞 細 亞 | 蘭領東印度 | 二六% |
| | イ ン ダ | 二四% |
| 一 持てる國、持たざる國 | | |

| | |
|----------|----|
| バーレン島 | 全部 |
| スウディヤラ比亞 | 全部 |
| 歐羅巴 | 一% |
| 羅馬尼亞 | 一% |

之を合計すれば一一・一%、噸にして二億三千萬噸である。

國外にのみ持つ英吉利

第一次歐羅巴戦争の終り頃には、英吉利の本國では「國內産の石油を持ち度い」と云ふ希望が濃厚となつて、千九百十八年即ち戦争の最後の年の三月から試掘を始めた。戦争して居る最中にも試掘を實行するに至つたと云ふことは、如何に彼等が石油の必要を痛感したかを物語るものである。而して此の仕事は千九百二十二年まで繼續して十ヶ所に十一本の井戸を掘つたが、一本の井戸が僅かに一日に數噸を産する程度の油層を發見したに過ぎなかつた。そんなことで此の仕事も一事中止されたが、千九百三十三年から再開され、今次戦争の始まる前までは前回よりは一段と盛んに行はれたが、開戦と同時に中止されたらうと思ふ。而して戦争開始までの成績は前回と同様、僅か日産數噸ばかりを得た程度であつた。従つて英吉利本國の石油は、今のところ皆無と見て可い。

かく英吉利本國には産油は皆無同様であるが、前にも述べたやうに世界各地に持つ量は、世界總産額の一^七・四%と云ふ大量である。然らば如何にして英吉利が、かくの如き大量を國外に持つに至つたかと云ふに、それはかうである。前にも話したやうに、米のスタンダード會社が國外油田侵略を企てた際に、英吉利資本家も之に刺戟され、之に拮抗して石油事業經營に當つたものであるが、之が今日、英吉利の國外所有石油の根幹となつて居るのである。而して其の持つ量の三分の二強は、米のスタンダードを向ふに廻しての世界の二大石油會社であるロイヤル・ダッチ・セル團の稼ぎ出すところのものである。此の會社は二十世紀の始めにスタンダード會社の東印度侵入防止のために大成したものであるが、東印度諸島の油田を根據として世界油田獲得に進出して今日の大成したものである。此の會社に就ては南洋油田の章に、改めて詳しく紹介しよう。尙ほ此の會社の資本は和蘭との合同であるけれども、現在では支配勢力は英吉利に屬して居る故、之を全部、英吉利のものとして取扱つて居るのである。

右の如き資本家の努力に加ふるに、近年に於ける英吉利政府の熱意も、此の國の持つ量を更に増加した。前編にも話したやうに、石油が軍事的に重要だと云ふことを一番先に氣付いたのは英吉利海軍で、その結果、資金難に陥つて他國に買収される恐れのある會社に對して多額の國費を支出して會社を自己支配の下に置いた。これが今日、年産約八千萬噸を持つイラン油田全部が安全に英吉利が手に入つて居るわけである。而して此の問題が

決定したのは第一次歐羅巴戦争の始まる約一年前のことで、これを決行したのは、時の海軍大臣即ち今の首相チ
 ★ーチルその人であつたのである。然り而して戦争の経験は國防用としての石油の重要性を知らしめたため、英
 吉利政府の石油に對する熱意は更に昇進して、或ひはイラン油田の地続きに在るメソポタメヤ油田獲得の野心と
 なり、或ひはスマトラ島油田の一部獨占の野望となつて現はれたのである。此の政府の熱意に依つて獲た油田か
 らの石油の量は、英吉利の持つ量の三分の一に當つて居るのである。

然らば英吉利は第二次歐羅巴戦争開始當時に如何なる國に於て何程の量を持つて居るか、北米合衆國の時と
 同様の國別に調べて見ると凡そ次表の如くである。

| 洲 | 國 | 其ノ國ノ産額 ニ對スル割合 |
|-----|---------|------------------|
| 歐羅巴 | 羅馬尼亞 | 約三三・五% |
| | イラン | 全部 |
| 亞細亞 | イラック | 約五〇% |
| | 英領印度及緬甸 | 全部 |
| | 蘭領印度 | 約七三% |

| | | |
|-------|-------------|-------|
| 北亞米利加 | 北米合衆國 | 約四・五% |
| | 墨西哥 | 約六〇% |
| 南亞米利加 | ヴェネズエラ | 約四〇% |
| | トリニダット | 全部 |
| | エクスアドル | 全部 |
| | ペルー | 約五% |
| | アルゼンチン | 約二二% |
| 亞弗利加 | 埃及 | 全部 |
| 合計 | 世界總産額の一七・四% | |

之を晒して見れば三億六千萬噸となる。即ち國外に持つ點からすれば、英吉利は北米合衆國を少なからず凌
 駕して居る。其の中でも北米合衆國に侵入して其の國の産額の四・五%、世界總産額の二・七%を得て居ること
 は實に面白いことである。

高加索を中心とする露西亞の石油業

第三編に紹介して置いたやうに、露西亞の石油業は順風満帆の好調を以て發展し、千八百九十八年には北米合衆國を凌駕して世界一の産油國となつた。しかし此の如き急激な産油増加は油價低落を原因し、油價低落に伴ふた不景氣は好景氣に馴れた労働者の懐に影響して凶惡な労働問題となり、千九百三年には一大ストライキとなつた。ところで此の時の處置が悪かつたので、労働者の跋扈を許す結果となり、露西亞石油業の發展を阻む重大な禍根となつたのである。實に右のストライキを契機として、千九百二十年ソヴィエツト政府の出現まで、労働者跳梁の暗黒時代が繼續した。話の序に所謂暗黒時代のことを極く簡単に物語つて見よう。

右の罷業は最初は要求を拒絶されたため暴動化し、官憲の取締緩漫に乗じて放火、破壊、殺人等あらゆる亂暴を敢てした。それがため資本家側は彼等の要求を全部認容した上に、罷業期間の賃金全部の支拂さへも承認してしまつた。かうした結果から彼等は「結束は力である」ことを知つた。この力とこの強さを知つた後の労働者は、正に野に放たれた猛虎であつたのである。今一つ悪い影響は、それ迄は従順且つ勤勉な労働者であつた回教徒までがストライキの翌年に労働運動に加はるに至つたことである。これは前年のストライキが失ふところ皆無で得

るところの甚大であつたのを見たのであるから、如何に従順な回教徒等も労働運動者等の宣傳に乗らざるを得なかつたのである。かくして油價低落に悩んだ石油業者は、新しい労働争議を加へ、重なる重壓に堪へ兼ねて事業を休止したのも尠なくなつたのである。

かゝる處に千九百五年、六年にかけての日露戦争と云ふ國家の重大事件となつた。この際に乗じて國內に潛む反政府の徒類は、此の時とばかりに油田地の労働者を煽動して政府を手古摺らせることに努めたが、その結果は遂にアルメニア人對韃靼人の闘争となつて現はれたのである。當時、バクウには二萬五千人ばかりの石油従業者が居たが、其の内にアルメニア人及び韃靼人は約五千人位づつ居つた。元來、アルメニア人は敏捷ではあるが狡猾で、産を造るに長け、非常に人から嫌惡されて居つたし、韃靼人は慥悍ではあるが魯鈍で、馬鹿正直で、金儲けなどは頗る下手な人種であつた。従つてアルメニア人は韃靼人を善き鴨とばかりに胡麻化し嚙着して、常に彼等の儲けを搔擾つて居つた。こんな關係から韃靼人はアルメニア人に對して痛く嫉視と憤恨に燃へて居たのである。加之、アルメニア人は耶蘇、韃靼人は回教であつて、此の點からも不倶戴天の間柄であつたのである。かうした間隙に付け入つて反政府黨員が巧みに煽動したため、韃靼人は平素の仇を打つはこの時とばかり一齊に蜂起してアルメニア人所有の石油井戸、製油所等の破壊に向ひ、到る所で撃突相殺傷した。そればかりではない、闘争の餘憤は家庭の襲撃にまで及んだから、婦人子供の殺戮されたものも少なくなかつた。そんなことで双方の死

者は千人にも達し、酸鼻、目を蔽はしむる如き事態にまで立到つて了つたのである。而して此の闘争は延ひては全高加索に波及し、韃靼人は到るところでアルメニア人を襲撃虐殺した。こんな惨劇に依つて石油業者の受けた損害が如何に甚大であつたかは、容易に想像出来よう。

右の闘争も翌年の千九百六年には屏息し、油田の秩序も漸次回復を見たが、労働者の横暴は少しも停止しなかつた。彼等の態度は益々驕慢で、其の要求は益々突飛になつて來た。即ち些細な事件に對しても忽ちストライキとなり、黒手組的な強請が殆ど公然と行はれた。また労働者側に不人望な資本家、支配人などに對しては油田地から退去すべく脅迫し、若し聞かなければ其の人を此の世から消すやうなことは珍しくなかつた。かくして資本家は労働者の意に従はざるべからざる有様で、主客は轉倒して、眞のバクウ油田の所有者は恰かも労働者であるかのやうな状態であつた。こんな状態では事業の發展は望まざるべくもなく、露西亞の石油業は日増しに萎微して行くばかりであつた。だが、茲に見返すことの出来ないのは、石油業者の苦痛を他所に高率なローヤリチの徴收を改めず、また無政府状態に近いまでの労働者の横暴を取締らなかつた政府の態度である。總てかうした政府の無責任、不親切な態度こそは此の國の石油業を衰退に導いた根本原因であつたと云ひ得るのである。

實際にバクウ油田を始め高加索地方の油田は、まだ大いに發展し得る能力があつたにも拘らず、油價低落の苦難から脱出する前に労働問題に禍ひされ、引續く内憂外患に苛まれつゝ十年餘を、唯だ過去の精力に依つて

経過したものである。

然るところ千九百十七年に至つて萬事を精算、と云ふよりは御破算して、出直させるやうな一大事件が勃發した。それは外でもない、ボルセヴィストの出現であつた。而して十七年から二十年迄はボルセヴィスト軍の侵入、土耳其軍の侵入があり、或ひは革命社會主義者の政府の下に或ひは聯合軍援護のアゼルバイジャン政府の下にありなぞして、高加索石油業は混亂紛糾の眞中に喘いで居たものである。産油の如きも二十年には二千五百萬噸まで低下してしまつた。併しソヴィエツト政府の基礎確定と共に石油業も安定したが、それと同時に世界石油界空前の大事件をソヴィエツト政府が斷行した。それは外でもない國內の石油業全部を沒收して國有としてしまつたことである。前にも話したやうに露西亞石油業發展の資本には瑞典のノーベルを初めとし、歐羅巴のロスチャイルド、後にはスタンダード會社、ローヤル・ダッチ會社等も關係して、大部分は外國のものであつたのだが、それがみな悉く政府に無償で沒收されたのだから、空前の大事件と云つたのも過言ではあるまい。それは兎も角として、千九百二十年五月二十八日を限りとして、露西亞石油業は全部國有となつて、新しいスタートを取ることになつたのである。

かくて露西亞石油業は直ちに整理改善され、發展に力が注がれた結果、驚くべき勢を以て産額を増加した。之を數字を以て示せば、千九百二十年には二千五百萬噸に低落して居たが、二十五年には倍額の五千二百萬噸とな

り、三十年には一億二千五百萬噸、三十三年には一億八千二百萬噸と云ふ誠に物凄い状態であつた。此の内、千九百二十八年から三十二年の五ヶ年は所謂第一次五ヶ年計畫で、極力石油の増産に力を入れたものであるが、二十八年の八千五百萬噸は三十二年には一億五千四百萬噸となり、平均一ヶ年に約千四百萬噸も増加すると云ふ好成绩を示した。次ぎの第二次五ヶ年計畫は三十三年に始まり三十七年に終つて居るが、三十七年の産額は一億九千五百萬噸、平均一ヶ年の増産額八百萬噸で、其の成績は第一次には劣つても、決して少ない増加額ではない。而して翌三十八年には二億二百萬噸となり、更に三十九年には二億一千三百萬噸と云ふ此の國石油業開始以來の巨額に達した。勿論、北米合衆國には及びも附かぬけれども、暫く他に興へて居つた産油國としての第二位は千九百三十一年以來、此の國に歸つて居るのである。

露西亞の油田

然らば此の如き大量石油の産地はと見るに、依然としてバクウ油田が中心になつて居る。試みに千九百三十七年、八年の産額に就て其の割合を調べて見るに、凡そ次のやうな關係になつて居る。

| | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|------|-------|
| 一九三七年 | 七七・二% | 九・七% | 四・八% | 四・四% | 九六・一% |
| | バクウ | グロスニー | マイコップ | ウラル | 合計 |

| | | | | | |
|-------|-------|------|------|------|-------|
| 一九一八年 | 七三・四% | 七・八% | 六・〇% | 六・四% | 九三・六% |
|-------|-------|------|------|------|-------|

之を高加索地方だけに就て見ると三十七年は九一・七%、三十八年は八七・二%と割合となつて居る。かく計算して見ると露西亞石油業は昔も今もバクウ油田が壓倒的に優勢であり、且つ高加索地方が依然として産額の大部分を占めて居ると云ふことになる。而して更に面白いのは、その油田も昔も今もバクウ、グロスニー、マイコップであることである。かく同じ油田で永年に互つて大量の石油を産出することは世界無比であるが、これと云ふのも高加索地方の油田には極めて豊富に石油を含む頗る厚い砂層が幾枚もある故、同じ油田で次ぎ次ぎと下に在る油層を採掘して行けるからである。此の豊富な油層が幾枚もあることは高加索油田の特徴である。而して最近はロータリー式のやうに迅速に深く掘り得る道具を使つて居るため、一段と産油が増加して居るのである。之等高加索地方に次いで最近擡頭して來たのがウラル地方である。抑も此の地方に石油のあることが分かつたのは一九三五年、加里の層を探すボーリングに石油が出て來たからである。併し此の地方が相當に石油を出すやうになつたのは數年來のことであるが、就中、千九百三十八年には前年の九百萬噸臺から一躍して千四百萬噸に進んで大油田たる相貌を示して來た。兎に角、露西亞人は此の地方を未來のバクウだと云つて悦んで居る。以上の外、カスピ海の北東隅の沿岸近くにはエムバ油田があつて、ウラルに次いで居る。又變つた場所では世界の屋根と云はれるバミール高原の北側に當るフェルガナの谷にトルキスタン油田とも、フェルガナ油田とも呼

ばれる油田もある。尙ほ其の他にも小油田はあるが、新地域として注目されて居るのは羅馬尼の國境に近いウクライナ方面である。詳しいことは未だ發表されないが、チキサスと同じ岩鹽に伴はれる石油を掘り當てたと云ふことである。此の方面はカルバシア山脈に沿ふ石油地帯であるから、羅馬尼亞にポーランドと同様に油田の出現が期待されるのである。ポーランドの油田地域の東半分は露西亞領内に入つて居ることであるから、近き將來には露西亞の石油業はカルバシア山脈方面にも發展するであらう。

持たぬ國々の概況

持つ強國どもがあまりにも夥しく持つたために、持たぬ強國達の量はあまりにも貧弱であるが、以下、簡単にその持たなさ加減を紹介しよう。

聊か持つ方であつた佛蘭西

佛蘭西は第一次歐羅巴大戰で石油の缺乏に一番苦しんだ國であるだけに、戦後には逸早く石油政策を樹てて石油資源の獲得、開發竝に國內石油需給關係を調節した。此の佛蘭西の石油政策は持たぬ國々の模範とされたが、

それにも拘らず、國內の油田は獨逸から取り返したアルサス州のベッセルブロン以外に出ず、其の産額は僅かに千九百三十八年度が五十一萬噸（七十二萬担）に過ぎなかつた。併し國外に於ては前編に話したやうにメソポタミア油田開發權利の四分の一を得たから、イラクの産額の四分の一は佛蘭西のものとして計算が出来る。また羅馬尼亞油田にも佛蘭西の資本で産出するものが全産額の三三%あつた。従つて佛蘭西の持つ量は

| | |
|--------|-------------------------|
| 自 國 産 | 五一六、〇〇〇噸（七二、〇〇〇噸） |
| イラク 産 | 八、一〇四、〇〇〇噸（一、〇九二、〇〇〇噸） |
| 羅馬尼亞 産 | 一四、五一〇、〇〇〇噸（二、二七九、〇〇〇噸） |
| 合 計 | 二三、一六六、〇〇〇噸（三、四四三、〇〇〇噸） |

と云ふ有様で、他の持たぬ強國に較べると聊か持つ方であつたのである。

最も貧弱なのは伊太利である

伊太利の國産は頗る貧弱で十萬一千噸（一萬四千噸）、それに數年前に合併したアルバニアから出る四十八萬九千噸（七萬噸）を加へても僅かに五十九萬噸、噸に計算して八萬四千噸と云ふ貧弱さである。但しアルバニアは翌年の三十九年には百三十八萬六千噸（十九萬八千噸）も出して著しく増加したが、それにしても二十萬噸強で

問題にならぬ程度であつた。こんなことでよく戦争を始めたものと、寒心させられたものである。

人造石油に重きを置いた獨逸

獨逸の國內産額を區別して見ると、千九百三十八年には次のやうな關係になる。

| | |
|------|-----------------------|
| 獨逸 | 三、八六五、〇〇〇噸 (五五二、一〇〇噸) |
| 舊埃太利 | 三九五、〇〇〇噸 (五六、四〇〇噸) |
| 合計 | 四、二六〇、〇〇〇噸 (六〇八、五〇〇噸) |

これに舊波蘭土領からの産額九四一、〇〇〇噸(一三五、〇〇〇噸)を加算しても總額は五、二〇一、〇〇〇噸(七四三、五〇〇噸)となる。尙ほチェッコも合併されたが、油田のある方はスロバキヤ領内でチェッコの方に無いので、直接には獨逸に關係が無い。兎に角、將來のことは別問題として、今の獨逸領内に於ける石油産額は大體、此の程度と見てよからう。

右の如き程度に獨逸國內の石油は豊富でないと同時に海外に鐵區が得られぬ立場に置かれたため、人造石油の完成、言ひ換へれば化學的合成に依る液體燃料の製造法の完成に邁進したものである。其の結果、今日では數種の液體燃料製造に成功して居る。これが所謂獨逸の人造石油であるのである。ところで問題は果して何程の量を

製造して居るかであるが、その點は實際のところ明瞭でない。或る人は獨逸當局の發表する通り成功して居ると云ひ、また他の人は實際は彼の數字よりは餘程少ないと云ふ。併し一般の統計家は發表の數字よりかは少ないと見て居る。試みに千九百三十八年度に製造した液體燃料の量に就て見るに、獨逸當局は二百五十萬噸を製造したと發表して居るけれども、一般の統計家は凡そ次のやうな數字であらうと見て居る。

| | |
|-------|-----------|
| ペンゾール | 五四〇、〇〇〇噸 |
| アルコール | 一〇〇、〇〇〇 |
| 石炭液化 | 九六〇、〇〇〇 |
| 合計 | 一、六〇〇、〇〇〇 |

其の量の多少は兎も角として、此處まで漕ぎつけた獨逸の技術には敬服せざるを得ない。而して之等の製造量は戦争中には特に著しく増加すると見て可からう。

併しそれにしても、戦時獨逸の必要量には及びも付かぬ程度である。従つて伊太利の場合に發した「これだけの石油を持つてよく戦争を始めたものだ」と云ふ嘆聲を此處でも洩らさねばならぬのである。

獨伊の石油對策を想像す

その嘆聲もさることながら、戦争を始めた以上、彼等には何か頼るところがあるに相違ない。今度は一つ彼等の方策と言つたやうなものを想像して見よう。それに就て著者は彼等の方策を次のやうに想像して居る。

先づ第一に思ひつくことは「買ひ溜」である。戦時に於て何程の量を必要とするかわからないが、どんなに少なくとも二個年位は持ち堪へ得ると思はれる位は買ひ溜めて居なければならぬ。若し戦争が二年位で終了すれば問題は無いが、長引くとなると他の手を考へねばならぬ。即ち人造石油の増産、他國からの援助、中立國を通じて内密に買取ると云ふやうな手もあるが、之等は幾分の補給にはなるけれども、根本的解決ではない。それには何としても有力な油田地域を自國の勢力圏に入れねばならぬ。恐らく獨伊もこんな方策であつたらうと思ふ。従つて獨伊兩國は戦争の初期に於ては「買ひ溜」油を中心とし、それに自國産、羅馬尼亞よりの輸入、獨逸ではそれ等に加ふるに更に人造石油を以て補給しつゝ事に當つたものと思はれる。併し所詮は有力な油田を手に入れねばならぬと見て居る内に、果して羅馬尼亞を完全に樞軸の勢力圏に入れてしまつた。之に依つて樞軸側は石油に對して一段と樂になつたわけである。併し戦争が長引き、戦域が擴大すれば石油も餘計に入るから人造石油が餘程の増産を見ない限り、羅馬尼亞を手に入れただけでは安心ならぬ。従つて他に油源を求めなければならぬ。

然らば其の場所は何處かと云ふに、歐羅巴には最早餘地はなく、亞弗利加も駄目であるから、結局はイラックに向はねばならぬ。其處には千九百二十八年に三千二百六十四萬三千噸、隨にして四百四十餘萬噸あつたが、此處の油田の産油能力は凄まじいもので、これだけの産額を僅々十數本の井戸で出して居る有様であるから、増産の可能性は充分にある。従つて戦争が長期になれば、石油のためにも戦場は必ず此の方面に伸びて行かねばならないのである。而してイラックが樞軸側の勢力圏に入れば、イランの一千萬噸即ち七千七百萬噸も樞軸の手に入るものと思はれる。兎に角、之等近東地方の油田地域は今回の戦争に對する最後の鍵となるのではないかと思はれるのである。

要するに右の想像は獨伊に限らず、一般に石油を持たぬ國の一朝有事の際に於ける石油對策と見て可いと思ふ。然り而して「持つ國・持たぬ國」の嘆きは單に平時のことで、「力」さへあれば持たぬ國も持つ國になり得ると云ふことを御互に銘記して置く必要がある。

二 世界産油國の概況

歐羅巴の産油國

葱を背負ふた鴨の觀ある羅馬尼亞

露西亞の油田に就ては前に詳しい説明を加へて置いたから、茲ではその他に就て簡単な説明を加へることとする。

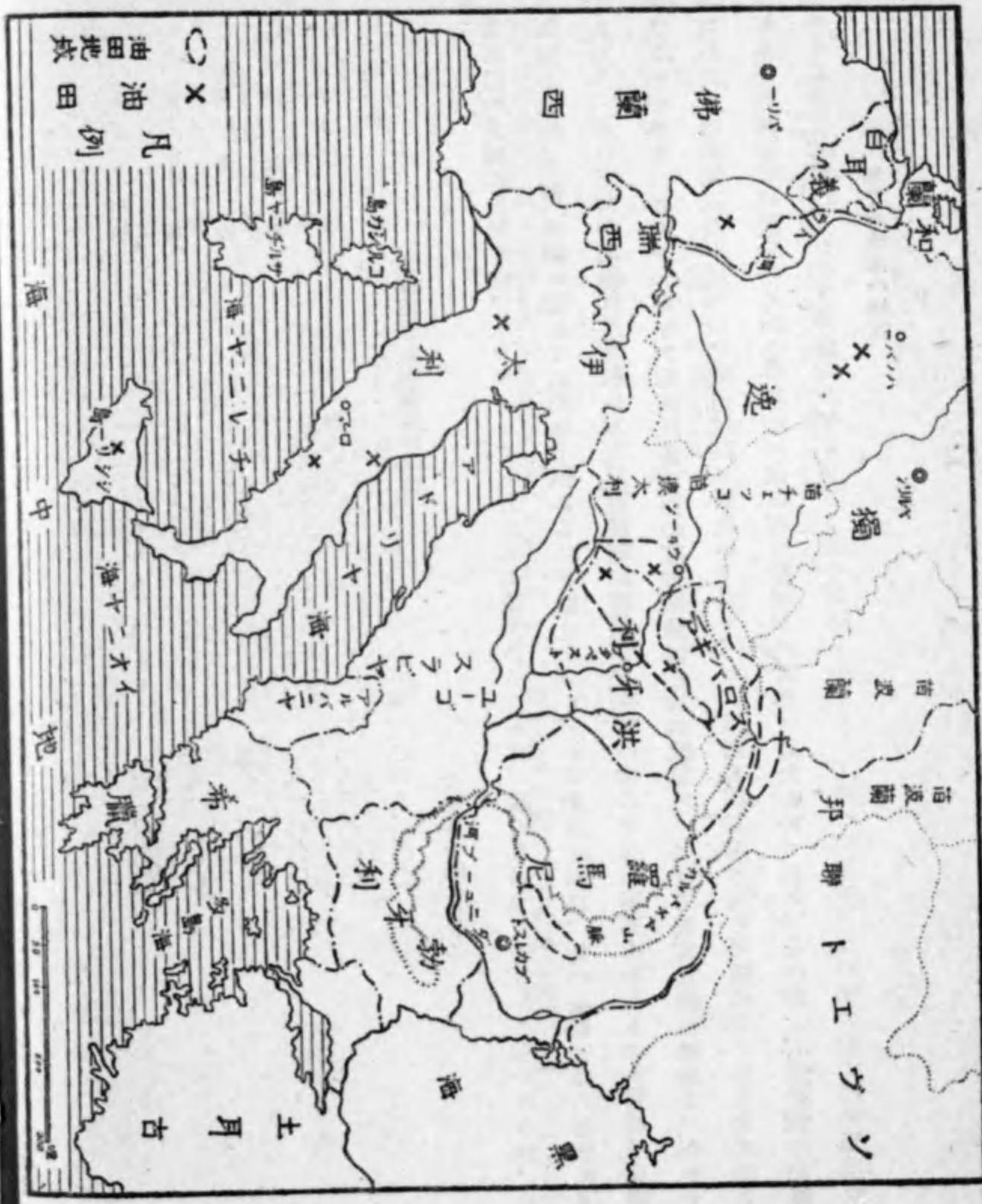
歐羅巴産油國最近の産額

| | 一九三八年 | 一九三九年 |
|---------|--------------|--------------|
| 露 西 亞 | 二〇二、二九〇、〇〇〇噸 | 二二二、九七五、〇〇〇噸 |
| 羅 馬 尼 亞 | 四八、三六六、〇〇〇 | 四五、九九七、〇〇〇 |
| 波 蘭 | 三、七六三、〇〇〇 | 三、九二〇、〇〇〇 |
| 獨 逸 | 四、二六〇、〇〇〇 | 五、三〇二、〇〇〇 |

| | | |
|-------|-------------|-------------|
| スロバキア | 一三二、〇〇〇 | 一二一、〇〇〇 |
| 匈 牙 利 | 三一八、〇〇〇 | 七七一、〇〇〇 |
| 佛 蘭 西 | 五一六、〇〇〇 | 五〇二、〇〇〇 |
| 伊 太 利 | 一〇一、〇〇〇 | 九一、〇〇〇 |
| アルバニア | 四八九、〇〇〇 | 一、三八六、〇〇〇 |
| 合 計 | 二六〇、二七四、〇〇〇 | 二七一、〇六五、〇〇〇 |

(七噸は一噸に當る)

歐羅巴の東部にS形に曲つたカルバシアと云ふ大山脈があることは、誰でも知つて居るところであるが、其の外側即ち北側、東側、南側に沿ふて石油地帯がある。普通之をカルバシア油田と云ひ、其の全延長は六百哩に及ぶであらう。而して其の北側並に東側の大半は舊波蘭領に屬し、東側の他の半分と南側にあるものが羅馬尼亞領内に入るのである。このカルバシア油田は露西亞の高加索油田と共に歐羅巴に於ける豊富な油田地域で、今までのところ之等兩地域以外には大した油田は出て居ない。カルバシア油田も高加索油田と同様に早くから世に知られ、中にも羅馬尼亞では随分早くから手掘法に依る石油探掘が行はれて居たものである。それ故、石油産額の記録の如きも北米合衆國のドレーク井成功の年よりも、二年前から整然として残つて居る。此の點に於ては羅馬尼亞は



世界第一である。古いことはそれ位にして、近代では世界の有力な産油國として常に四、五番に据つて居る。併しこんな小國が豊富な油田を持つて居ることは恰かも鴨が葱を背負ふたやうなもので、常に強國共の目標となり、重壓に苦しむことが多いのである。今回でも、戦前には獨逸が此處から石油を少しでも多く獲ようとし、英佛側は之を妨害すると云ふ争ひで、双方から壓迫されて苦んだことは一方でなかつた。

戦前に於ける羅馬尼亞の油田は次のやうな割合で經營されて居つた。

| | | | | | |
|---|---|---|-------|------|------|
| 英 | 吉 | 利 | 三三・五% | | |
| 佛 | 蘭 | 西 | 三三・一 | | |
| 北 | 米 | 合 | 衆 | 國 | 一一・〇 |
| 伊 | 太 | 利 | 五・〇 | | |
| 羅 | 馬 | 尼 | 亞 | 一七・四 | |

併し羅馬尼亞が樞軸に加はつた今日、資本別などは最早問題にならぬ。力が凡てを解決してしまつたのである。要するに獨逸の近くに豊富な羅馬尼亞油田のあつたことは、獨逸に取ては全く天祐であつたのである。

分割されたポーランド油田

前回の歐羅巴大戦後、波蘭は復活したが、それ迄は油田地はガリシア領でガリシア油田として世に知られて居たものである。而してまた、波蘭國は滅亡して、獨逸兩國に分割されてしまつたが、故意か偶然か、其の分割線に依つて油田地の主要部は獨逸兩國に公平に等分された。併し地域の面影からは公平の分配であつたけれども、現在の産額から云へば其の分配は必ずしも公平でなかつた。と云ふのは、東側即ち露領となつた地域から出る量は、西側即ち獨逸領となつたところから出るものの、約三倍に當つて居る。即ち露西亞三、獨逸一と云ふ割合である。而して波蘭油田の現況は衰微し切つて居つて、大した變動も起るまいから、當分は此の比率で進むものと見て可からう。従つて波蘭油田の分割に依つて獨逸が得る量は、僅かに百萬噸弱、聽にして十四萬噸ばかりである。しかし飢へた者に取つては、これだけでも有難いであらう。

坑道掘で有名なアルサース油田

波蘭油田と同様な運命に弄られたものにアルサース油田がある。アルサース州は普佛戦争で佛蘭西から獨逸に割讓され、前回の大战で佛蘭西に取り戻されたが、今度また、獨逸軍に占領されて居る。此の油田は産額も少

なく、大したものではないが、天下に卒先して坑道掘と云ふ變つた採油法に成功して居るので有名である。

抑も地下に在る油層中の石油は、井戸を掘つて汲み出すのが普通となつて居る。併し此の方法では油層の中に石油が澤山残留するから、其の残留を少なくする方法として考へられたのが即ち坑道掘であるのである。此の方法は油層内に坑道を掘進して、油層内の石油を其の坑道に滲み出させて汲み取るのである。従つて人間が油層内に入らなければならぬと云ふ危険があり、又た堅坑を下ろし且つ坑道を掘るに多額の費用が要るので、容易には實行出来ない。それを、この前の大戦中、獨逸は石油に苦んだ揚句、窮餘の一策として坑道掘を實行した。併し此の未經験の方法が巧みに成功して愈々石油が採れ出した頃には、アルサース州が佛蘭西に行つて、此の油田も佛人の經營に移つてしまつた。而して此の方法も佛人の手で立派に育て上げられたが、今度は生みの親である獨逸人の手に歸つたのである。

因に佛蘭西の油田は此のアルサースだけであるから、之れを失へば産油は殆ど零となる。尙ほ此の方法を小規模ながら實施して居るのは、獨逸と羅馬尼亞に一ヶ所づつある。

伊太利に併呑されたアルバニア

今のアルバニア國地方は古くからアルバニア人が蟠居して居る地域であるが、世界の一公國として現はれたの

は千九百十三年のことである。何故にこんな國が現はれたかと云ふと、バルカンに於ける露、奥、伊三國の勢力均衡上からで、實を云へば露の勢力のアドリアチック海方面への進出を奥伊が防止するために、此處に一國を樹てさせたのである。

然るに千九百三十年に至り、此の國の建設に盡力した伊太利は、突如兵を進めて此の國を征伐した上、自國に合併した。伊太利がかくしたことは種々な理由もあらうが、アルペニアの南部海岸に有望な油田のあることが、最も大きな原因であると云はれて居つた。石油に最も貧しい伊太利のことであるから、さもありなんと思はれる。

北米大陸の産油國

消長の激しい墨西哥油田

北米合衆國の油田に就ては既に詳しく述べたから、茲には其他の國のことを紹介しよう。併し其他と云ても加奈陀と墨西哥の二ヶ國である。

墨西哥油田の興隆當時の事情に就ては前編に詳しく物語つたが、前編に話したポテロ・デル・イヤノの大油井を手始めとして、世界的大油井が南北の油田を通じて續出したため産油は著しく増加した。それ等大油井の一

つであるセロ・アスール第四號は一日二十六萬噸を噴出、世界噴出井のレコードとなつて居る。今其の増加の割合を一見するに、千九百十年に三百萬噸であつたものが、十一年には千二百五十萬噸となり、二十一年には一億九千四百萬噸に達したやうな空前の速やかさを示したものである。併し其の頃から石油に水が加はり始め、年と共に水の量が増して來たため、油量は二十一年を峠として減退し、三十二年には三千二百九十萬噸まで低下したものである。然かる處、南部油田の南方にボサ・リカ油田が発見され、又た地峽地域の油田も活氣を加へて來たため、何程か頹勢を盛り返して居る。之等各油田の最近の産油を示せば次のやうである。

| | 一九三八年 | 一九三九年 |
|---------|------------|------------|
| 北部 油田 | 五、三四四、〇〇〇噸 | 五、五〇八、〇〇〇噸 |
| 南部 油田 | 四、二三〇、〇〇〇 | 四、六五二、〇〇〇 |
| ボサリカ油田 | 二二、〇二一、〇〇〇 | 二六、〇七二、〇〇〇 |
| 地 峽 油 田 | 六、〇八四、〇〇〇 | 六、二四七、〇〇〇 |
| 合 計 | 三八、二七九、〇〇〇 | 四二、四七九、〇〇〇 |

尙ほ墨西哥政府は、石油會社當局と労働者側とが待遇問題で正面衝突した事件を口實として、千九百三十八年三月、國內の石油事業全部を沒收して國營にしてみました。之に對して此の國の石油業の殆ど全部を持つて居る

英米の石油會社は政府に抗争したが、英米の歩調が揃はぬために墨西哥政府の勢が強く、なかく屈伏しさうになかつた。丁度そこへ歐羅巴大戰が起り、墨西哥も英米の民主主義國側に加擔したから、何等かの解決が付くものと見られる。一體、墨西哥政府が外國人に與へた國內のあらゆる利権を回收、と云へば上品だが沒收しようとする方針はカランサ大統領以來の國是で、カランサ大統領制定の同國憲法にも之れに好都合な條令が入れてあるほどである。中にも石油利権は最も墨西哥國民の癢に障はるところらしく、前編に紹介した石油井大火事の原因も矢張りそれである。それから千九百二十一年、オブレゴン大統領の時代にも鑛業法の疑義から沒收問題に發展しかけたが、此の時には妥協が成立した。今回の事件は如何に解決するか、吾等は深い興味を以て眺めて居る。

北部に新油田を得た加奈陀

オンタリオ湖の北岸オンタリオの油田はドレーク井成功の翌年に世に現はれたほど早くから開かれたものである。又同方面に數個の油田も開かれて居るが、何れも小規模で全く問題にならぬ程のものである。従つて此の國は産油國としては全く問題にならなかつたのである。然るに此の北方アルバータ州に千九百廿八年頃から新油田が開かれて著しく産額を増加して來た。昨今の状態はアルバータ油田が九六%、オンタリオ油田が三%を産出して居る。

北米大陸の産油

| | 一九三八年 | 一九三九年 |
|-------------|----------------|----------------|
| 北米合衆國 | 一、二一四、三五五、〇〇〇噸 | 一、二六四、二五六、〇〇〇噸 |
| 墨西哥 | 三八、二七九、〇〇〇 | 四二、四七九、〇〇〇 |
| 加奈陀 | 六、九六六、〇〇〇 | 七、八三八、〇〇〇 |
| 合計 | 一、二五九、六〇〇、〇〇〇 | 一、三一四、五七三、〇〇〇 |
| 世界總産額に対する割合 | 六四% | 六三% |

南亞米利加大陸の産油

南米大陸の産油國と最近の産額表

| 國名 | 一九三八年 | 一九三九年 |
|--------|--------------|--------------|
| ヴェネズエラ | 一八八、一七四、〇〇〇噸 | 二〇五、九五六、〇〇〇噸 |
| コロムビア | 二一、五八二、〇〇〇 | 二二、〇三七、〇〇〇 |

二 世界産油國の概況

三三三

| | | |
|-------------|-------------|-------------|
| エクアドル | 二,二四六,〇〇〇 | 二,二三三,〇〇〇 |
| ペル | 一五,八三九,〇〇〇 | 一三,五〇八,〇〇〇 |
| アルゼンチン | 一七,〇七六,〇〇〇 | 一八,四八六,〇〇〇 |
| ボリビア | 二二六,〇〇〇 | 二一五,〇〇〇 |
| ツリニダット | 一七,七三七,〇〇〇 | 一九,二七〇,〇〇〇 |
| 合 計 | 二六二,八八〇,〇〇〇 | 二八一,七八五,〇〇〇 |
| 世界總産額に對する割合 | 一三・三% | 一三・六% |

ウエネズエラ 別表のやうに南米の産油國は七ヶ國であるが、其の筆頭はウエネズエラである。單に南米の筆頭であるばかりでなく、露西亞に肉迫して世界の第二たらしとして居る状態であることほど左様に、北米合衆國に次いでの世界の大産油國である。

扱て此の國は南米大陸の北端に位置して東西に廣がつて居るが、油田の在る地域は東部と西部とに大別される。西部の地域は北西隅の海岸近くに大きなマラカイボと云ふ湖を中心とした部分である。而して其の中心はマラカイボ湖の東岸で、沿岸に沿ふて大油田が竝んで居り、陸地ばかりでなく湖の中にも棧橋を出して盛んに井戸を掘つて居る。従つて此の東岸だけで此の國の七二%を産出して居る。其の外、湖の西部及び西南のコロンビア國境



布分田油るけに於に陸大加利米亞南 圖四十第

方面にも大油田が開かれて居る。そんなわけで西部油田地域全體として、國全體の八五%を産出して居る。東部油田は前者と眞反對に大西洋に近い方面數州に散在して居るものであるが、數年前に出油したばかりであるから、漸く全體の一五%に達したに過ぎない。

元來、ヴェネズエラの東部にはアスファルトの堆積した場所が多いので夙くから世界に知られて居たが、油田の開発は西部の方が先になつた。而してマラカイボ湖畔の最初の出油は千九百十五年であるが、二十一年には百萬噸となり、次で二十五年には千萬噸、二十八年には一億噸と云ふが如き極めて急速な發達を遂げたのである。

ツリニダツト ツリニダツトはヴェネズエラの北東部の海岸近くに在る小さな島であるが、英吉利領となつて居る。本來は西印度諸島の一つとされて居るから之を南米に入れることは問題かも知れぬ。併しヴェネズエラに喰付いて居るから、此處では便宜上、南米に入れて置く。この島にも對岸のヴェネズエラの東部と同様、アスファルトが堆積して居つて世界第一の天然アスファルト産地として有名である。そんな關係で石油も夙くから産出して居るが、近來はメキ／＼と産額を増して居る。油田の所在地は島の西南部である。

コロンビア 此の國はヴェネズエラの西部及び西南部に隣接して居る國であるが、油田地域は南北兩部に分かれて居る。北部はマラカイボ湖の西南に在る油田と聯絡あるもので、ヴェネズエラの國境近くにある。千九百三十三年に初めて出油したが、太平洋沿岸のコヴェナス港まで二百三十哩の送油鐵管完成を待つて、即ち三十七

年から産油を記録したものである。油田名はベトロレアである。

南部の油田は此の國の西部を南北に流れるマグダレナ河の中流に在るもので、千九百十八年から産油して居るが、マグダレナ河口近くのカリビ海沿岸のカルタヘナ港まで三百五十哩の送油鐵管を布いて輸送して居る。最初の油田はインファンタスであつたが、最近ではラ・シラ油田も開かれて、頻りと産油を増加して居る。而して現在の割合は南部が九四%、北部が六%である。

ペルー及びエクアドル ペルーの油田地域は此の國の北西隅の太平洋沿岸である。千八百八十九年以來出油して居るが今日では三個の油田が成立して居る。一番南の油田はネグリティス又はラ・プリア・パリナスとも云ひ、此の國でも最大な油田で國內産額の八〇%内外を占めて居る。其の直北にあるものが第二位で一九%を持つコロピトス油田であり、其の北方七十哩にあるものが第三位のソリティス油田である。此の太平洋岸油田以外としてはアンデス山脈の東側に二、三の小油田が、最近、開かれた様子である。又智利國境に近くアンデス山脈中に在るチカカと云ふ湖水の傍にも小規模の油田があるが、海拔一萬呎と云ふ高い處で、高さでは世界一である。

エクアドルの油田はペルーの太平洋岸油田の連続で、ペルー國境に接する海岸の地域に在るものであつて、現在の油田はガヤキル港の西方に突出するサンタ・エレナ半島の上に開かれて居るものである。

アルゼンチン及びボリビア アルゼンチン共和國の油田地域は、海岸地域とアンデス山脈地域とに二大別され

る。海岸地域の方は大西洋に面するセント・ジョージ湾沿岸のコモドロ・リヴァダヴィア港附近である。千七百七年水井戸を掘鑿した時に偶然石油の湧出したのが動機となつて、今日では堂々たる大油田となつて居る。最近
は國全體の八〇%を産出して居る。

アンデス山脈油田地域は其の名の如く此の國西北部に當るアンデス山脈の東麓に沿ふて、南北に細長く延展して居る油田地域であるが、長く延びて居る關係から更にニュッケン(南部)、メンドザ(中部)、サルタ(北部)の三區域に別かたれるが、産額は七%、四%、九%である。

右のアンデス油田地域のサルタ區域が北に延びてボリビア領内に達して居るのが、即ちボリビア油田地域である。

西部亞細亞及び亞弗利加

近東地方の産油國並産額

| | 一九三八年 | 一九三九年 |
|-----|-------------|-------------|
| イラン | 七八、三七二、〇〇〇噸 | 七八、一五一、〇〇〇噸 |
| イラク | 三二、六四三、〇〇〇 | 三〇、七九一、〇〇〇 |

| | | |
|----------|-------------|-------------|
| ペーレン | 八、二九八、〇〇〇 | 七、五八九、〇〇〇 |
| スーディアラビア | 四九五、〇〇〇 | 三、六五四、〇〇〇 |
| 埃及 | 一、五八一、〇〇〇 | 四、四一五、〇〇〇 |
| 合計 | 一二一、三八九、〇〇〇 | 一一四、六〇〇、〇〇〇 |

イラン 即ち舊波斯油田の開発の経緯に就ては前編に詳しく述べて置いたが、其の後千九百廿九年に至り、メスチエッチー・スレイマン油田の南方三十哩のハフト・ケルと云ふところに一油田發見に成功した。この油田は最近は舊油田を凌駕して居るが、産出の割合はこうである。

| | 一九三八年 | 一九三九年 |
|--------|-------------|-------------|
| ハフト・ケル | 五〇、九四二、〇〇〇噸 | 五一、一一一、〇〇〇噸 |
| スレイマン | 二七、四三〇、〇〇〇 | 二七、〇四〇、〇〇〇 |

而して更に最近にはハフトケルの南東百二十五哩のガシ・イ・カラグリーと云ふ所に一油田を發見して居るが、送油設備未完成であるため、未だ産油は記録されて居ない。之れも大油田となるべき形勢がある。

イラク イラク油田に就ては前編に詳しく説明して置いたから、茲には補足の意味で二、三書き加へて置こう。イラクにはケルクークの大油田の外に其の東方のイラン國境近くに小油田が二個、モスル近くに一個ある。國境



に於ける二個の油田所在地は、元來がイランの領分であつたのを歐羅巴大戰後、イラク領に譲渡されたものである。併し油田権利は在來の通りダブシー即ち英イ會社に屬することに規定されたので、此の區域だけはイラク石油會社には入らないのである。其の油田の名をナフト・カナー及びカスリシユリンと云ふ。今一つのモスル附近にあるガイヤー油田は、大戰中此の方面を占領して居つた英吉利軍が掘り當てたものである。今ではB・O・D會社に屬して居る。以上三個とも小規模で附近の需要を供給するに過ぎないものである。

然かり而して今次の大戦は此の方面の油田の争奪にもなりそうなる形勢であるが、獨伊側も此の國の油田を奪取せねば石油に安心が出来まい。然かもイラクにして獨伊側の手に入らんか、イランの油田も昏破れて寒さを感じる齒の如きこととなるに相違ない。

それだけに補足して置き度いことは、ケルク油田の産油能力である。昨今の年産額は恐らく二十本足らずの油井で採油して居ると思はれる。従つて一本の平均産油量は一ケ年二十萬噸、略にして百五十萬噸位は樂に産出する如きものと著者は確信して居る。然かも前編にも述べたやうに、産油區域の確定的となつて居る部分が延長十里、幅二哩もあつて將來の餘地が澤山ある。彼の十二吋鐵管を一千哩以上も敷設するやうな大仕事も全く將來の餘地が宏大であるからではあるまいか。要するにケルク油田に對する今日のプランは、油井數を極度に少なくして産油量を相當量に止め、永く悠くりと採出する方針と見られる。従つて油井數を増加して急速採油を

試みれば、目醒ましい産油の増加があることは受け合ひである。

バーレン島 バーレン島は波斯灣南部、亞拉比亞の海岸近くに横はる小さな島である。長さ三十二哩、幅廣きところ九哩半、全面積二百五平方哩に過ぎない程度のものである。亞拉比亞海岸からは二十五哩しかなく、地理的には亞拉比亞に屬して居るけれども、政治的にはスウディ・アラビアに屬しては居ない。本質的には一個の獨立國で、立派な王様はあるが、暗々裡に英吉利の庇護を受けて居る。而して此の島の附近の海は有名な眞珠の取れる中心區域であるから、恰かも此の島が眞珠の産地であるかの如くに傳へられ、寶の島バーレンとして希臘、羅馬時代から世に聞へて、歌にも詩にも謳はれて居たものである。こんな優にやさしい島の中に、同じ寶物ではあるけれども石油のやうなグロテスクなものが秘め藏されてあつたことは、誠に面白いことである。

此の島で石油井戸を掘つた會社はカリフォルニアのスタンダード會社であるが、其の動機は此の島の中央の山中に少しばかりのアスファルトのあるのを聞き出し、地質調査を行つた結果が面白そうだとあつたことにある。かくして千九百三十一年十月から井戸を掘り始めたが、三十二年六月には深さ二千八百呎でガソリンを三〇%も含むやうな石油を一日に二千五百呎も吹き出して來た。其の後、年と共に産油を増加して現狀に及んだのである。

スウディ亞拉比亞 バーレン島の試掘井成功と見るや、會社は對岸の亞拉比亞本土に於ても必ずや油田を發見すべしと考へて、直ちに廣大な面積に對して石油探掘權獲得を企てた。併し結局、波斯灣海岸に沿ふて幅凡そ百

五十哩程の地帯を許可地として獲得した。於此、カリフォルニア・スタンダード會社は數隊の地質調査隊、物理探掘班を送つて調査に取りかゝつたが、地域は云ふまでもなく暑熱不毛の砂漠で、人が居ないばかりか一滴の水すら得られない有様で、調査隊の困難は充分に想像し得る。それでも二ヶ年後にはバーレン島の油田と同様な地層で同様な形状をした場所を發見した。併し此處には石油の徴候は全然發見出來なかつたが、地層の形が地下石油埋藏を知らせる立派な標徴であるから、會社は直ちに試掘に取りかゝつた。かくて月日は不明であるが三十五年中には掘鑿が始められた。第一號井は不成功に終つたが、第二號井は三十八年三月に深度四千七百呎で一日に四千呎も噴き出す大油層に掘り當てて凱歌を擧げた。こんなわけで亞拉比亞本土にも立派な油田が出現したのである。

かくの如くスタンダード人の果敢な勇氣と優秀な技術とに依つて、石油徴候一つない砂漠の中に立派に油田を開いたのである。此の成績に刺戟され、波斯灣頭の西側にあるコウエイト國にも、英米合同で試掘が開始され、石油が噴き出したと傳へられて居る。

埃及の油 埃及の油田は紅海の西岸、即ち亞弗利加側にハガダ、ゼムサの油田が開かれて居る。此の方面は有名なりビヤ砂漠の一部で、水一滴もない場所であるが、夙くから油田を拓いた英吉利石油業者には敬意を表して可い。

尙ほ埃及以外の亞弗利加州の油田は北部亞弗利加のアルゼリア及びチュニチアにも在るが、今のところ産額は問題にならぬ程度である。

東部亞細亞の産額

東部亞細亞の産油國産額表

| 國名 | 一九三八年 | 一九三九年 |
|--------|----------------|----------------|
| 蘭領印度 | 五七、三一八、〇〇〇噸 | 六一、五八〇、〇〇〇噸 |
| 英領ボルネオ | 六、九一三、〇〇〇 | 七、一〇四、〇〇〇 |
| 緬甸 | 七、五三八、〇〇〇 | 七、三九六、〇〇〇 |
| 印度 | 二、四八八、〇〇〇 | 二、一六八、〇〇〇 |
| 樺太 | 三、八二一、〇〇〇 (推定) | 四、〇〇〇、〇〇〇 (推定) |
| 其他 | 二、五一一、〇〇〇 | 二、六五四、〇〇〇 |
| 合計 | 八〇、五八一、〇〇〇 | 八四、九二二、〇〇〇 |

印度の油田 以上の内、印度を除いては所謂東亞共榮圈内に入るものであるから次項に詳細に説明することとし、印度油田に就て簡単に説明を加へて置こう。

印度の石油地帯はヒマラヤ山脈の南麓に沿ふて起伏して居る丘陵地帯であるが、現在では不思議にもヒマラヤ山脈の兩端近くだけに各一個宛の油田地域が開かれて居る。東の方にはアッサム州に在る關係からアッサム油田と呼ばれ、西部のものはパンチャブ州に在るためパンチャブ油田と呼ばれて居る。昨今の出油の割合は次のやうである。

| | 一九三七年 | 一九三八年 |
|-------|------------|------------|
| アッサム | 一、八五九、〇〇〇噸 | 一、八九一、〇〇〇噸 |
| パンチャブ | 三〇三、〇〇〇 | 五九七、〇〇〇 |

三 東亞共榮圈内の油田

東亞に於ける石油地の分布大要

東亞に於て現に石油を産しつゝある地域竝に石油産出を期待し得る地域を大觀すると、二通りに類別が出来る。その一つは前掲第十五圖に畫き出してあるやうに亞細亞大陸の東部、南東部から南部にかけての外側を取り巻いて居るやうな恰好に、多少の斷續はあつても帶狀に大體の連繫を保つて居るものである。今少し具體的に云へば、亞細亞大陸の東部即ち太平洋上の島々から、東南部では東印度の島に互つて出現し、北西に延びて緬甸に達するものであつて、地質學的に云へば第三紀層から成立して居るものである。著者は之を東亞外側石油地帯と呼ぶことにして居る。而して此の地帯に於ては北は樺太から日本群島、東印度諸島、緬甸にかけて澤山の産油々田が開拓されて、最近は前項に紹介したやうに一年に約八千萬噸、總數にして約一千百萬噸を産出する有様で、東亞に於ける最も重要な石油地帯である。尙ほ本石油地帯は印度に入つてヒマラヤ山脈の南麓に沿ふて西方に走り、更にアフガニスタン及びイラン高原の南麓を傳つて數多の大油田を持つ西部亞細亞の石油地に連續するものである。

西部亞細亞の油田に就ては既に詳しく紹介して置いた。

扱て今一つの東亞に於ける石油地は東亞大陸内に、同圖に現はしてあるやうに斑點狀にポツリ／＼と孤立した石油地が散在して居り、地質學的には中生代の地層から成るのを特徴として居る。著者はこれを東亞内陸石油地帯と呼ぶことにして居る。今日までに發見されて居るものに四川省、陝西省、ダライ、阜新の四個所があり、未だ實證を経ないが、それらしい噂のある場所は尙は數個所ある。而して之等内陸のものは極めて少量の石油を産するものがある位で、まだ問題となるほどの産油はない。これと云ふのも之等の石油地は交通不便の關係から未だ充分の試掘を経て居ないからである。従つて之等石油の眞價の判明は今後の問題である。言ひ換へれば、東亞大陸内の石油地の眞價を究めることは、實に吾々日本人の責務であるのである。

尙ほ佛印及び泰國方面には油田はないかと屢々質問を受けるが、今日までのところでは油田の存在すべき確證はない。併し二通りの希望はある。即ち一つは支那大陸に發見され、又發見されつゝあるものと同様な石油地發見の希望であり、他の一つは隣接の緬甸の石油と同様な石油地發見の希望である。此の如き希望は今後に於ける吾人の努力に依つて或ひは實現されるかも知れない。

樺太及日本群島の石油地

日本群島の北部に在る油田は恰かも同一地帯に屬して居るものゝ如く思はれるけれども、地質學の見地からすれば次の三石油地帯に區別される。

- (イ) 北樺太石油地帯
- (ロ) 北日本石油地帯
- (ハ) 裏日本石油地帯

北樺太石油地帯は第十六圖に畫き出したやうに、樺太島の北東部即ち露領の東海岸に沿ふ部分に發達するもので、日本領には國境附近の海岸に極めて僅かしか入つて居ないのである。北日本石油地帯は樺太の中央部並に西部、北海道の中央部を縦貫して太平洋に入り、本州には連續しないものである。裏日本石油地帯は北海道の西部から青森、秋田、山形、新潟等の主として裏日本方面に發達して居るものである。而して北樺太石油地帯には北樺太の北部に有力な油田が出現して居るけれども、北日本石油地帯には北海道に二、三の小油田がある外、樺太にも露領にも日本領にも一つも成功して居ない。よく聞くことであるが、北樺太に豊富な油田がある

ほどだから南樺太に無いわけではないと云ふ考へ方は、石油地帯の區別の見地からすると一概に正しいとは云へぬ。次の裏日本石油地帯は本部に於ける最も重要な石油地帯であることは云ふ迄もない。中でも秋田、新潟兩縣には重要な油田が澤山出現して居る。此の地帯は長野縣に入り、更に群馬縣を経て太平洋沿岸方面に連續して居る。以上三石油地帯と懸け離れて臺灣全部に發達する一石油地帯がある。著者は之を臺灣石油地帯と呼んで居る。

第十六圖 本邦北部に横はる石油地帯の分布



現在までのところでは島の西側ばかりに油田、ガス田が出現して居る。

臺灣の南方にある比利賓群島にも石油の徴候は數多発見され、相當に試掘も行はれたけれども未だ産油は記録されるに至つて居なく。

北樺太油田開發の由來

以上は日本群島竝に其の附近に於ける石油地帯の概要であるが、話の序に北樺太に於ける油田開發の由來に就て簡単に物語つて置こう。

抑も北樺太の東海岸に石油湧出地のあることの知れて來たのは、千八百八十年頃のことである。其の後幾多の露西亞人が入り換はり立ち變つて探掘を試みたが中々ものにならなかつた。而して此の地の利權に就て日本人が關係したのは千九百十四年即ち大正三年のことであつた。其の動機は樺太で石炭と石油の鑛區を持つて居つたイワン・スタヘーフ經營のスタヘーフ商會が、樺太の事業を引揚げるため、自己所有兩種の鑛區を日本人に讓渡せんとしたことである。此の交渉を受けた日本人は押川方義氏等であつた。併し露西亞の國法は外國人に探掘權を與へることを禁じて居た故、押川氏は櫻井鷗村氏を露都に遣はして、日本人に對し特に探掘權を附與すべき運動を行はしめた。其の時、櫻井氏は時の内閣總理大臣大隈重信侯の紹介狀を携へて彼の地に向つたものである。幸

にして紹介狀の威力、本野駐露日本大使の斡旋竝に櫻井氏の手腕が物を言つて目的は美事に貫徹された。其の際、確乎たる鑛業名義人を露西亞側が要求したため日本側は大隈重信侯の名前を出したところ、露西亞側は大隈さんは世界の大政治家としては有名だが、未だ鑛山をやると云ふ話は耳にしないとして承諾しないので、遂に久原鑛業會社を名義人にするに落着いたのである。そして千九百十七年即ち大正六年にスタヘーフ商會と久原鑛業會社との契約が成立し、五個所數十鑛區が日本側に正式に讓渡されたのである。

併し右契約中に規定しある試掘を實行することは中々の大事業であるから、政府斡旋の下に日本、寶田の兩石油會社竝に三菱、大倉の二鑛山會社も参加し、北辰會なる開發事業組合を組織して北樺太油田開拓に當ることになつたのである。

而して大正八年には地質調査隊を送り、其の結果に基き直ちに二組の掘鑿隊を送つて試掘の實行に移つたのである。

然るところ大正九年即ち千九百二十年一月、露西亞過激派の一部は樺太にも侵入した上、北辰會の鑛場襲撃の危険があつたために、派遣されて居つた三百名の従業員は酷寒中に風雪を冒し、萬苦の末、辛ふじて邦領に引き揚げたやうな事件が起きた。次いで吾が國民の心膽を寒からしめた尼港事件が勃發したため、七月には吾が政府は樺太の占領を宣言するに至り、其の結果、北辰會の試掘事業は其の年の九月に再開されるに至つた。而して

大正十一年には前の五社に三井、鈴木の兩社を加へ、資本金五百萬圓の株式會社北辰會となり、調査と試掘に邁進することとなつた。

かくして大正十二年にはオハに於ける試掘井成功して本邦石油業者五ヶ年の勞苦は酬みられ、豊富な油田が発見されたのである。然るところ大正十三年には日露國交も調整されて、北京會商となり、越へて十四年二月には北京條約の調印を見、更にモスクワに於ける細目協定会議は其の年の十二月に目出度く調印を終つた。其の協定内容を茲に詳しく説明する餘裕はないが、要するに一千平方露里に對する四十四ヶ年間の利権竝に油田開發に關聯する特典の許可協約が成立したのである。而して株式會社北辰會は北樺太石油會社となつて、今日に及んで居るのである。

尙ほ北樺太油田利権獲得の端を開いた押川方義氏は本邦基督教界の大元老であるが、晩年は憂國の志士として國事に盡瘁され、北樺油田問題の如きも其の一端であつたのである。冒險小説家として有名であつた押川春浪さんは實に氏の長男であるが、氏が人を露都に派して露西亞の官臣を説服せしめたやうな計畫は、令息の小説を地で行くやうで甚だ痛快である。こんな話を詳しくすると小説以上に面白いものになるのだが、未だ生存中の人もあられることであるから此の位で止めて置こう。

支那の陝西油田

陝西省の油田は第一編に紹介して置いたやうに東亞では最も夙くから世に知られ、地域の廣大、油徴の饒多である故を以て重要視されて居るけれども、僻遠の地にあつて容易に立ち寄れないため未だに疑問の霧に包まれて居る有様である。曾ては米のスタンダード會社が採掘權を獲得して徹底的に地質調査を行ひ、且つ簡單ながら試掘を行つた上に一切を放棄してしまつた。然らばそれで陝西油田は絶望であると斷じて善いかと云へば、さうもいかぬ。何となれば、スタンダード會社の希望する程のもでなかつたとしても相當なものであるかも知れぬと云ふ問題もあり、又彼の廣大な地域に僅か數本の試掘井で事を決定するわけに行かぬと云ふ問題も残るからである。さりとて北支方面から傳はつて來る樂觀的流説に耳を傾けるわけにも行くまい。此の流説と云ふのはかうである。スタンダード會社の試掘からは大量の石油が噴出したのだが、そんなに石油が出ては世界の油價が低落してスタンダード自體が困るため、不成功と稱して其の井戸を埋めて引き揚げて世間を瞞着して置いて、數十年後、油價低落の恐れが無くなつてから再開すると云ふ約束が時の支那政府と秘密に出來て居ると云ふのである。而して現に大量の石油の噴出したのを確かに此の眼で見たと云ふ支那人もあるさうである。

それは兎も角として陝西油田を曾て無いほど詳細に地質調査を行ひ、且つこれを實證するために鑿井さへ行つたほどの徹底さを示したスタンダード會社調査隊の結論は、陝西油田の價值を考へる有力な參考となると思ふから簡單にこれを検討して見よう。併しその前に順序として陝西油田の地質の大勢竝に夙い時代の日本人の活躍に就て述べて置かう。

陝西油田の位置は陝西省の北部の殆ど全部を占め、甘肅省の東側の一部、山西省の西部の一小部分も併せ、更に北方は長城の外に出てオルドス地方にも及んで南北凡そ二百五十哩、幅凡そ百五十哩の廣きに達して居る。此の範圍内に古生界の最上部を最下部とし、中生界の厚い地層が堆積して居るが、これ等の地層が即ち含油系統である。而して此の地域の石油の古い歴史に就ては第一編に紹介して置いたが、近代に於ける石油採掘の企畫及び實行は日本人に依つて行はれたものであるから、其の點を稍々詳しく紹介して置こう。

延長油田の開発と日本人技師の入陝

前に述べたやうに陝西省方面は今日では極めて僻遠の地となつて居るが、石油事業熱の世界的昂隆の結果、廿世紀に入る頃から外國企業家の採掘權獲得が始まるに至つた。併し外國企業家の利權獲得運動は却て支那政府に、石油業の有利なることを悟らしめ、自國民の手に依つて開發させることの有利であることを知らせる結果となつ

たのである。即ち支那政府は外人の誘惑を退け、陝西省廳をして此の事業に當らしめることにした。於此、陝西省廳は先づ石油の性質を研究すべく、最も多く石油を湧出して居る延長縣の石油を汲み取り、當時、武昌學堂の教授として武昌に居住して居られた理學士稻並幸吉氏の許に送つた。これは明治三十七年即ち千九百四年のことであつた。稻並氏は明治三十四年の東大化學科出身であつたから此の研究には最も適任であつた。稻並氏は其の油は多量に燈油の取れるものであることを知り、更に廳の依頼に依つて調査隊を延長縣に派遣して實地踏査を行はしめた上、油井掘鑿を進言した。於此、省廳は稻並氏に委託して日本から鑿井機の購入、鑿手の雇傭を行はしめ油井掘鑿の實行に取りかゝつたものである。鑿手一行が日本の越後を出發して漢口に到着したのが明治三十九年八月、漢口から汽車で河南省河南府に趣き、其處からは馬車で重い機械類を運びながら千辛萬苦の末、漸く翌年の一月に目的地の延長縣に到着した。

而して機械の破損、部分品の未着等のため仕事は少なからず妨げられたが、それでも其の年即ち明治四十年十月には深度二百三十呎で油層に到達し、最初の間は一日に六十呎も出たと云ふ好成績であつたので直に附近に製油所が建設された。

かうして延長縣の石油事業の幸先は甚だ良好であつたけれども、間もなく省の方針が一變したので、鑿手一行は翌年の一月に全部解備されて歸國した。この一行の監督者は長岡市の柳野透氏であつたが、今も尙ほ鑽鑿とし

て活動して居られる。恐らく一行中の生存者は椰野氏一人であらう。

其の後二年、石油事業の中絶を遺憾とする省内の人士が協議して官民合同の油田開發會社を組織したが、此の時には方針も近代的となつて、鑿井に先だつて地質調査を行ふと云ふ方針を取つた。これには日本石油會社から理學博士大塚專一氏、測量技師田村昇氏が招聘されて、明治四十三年五月に日本を出發し、七月に延長に到着され、滞在約二ヶ月で調査を了へて日本に歸られた。併し同行した鑿手二名は殘留して鑿井に當ることになつた。此の時は第二號井及び第三號井を掘鑿したが、第二號井が少量の石油を出しただけで成績は悪かつた。その内、會社も資金が充分に集まらないため事業繼續が困難となつて來たので、日本人二名も明治四十四年の秋に歸國してしまつた。

以上のやうな事情で、日本人の努力にも拘はらず第一次の陝西油田開拓は不得要領に終つてしまつたのである。

スタンダード會社の調査と結論

上述のやうに陝西油田に對しては、支那官民は一致して外人の誘惑を退け、自國民の手に依つて開拓する方針を固く執つて來たのであるが、革命勃發以來、中央、地方共に財政の窮乏其の極に達した結果、外資を得るためには陝西油田を犠牲とするも致し方なしと考へるに至つた。其の結果、陝西油田採掘權がスタンダード會社の手に入

つたのであるが、その前に日本にも交渉があつたのは確かである。當時の事情は「日本側が躊躇逡巡して居る間にスタンダードに横取りされた」と云ふことになつて居るが、併し當時の日本人の石油に對する認識と、其の持つ財力では、僻遠の陝西油田に對して數百萬圓の借款と、大官等に與へる數十萬圓のコミッションを出すことには躊躇逡巡するものも止むを得なかつたらうと思はれる。

扱てスタンダード會社は千九百十四年（大正三年、民國三年）二月に調印を済ませると、同時に調査を開始し、十六年の二月まで滿二ケ年間、陝西省を中心として甘肅、山西、河南、山東、直隸に互つて徹底的地質調査を行つた。これに従事した地質技師は世界的に令名あるクラブ及びフラー外四名であつた。彼等は地質調査隊五、測量隊五を編成して、先づ豫察調査をし、次いで有望地域を精査して行つた。その上に有望な條件を具備して居る場所に直ちに試掘を執行すると云ふ方針を取つたのである。かくして擇ばれた箇所は二十八箇所であつたが、實際に試掘されたのは四個所で六本、前に試掘された延長縣にも勿論實施された。深きは三千五百呎、浅きは二千呎、延長縣のものは二千八百呎、何れも數個所に油徴を認めて居る。併しスタンダード調査隊は凡て探油の價値なきものと認めたやうである。

かくの如く入念に試験した上、スタンダード調査隊は千九百十六年の二月を限りとして全部が支那を引き揚げたから、政府との契約は自然消滅の形で今日に及んで居る。然らば如何なる見解から如何なる結論を出したかを

検討して見ると、

- 一、ス社調査隊は有利な条件としては、地域内に發表されて居る數十個の油徴地と延長縣の産油井を擧げ、之等に依つて地層中に多數の含油が多數に且つ廣く存在する證左とした。
- 二、併し不利な条件としては第一に油田を構成する地層には砂岩類の量が多きに過ぎ、頁岩類が少なきに過ぎること、第二に地層の傾斜があまりにも緩徐で、凡ての構造があまりにも平坦に過ぎることを擧げて居る。元來、地層の中に砂岩と頁岩とが適宜に存在することは、石油を一局部に集積し且つ安全に保藏するのに役立つものであるが、若し砂岩が多過ぎる場合には之と反對な現象を生ずるものである。支那人の説明の言葉を借りれば石油を「分散擴布」せしむるので、大量の石油を望むものには悪い条件である。次に石油を一局部に多量集積せしむる推進力は地層の傾斜であるから、地層の傾斜があまりにも緩徐であることも決して好い条件ではない。又傾斜が緩徐である結果、構造が平坦且つ寛緩であることは、構造の輪廓が不明瞭で適當な鑿井位置を發見するに困るわけである。そんなことでス社調査隊は此の傾斜の緩徐に過ぐることを氣に病んで居る。かくて調査隊は有利な条件の下に希望を抱き、不利な条件に疑念を持ちながら試掘を執行して結論を引き出さんと試みたのである。而して彼等のものした種々たる報告書を通じて彼等の陝西油田に對する總結論なるものは、次のやうであると著者は見て居る。

- 一、産油田の出現は確實である。
 - 二、しかし構造が小規模でかつ弱勢であるから、一個所で大量を得る如きことは望まれない。
 - 三、而して一個の油田を發見するにも失敗を重ねる恐れが多いから、随分と骨が折れるに相違ない。従つて堅忍持久ことに當らなければならぬ。
- 要するに小油田の發見は可能であるけれども、大油田の發見は覺束なく、またその小油田の發見も容易なことではないと云ふのである。此の結論をどの程度に信用するかは各人の自由であるけれども、之れに依つて凡その状態は窺ひ得ると思ふ。

熱河の石油に就て

話の序に右の陝西省石油地と一緒にスタンダード会社に渡された熱河の石油地のことを書き加へて置こう。熱河の九佛堂と云ふ部落附近にはオイル・セールがある。此のセールを乾溜すれば石油と同様なものが取れると云ふことを知つた二、三の支那人が、探掘權獲得に狂奔して居つたのは、スタンダード会社の契約成立の數年前のことであつた。併し時の熱河都統熊希齡はこれを自己のものとする下心があつてか、容易に許可を與へなかつた。其のうちに熊希齡は中央政府に入つて國務總理となり、スタンダードとの契約を結ぶ當事者となつたが、

其の契約協議中、彼は進んで熱河の石油探掘権提供を持ち出した。察するに彼はオイル・セールと天然石油とを混同して居たものらしいのである。これに依つて骨折損をしたものはスタンダードの調査隊であつた。大に骨を折つて調査したが、そこにはオイル・セールがある位のもので、石油はあり得ないと結論したのである。

併しこのことは、偶々、熱河を石油地として誤認せしむる原因となつたのである。其の後、熱河石油地問題では多數の人が迷惑をして居るのである。一犬の吠へた嘘の響きが、何時迄も消へ去らないのは全く驚かされるのである。最近にも一人の滿人の「スタンダードは九佛堂で石油井戸を掘つて多量の石油を出したが、自社の政策上から其の井戸を埋めて他日の時機を待つて居るので、自分は石油が多量に噴き出した實景を此の眼で確かに見た」と云ふ話に乗つた人があつて問題になつたこともあつた。此の話は前に話した陝西省油田に關するデマと酷似して居るが、支那人系統の者にはこんな型の話を造る癖があるのかも知れぬ。併し嘘を造る者も悪いが、こんな話に乗る人があることもよろしくない。

四川省の石油

三千哩と云はれる揚子江の流れも、江口から九江までの約五百哩を下流、九江から宜昌までの約五百哩の間を

中流、宜昌から四川省の叙州までの六百哩の間を上流、その叙州から西藏の水源に至る約千四百哩の間を源流と呼んで居る。而して右の上流に當る部分の殆ど全部と源流の一部が、此の省の中央を流過して居ることを考へれば、四川省の凡その位置が想像出来ると思ふ。扱て此の揚子江の流域の大部分を挾んで一大盆地が形成され、其處に特殊な地域が出現して居るが、之れが即ち四川の盆地であり、別名を巴蜀の盆地と呼んで居るものである。其の盆地の廣さは約六萬二千方哩で、吾が九州の四倍弱に當つて居る。四方は高山脈に圍まれ、中央が低くて文字通りの盆地で、周圍の高山からは多數の河江が流下して揚子江に流れ込んでゐる。四川の名は河江の多いことを意味し、巴は諸川の流向が恰かも巴紋の廻る如く轉回する如き觀があるから來たものであると云はれて居る。而して此の盆地々域は氣候溫暖で冬にも霜を知らず、地味肥沃である上に灌漑が行き届き、周圍の山地には森林、礦物等の天然資源が豊であるため、交通不便な僻遠の地であるけれども夙くから文化が興隆し、支那本部中で最も人口稠密な地方となつて居る。現在の人口は少なくとも五千萬人はあるだらうと云はれ、彼の蒋介石の頭張つて居る重慶はこの盆地の中央部の南方に位して居る。

扱て本問題は石油であるが、昔から四川省には石油があると傳へられて居るけれども、地表に天然に現はれて來て居るものは案外に少なく、現在では廣い盆地の中に僅かに一個所を擧げ得るに過ぎない。併し四川の石油を有名にした原因に、鹽水井戸のあることを忘れてはならぬ。即ち四川省と云ふよりは巴蜀盆地内では頗る夙い時

代から井戸を掘つて鹽水を汲み出し、これから食鹽を製造する工業が発達して居るが、澤山の井戸の内には石油やガスに掘り當てるものがあるので、有名になつて居るのである。

右の製鹽工業の起源は二千年の昔に遡ると云はれ、現在の豫行範圍は盆地の西半部即ち蜀の地域の大部分に及び、井戸の總数は約七千本、最近の鹽の年産額は約四億五千萬斤（二萬七千噸）である。かく四川省に製鹽工業が発達した状態は、第二編に紹介した十九世紀初期の北米合衆國アバレシア山中の事件と全く同様である。即ちアバレシア山中では殖民が山奥の方に進入するに連れて鹽の不足を感じて居るところに、頭のよい百姓の一人が山中に湧出する鹽水を煮沸して食鹽製造を試みたのが動機となつたのであるが、四川とても殖民が食鹽を得ることに苦んで、遂に山中に湧出する鹽水を利用するに至つたことは、彼等の持つ傳説に依つても充分想像し得るのである。今、其の傳説の一つを拾つて見る。

「秦の文王の時、李冰なる者あり、任ぜられて蜀守となり、蜀中の富源を開拓せり。當時蜀には未だ産を見ず、土民の苦むこと甚だし。李之を見て深く思ふ所あり、乃ち今の成都南方に地をトして井を穿ちしに、鹽水津々として湧き忽ちにして泉をなせり。土民其の徳を頌して仰いで聖者とせり云々」（支那省別全誌）

とある。如何に巴蜀の盆地が肥沃で殖民に適するとしても、海岸から千哩以上も距たり、四方は高山高原に包圍されて、交通は至つて不便であるから、食鹽の搬入は容易でなかつたらう。従つて若し此處で食鹽が出来な

つたならば、此の盆地の殖民もあんなに早くから繁昌はしなかつたらうと思はれる。而して其の鹽水の發見が果して秦の時代であつたか否かは別問題としても、兎に角、頗る夙い時代から鹽水の利用が行はれて居たことは確かである。従つて今日でも七千本もあることであるから、大昔からのものを總計すると莫大な數に上るものと思はれるのである。即ち之等多數の井戸の或物が時折、石油やガスを掘り當てるのが四川省に石油があると云はれる原因である。而して別に記録も残つて居ないから古いことは明かでないが、現在、石油及びガスのあるところとして普通に傳へられて居るのは次の三個所である。

- 一、自流井
- 二、煙坡
- 三、蓬萊嶺

因に四川省では鹽水を汲む井戸を鹽井、石油の出る井戸を油井、ガスが出る井戸を火井と云つて居る。以下簡單に右の三地域の狀況を紹介して置こう。

自流井は成都の南東約八十哩、叙川の直北四十哩で、自流井區域を中心として西は貢井、北東は大塚巴に連なる延長約十哩、幅二哩半の地域に約三百本の鹽井があつて、四川省全體の約半分に近い量を産出して居る。此の地は四川産鹽業の發祥地であり、且つ昔から製鹽業の中心になつて居る。鹽井の深さは上部鹽水帯を目的とする

ものは五百米乃至六百米、下部鹽水帯を目的とするものは八百米乃至千米である。而して石油及ガスは時々出會はず程度で、其の出會はず回数もあまり多くはない。又量も稀には一日三千斤(千八百疋)も出したものもあるが、普通には極めて少量な石油の混入を見ると云ふ程度のものである。尙ほ自流井の産鹽地域は一大背斜構造で背斜面に沿ふて鹽井が配列されてあるが、もと／＼石油を含むことが少ないのか、それともまた一段と深く掘り込めば豊富になるのか、兎に角、構造の偉大なるにも似ず、現在では、石油に就てはあまりに貧弱だと云つて可い。

次の煙坡は重慶の南約二十哩、重慶から貴州に向ふ道路に沿ふた小村で、其の村の附近に石油溝又は煤油溝と云ふ小溪があつて、石油を滲じさせた花崗岩質砂岩が露出し、其の砂岩層中に掘り込まれた井戸には淡水の上に少量の石油が溜つて居る。此の石油は毎月三百斤(百八十疋)を採取し得ると云はれて居る。此處の石油は他の場のと違つて油井に依るものではなく、含油砂岩を露出する如き立派な天然の石油徴候である。今のところ、四川省唯一の天然石油徴候であるのである。而して地質學的には此の地も一條の背斜の上に乗つて居る。

最後の蓬萊鎮は重慶の北西直徑で約七十哩で、涪江の西岸に當る部落であるが、其の近くには數本の油井竝に大井が建つて居るが、之等の油井は千九百二十九年頃に掘鑿されたものである。其の當時に最も多く石油を産出したものは一日百斤位宛當分の間出したもの、又一時的ではあるが四百斤も出したものがある程度である。又ガス井のガスは竹管を以て民家に導き使用して居るが辛ふじて一家を賄ふ程度である。而して此處の構造は水平に

近く横るものゝ内で、油井及びガス井のある區域が幾分か膨曲して居るかと思はれる如きものである。油井及ガス井の深さは、最も深いもので百米位である。

以上は四川省で石油及びガスを出した場所として有名なところである。併し鹽井二千年の間には他の場所からも出たかも知れないし、又賑やかに石油及ガスに出會つたこともあつたかも知れない。けれども現在竝に比較的近き過去に於けるものは凡そ之れ位である。従つて四川省の石油は其の名聲があるほど内容は賑やかでない。

最後に地質に關係したことを一言附け加へて置くが、此の四川の盆地も地層の構成は陝西省石油地のそれに酷似して居る。即ち盆地を構成する地層は最下部が古生界の最上部で、之に續いて中生界の地層が堆積して居る。其の厚さも五千米を出て居るが、之等の地層が褶曲して背斜、向斜の構造を造成して居るのである。而して鹽水竝に石油等を比較的多量に持つものは、侏羅紀竝に三疊紀の地層である。尙ほ白堊紀の地層は赫色であるために盆地の風景を赫色の岩色で特徴づけて居る。それ故、地質學者は此の盆地を「赫色盆地」と呼んで居る。

今一つ附け加へて置き度いのは、此の地の鑿井術のことであるが、此處では近代的機械力を應用することなしに一千米乃至それ以上の井戸を掘り遂げて居る。動力は人力乃至水牛の力である。機械は主として竹桿と竹繩で、鐵類の使用は鑿や滑車の軸位であらう。時日はかゝるであらうけれども、それで千米も掘るのであるから全く驚嘆に値するものである。尙ほ本邦で盛んに利用されて居る上總掘と稱ばれ、竹桿を利用する方式は、此の四川の

方式と全く同様であるが、偶然の一致か又は四川のものの輸入か、何れにしても面白いことである。

東印度諸島の油田

東印度の油田は吾等にとつて最も關係深いものであるから、最も詳しく紹介して置き度いと思ふ。

油田と産額

現在のところ東印度諸島中、油田の開かれて居るのは四島で、油田の数は和蘭領内に八個、英領内に二個であるが先づ島別の千九百三十九年度産額から紹介すると次のやうである。

| 島名 | 千噸 | 千噸 | % |
|-------|--------|--------|-------|
| ボルネオ島 | 一一、九九四 | 一一、六八一 | 一一・二 |
| ジャバ島 | 六、四九七 | 八、四四一 | 一〇・六 |
| スマトラ島 | 四一、〇〇五 | 五、三二〇 | 六・六・九 |
| セラム島 | 七九七 | 一〇七 | 一・三 |

合 計 六一、二九三 (七、九四九) 一〇〇・〇

英領東印度

英領ボルネオ 七、二一四 (九三二)

これに依つて見れば同年度に於ける東印度諸島の全産額は

六八、五〇七、〇〇〇噸

産額にすれば

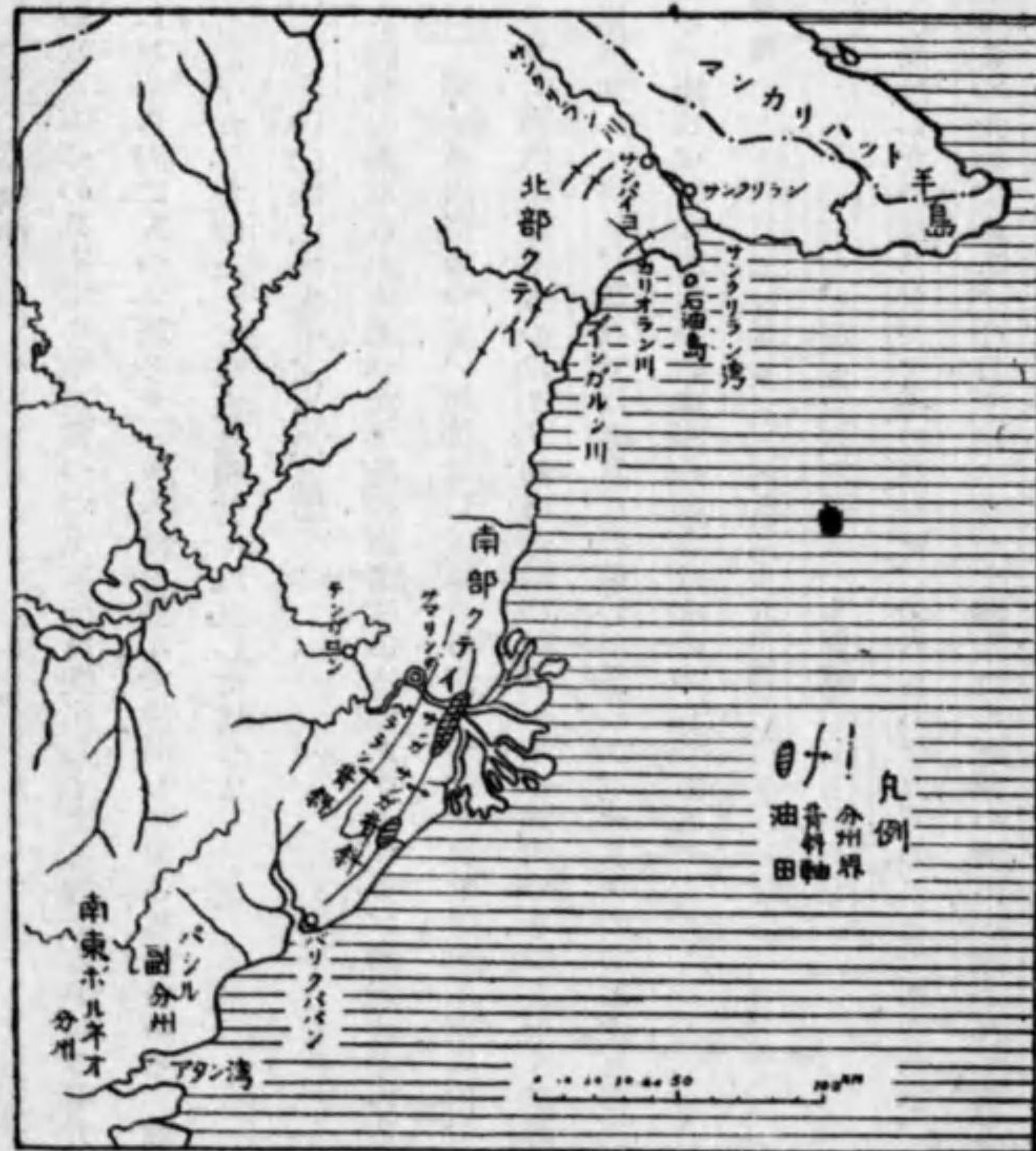
八、八八〇、〇〇〇噸

であつて、蘭領の分が八九%、英領の分が一%と云ふ割合になる。又ボルネオ島は蘭領、英領を合せて二〇、二〇八、〇〇〇噸(二、六一二、〇〇〇噸)

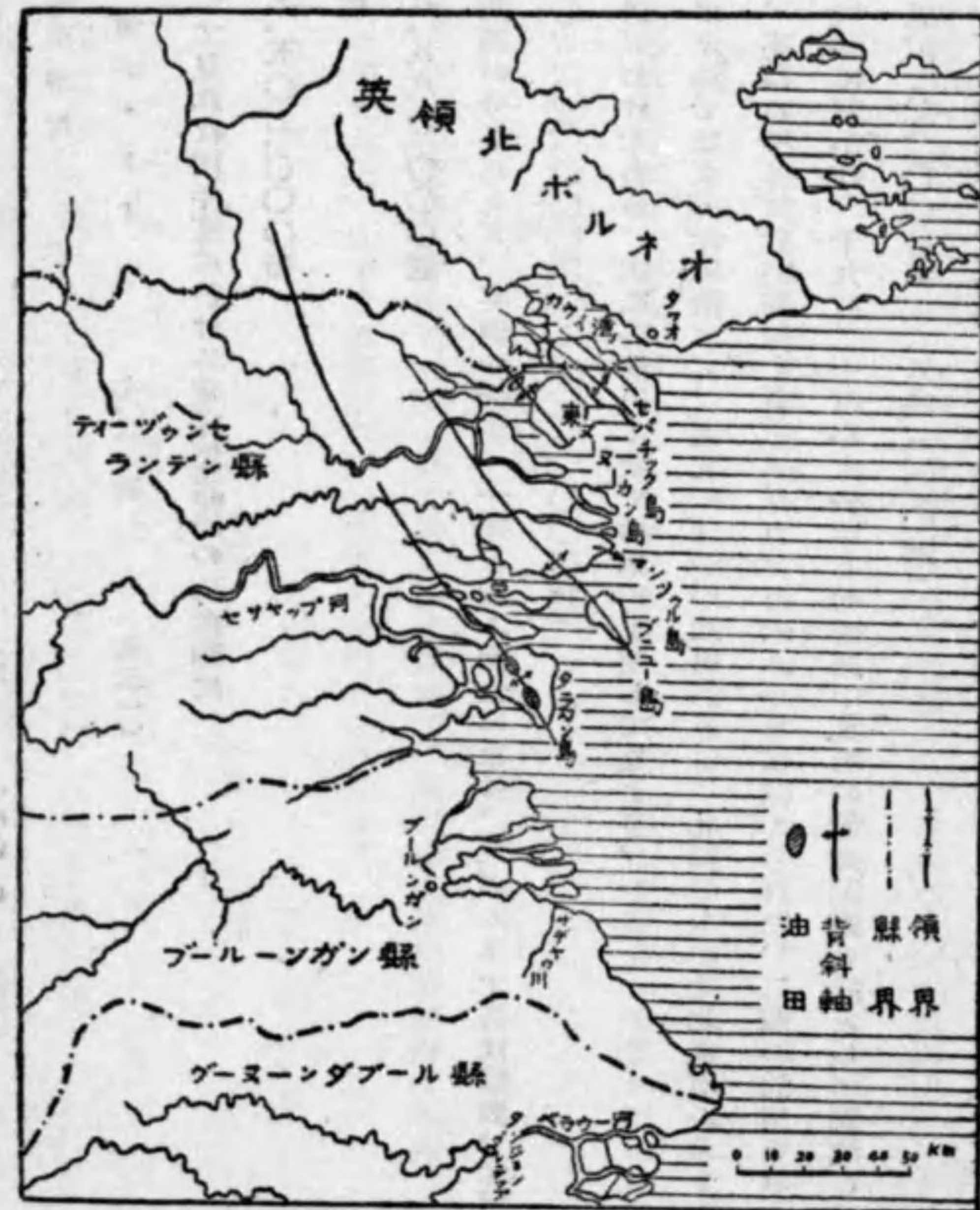
を産出して居るわけである。次に各油田に就て簡単に説明して見よう。

蘭印ボルネオ島では東海岸に沿ふて、南北に二つの油田がある。北部のものは北東ボルネオ油田又はタラカン油田と云ひ、英領の境界に近い海岸にあるタラカンと云ふ小島に開かれた、二個の油田を中心とするものである。千九百六年に開かれ、千九百二十四年に於ける七百三十萬噸の最高記録を峠として遞減し、現在の産額は五、二八九、〇〇〇噸(六八四、〇〇〇噸)

三 東亞共榮圏内の油田



田油部南オネルボ領南 圖八十第



田油部北オネルボ領南 圖七十第

である。南部のものは東海岸の凡そ中央部に當つて東に向ひ突出して居る大きな半島の南方海岸で、掌を開いたやうに水流を分岐しながら海に入つて居るマハカム河を挟んで展開して居るものである。最初の出油は千九百三年で、産額は千九百二十九年を峠として現在は相當に減退して居つて

七、七〇五、〇〇〇噸（九九七、〇〇〇噸）

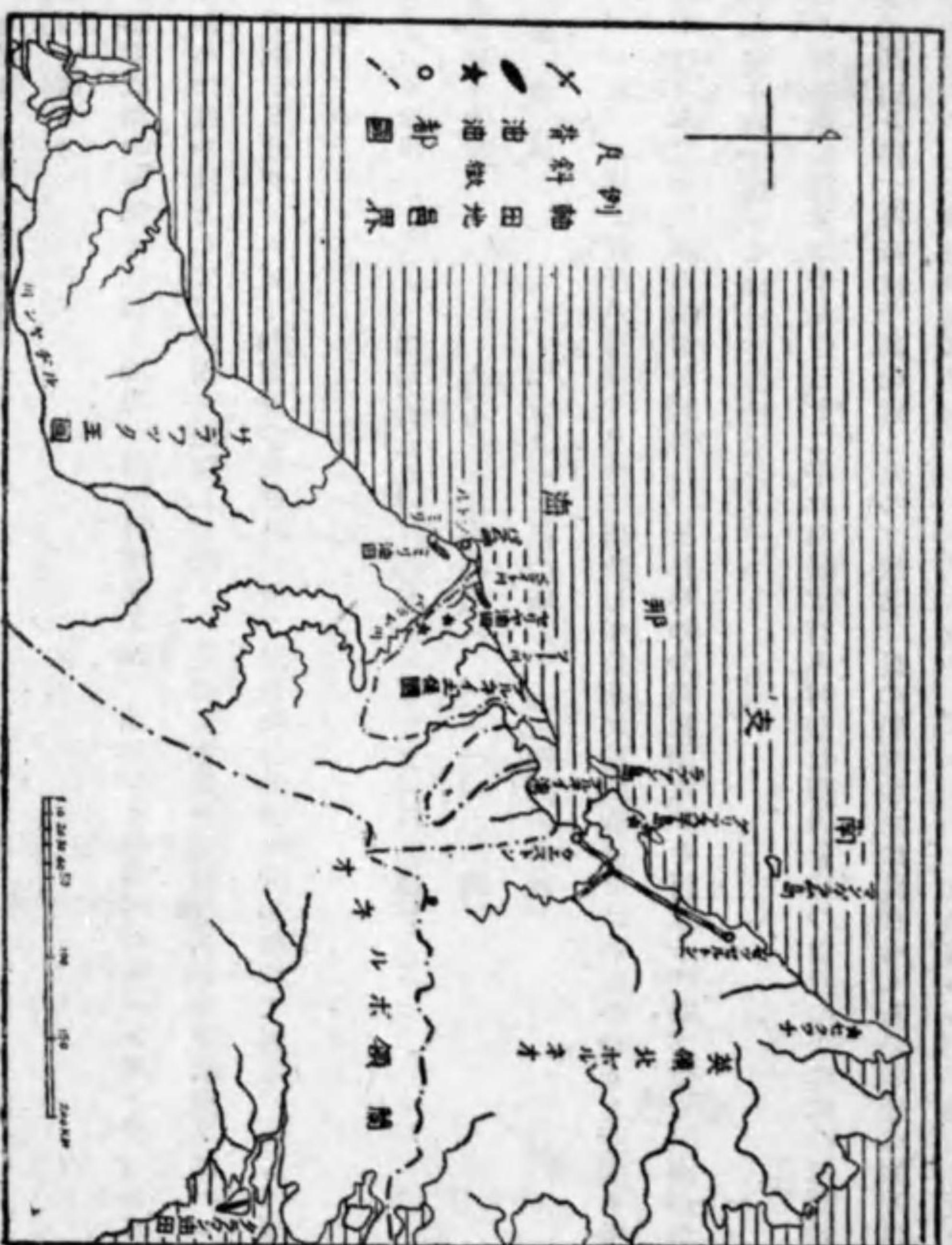
である。尙ほ日本人關係の鑛區は上に述べた半島の直南にあるサンクーリラン灣附近である。

英領ボルネオには二個の油田があつて、相接近しては居るが一つはサラワク藩王國領内、一つはブルネイ土侯國領内である。サラワク國內にあるものはミリ油田と云ひ、ブルネイ國內のものをセリア油田と云ふ。ミリ油田は千九百十一年以來出油して居り、現在では非常に減退して居るが、セリアの方は千九百三十一年の出油で、年々産油を増して居る。而して兩油田最近の産額の割合は次のやうである。

セリア油田 五八六五、〇〇〇噸（七五七噸）

ミリ油田 一、三四九、〇〇〇噸（一七四噸）

ジャバ島で最初に出油したのはスラバヤ港の港外で、千八百八十九年のことであつたが、之れが東印度諸島に於ける最初の出油であつたのである。今日ではスラバヤ港附近に五個の油田が開かれて居るが、之等を總稱して東部ジャバ油田と云ふ。該油田地域の西方に當り、凡そ八個の油田が開かれて居るが、之等を總稱して中部ジャ



第十圖 英領ボルネオの油田

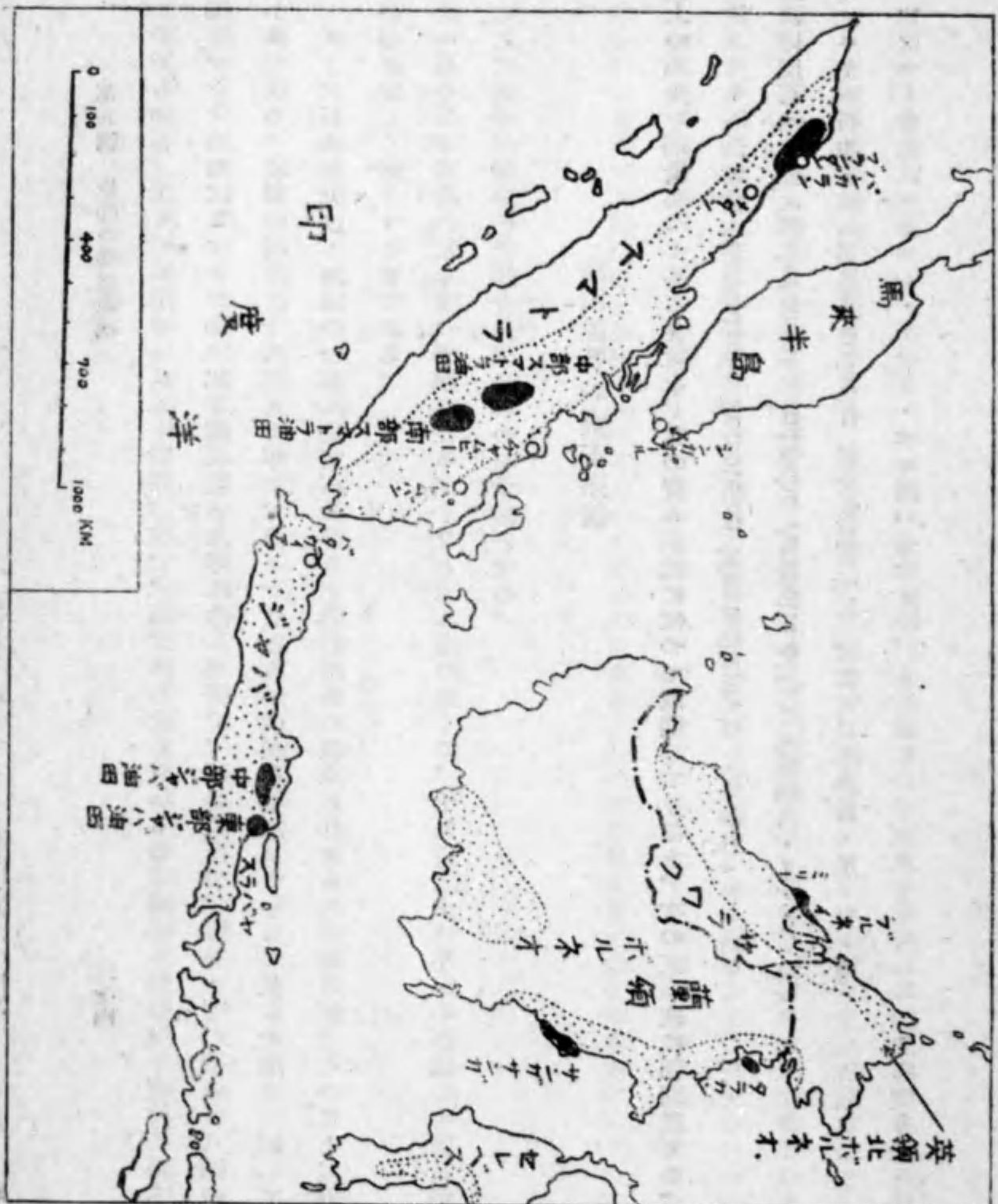
バ油田と云つて居る。

スマトラ島では島の南部と北部に油田が開かれて居るが、南部のものはバレムベン州とチャムビー州とに股つて居る關係から州界を境として二油田に區別して居る。従つて本島では南部スマトラ油田又はバレムベン油田、中部スマトラ油田又はチャムビー油田及び北部スマトラ油田の三油田に分かれて居る。而して現在の産額は次のやうである。

| | |
|---------|--------------------------|
| バレムベン油田 | 二三、六九九、〇〇〇噸 (三、一二五、〇〇〇噸) |
| チャムビー油田 | 九、七一九、〇〇〇噸 (一、二一一、〇〇〇噸) |
| 北部油田 | 七、五八七、〇〇〇噸 (九八四、〇〇〇噸) |

右の内、バレムベン州では千八百九十八年に出油して以來比較的緩徐ではあるが着々と産額を増加して今日に及び、現在では大小二十三個の油田が開かれ、それ等の分布範圍は凡そ百五十哩四方位で、海岸からの距離は最も近いものが五十哩、遠いものは二百哩である。

チャムビー州の油田開發は千九百二十二年に和蘭政府と特別な關係を持つ會社の手に依つて開始されたが、今日まで六個の油田を得て産額は千萬噸近くなつて居る。此の特殊會社に開發せしむるに至つた事情は歴史の項に詳しく紹介するが、此の如き特殊事情のあることが本油田をバレムベン州地域から切り離して取扱ふに至つた原



因の一つでもある。現在の油田地域は五十哩四方位で、海岸から最も近いものは南部と同様五十哩位である。北部スマトラ油田はスマトラ島の北東端に近い海岸に沿ふ地帯で、延長二百哩、幅三十哩の範圍に八個の油田が開かれて居る。最初の出油は千八百九十年で、徐々ではあるが産額を増加して今日に及んで居る。而してローヤル・ダッチ石油會社は本油田の一部に於て石油事業を営むために創立されたものであるが、そのことに就ては歴史の項に詳しく紹介する筈である。

セラム島の油田は島の北東端の海岸に在るプーラと云ふ港の近くで、千九百二十八年から出油して居るが、詳しいことは資料が無いので紹介出来ないのを遺憾とする。

油田經營の資本系統

以上の油田を經營しつゝある會社を、其の資本系統に依つて區別して見ると、次の三系統に類別出来る。

- バタフセー石油會社 (Bataafsche Petroleum Maatschappij) (略稱 B・P・M)
- 蘭領印度石油會社 (Nederlandshe Indische Aardolie Mij.) (略稱 N・I・A・M)
- コロニヤル石油會社 (Nederlandsche Koloniale Pet. Mij.) (略稱 N・K・P・M)
- バタフセー會社はローヤル・ダッチ・セル國の子會社で、東印度に於て石油の採掘並に製油に従事する多數の

同團に屬する會社の統御に當つて居る。言ひ換へれば東印度に於ける多數のローヤル・ダッチ系の會社は凡てバタフセー會社の子會社或は孫會社である。次の蘭領印度石油會社は前に記したチャムビー州油田開發のために創立されたもので、資本關係は和蘭政府五〇%、バタフセー會社五〇%で、其の經營はバタフセーで當ることになつて居る。従つて和蘭の資本も多數加はつて居るけれども實勢力は英吉利系にあるのである。第三のコロニヤル石油會社は北米合衆國のニュー・ジャーシー・スタンダード石油會社の子會社で、一九一二年の創立である。要するに右の三會社で東印度の石油産額全部を占めて居るのである。其の割合は次表の如くである。

| | | |
|---------------|------|------------------|
| バタフセー會社 | (蘭領) | 四、四八七、〇〇〇 兩 |
| | (英領) | 九三一、〇〇〇 兩 |
| 合 計 | | 五、四一八、〇〇〇 (六一%) |
| 蘭領 印 度 會 社 | | 一、三三二、〇〇〇 (一五%) |
| コ ロ ニ ヤ ル 會 社 | | 二、二四〇、〇〇〇 (二四%) |
| 合 計 | | 八、八八〇、〇〇〇 (一〇〇%) |
| | | (一兩=七・七噸) |

要するに東印度の産額は全部が英米系統の資本に壟斷されて居るのである。

次に右三會社の持つ油田の概要を紹介して置かう。蘭領印度石油會社は前に説明したやうにスマトラ島のチャ

ムビー州油田開發を主要目的とはして居るが、此の州以外の地域に二、三の油田を所持して居るために、此の會社の石油量にはチャムビー州以外のものが加はつて居る。コロニヤル會社の事業中心地はバレムベン州地域の一部で其處に在るタラン・アカル(Talang Akar)外二個の油田が、會社の所持する産額の九九%を産出して居る有様である。之れ以外の油田は北部スマトラに一個、ジャヴァに一個所あるが、産額は彼等のもつもの一%にも達しない。而して之等以外の油田は凡てバタフセー會社に屬して居るのである。即ちボルネオ島に於ては蘭領も英領もであり、ジャヴァに於ける殆ど全部であり、セラム島も全部である。北部スマトラ地域にては一油田がコロニヤル、他の一油田が蘭領印度會社に屬して居るだけで、凡てバタフセーのものである。

以上の如くバタフセーは東印度に於ける油田の大多數を占めて居るに對し、コロニヤル會社は比較的少數であるけれども、産油力旺盛であるためバレムベン州地域産額の約七〇%を所有して、バタフセー會社を賤若たらしめて居る。以上の外、未だ産油は持つて居ないけれども現に試掘を行つて居る會社は凡そ次の三つである。

- 1 蘭領太平洋石油會社 (Nederlandsche Pacific Pet. Mij.) カリフォルニア・スタンダード會社の子會社
- 2 蘭領ニュー・ギニア石油會社 (Nederlandsche Nieuw Guinea Pet. Mij.) バタフセー、コロニヤル及び蘭領太平洋會社の合同資本でニュー・ギニア島の油田開拓を目的とするもの
- 3 ボルネオ石油會社 (Borneo Oil Mij.) 日本人の参加せる會社 (略稱 B. O. M.)

南洋産石油の性質と航空ガソリン

東印度産石油中、タラカン島油田と英領ボルネオに於けるミリー油田のものは殆どガソリンを含まない種類であるけれども、其の他の油田のものは一般にガソリンを多量に含んで居る種類のものである。いくばくの程度に含んで居るかを知らるために、一九三九年度の蘭印政廳で發表した成績を掲げて見よう。

一九三九年度の全蘭領印度の産額は七百九十四萬九千噸、其の内で精製に向けられたものは七百二十四萬四千噸、其の殘餘は燃料油として或は原油の儘として賣却されたものである。而して其の精製成績は左の如くである。

| ガソリン類 | 二、五六八、〇〇〇噸 | 處理に對する% |
|---------|------------|---------|
| 燈油類 | 一、〇三七、〇〇〇 | 三五・三% |
| 輕油類 | 二、九〇二、〇〇〇 | 一四・二 |
| 機油類 | 四九、〇〇〇 | 四〇・五 |
| アスファルト類 | 一一一、〇〇〇 | 六 |
| 減失及其他 | 五六七、〇〇〇 | 一・六 |
| 合 計 | 七、二四四、〇〇〇 | 七・八 |

三 東亞共榮圈内の油田

右の成績を言ひ換へれば、蘭領産原油中からガソリンを含まないタラカン島産のものを除外した其の他のものを精製したものとも見られ得るのである。即ち蘭領産の石油はタラカン島のものを除く其の他のものは、平均して右表の如き製品を採り得る如きものである。即ち平均して三五%以上もガソリン分を含む如き軽質のものである。平均して之れだけのガソリン分があるほどであるから、含むことの少ないものでも二五%、多いものになると五〇%に達するものもある。場所に就て云へばスマトラ島産のものは含むとが一般に多くて、就中、北部スマトラ油田のもの最も多く五〇%に達するものは此の方面のものである。而してタラカン島の産油を加へた蘭領のものを以上の計算から推定して見ると平均三二%と云ふことになる。次に英領ボルネオ産石油に就ては詳しいことは發表されて居ないけれども、前にも述べたやうにミリー産のものにはガソリン分が無く、セリア油田のものには三五%も含まれて居るとのことであるから、大體の性質は蘭領産のものと同様と考へて差支へはないやうである。

尙ほガソリンに就て問題となるのは航空ガソリンの量である。この航空ガソリンの量は蘭印政廳の發表に依ると、一九三九年度分は四一六、〇三二瓩となつてゐる。これを同年度に製造されたガソリンの分量に比較すると一六・二%となる。即ち一九三九年度に採れたガソリン分中には一六・二%だけ航空ガソリンが含まれて居るわけである。又精製に處理された量に對しては五・七%に當り、蘭領全體の産額に對しては五・二%に當つて居る。

わけである。

ところが右の航空ガソリンは單に航空ガソリンと發表されてゐるだけで、オクタン價に就ては何とも説明してないから、此の點に就ては吾々が推測するほかはない。アメリカの習慣では普通に航空ガソリンと云へば、オクタン價の七八位のものから云つて居るやうであるから、蘭印政廳の云ふ航空ガソリンも此の程度のものと思つて善からう。而して此の程度の航空ガソリンが、平均して五・二%も原油の中にあると云ふことは、蘭印産石油が此の點に於ても相當優秀なものだと云へる。

製油所と石油の輸出先

以上の産油處理に關して製油所の狀勢を書き加へて置かう。

ボルネオ島の産油は英領領ともにバタフセー會社系であるが、蘭領の分はサンガ・サンガ油田の南方に在るバク・ババン灣に一大製油所を設け、主としてサンガ・サンガ油田のものとセラム島のものとを處理して居る。製油能力は一日約五千瓩、外に一日約一千瓩のダブス式分解蒸溜装置及び一大製蠟工場がある。製蠟工場に次で蠟燭製造の大工場があるが、蠟燭の向け先は主として支那である。又タラカン島には荒引装置があるばかりである。